
箱庭の少女、夕風の世界

双色

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

箱庭の少女、夕風の世界

【Nコード】

N0092J

【作者名】

双色

【あらすじ】

例えばツンデレな箱庭少女。例えば絶世の美少女女装男子。例えば強い女の子に憧れた侍少女。例えば自称恋愛の求道者な生徒会長。……そんな連中と過ごす平穏な学園生活。永遠に続いていくと思っていた日々は知らぬ間にパラダイムシフトを起こしていて……。しかし俺がそのことに気付くのは既に全てが変わった後になる。慌しくも穏やかで賑やかで儚い、それは交錯する想いが紡いだ一律の物語。——————思い出す世界の色は、いつも夕焼けだった。

0／ぷろろーぐ（前書き）

ご存知の方がいらっしゃると思います、双色です。

長いこと活動休止していません（汗

本作は完成が間に合えば来年の新人賞（応募先未定）に応募する予定です。

その為頻繁にプロローグや途中のキャラ設定、台詞などに改稿があるかと思われすがご了承下さい。勿論、物語を読み進める上では一切支障はきたしません。また、タイトルが作者の他作品に類似していますがお気になさらず。

それではこの作品が沢山の人に愛されることを願って――

『箱庭の少女、夕風の世界』――開幕です。

0／ぷろろーぐ

／
0

*

「子供の頃、あたしの知ってる世界は小さくて囲われた空だった」
そう言った少女の横顔は、夕焼けに赤く染まりながら愁いを帯びていた。

「ある日、自分の知らない世界が気になって家を抜け出したのよ。
そしたら、この世界は思っていたよりもずっと大きくて広かった。
街も、人も、毎日見上げていた空さえも見たことがないもののような気がして驚いた」

子供の知っている世界とは酷く矮小で、曖昧な認識に過ぎない。
例えばそれは御伽噺の本の中だったり、テレビに映し出される異郷の景色だったり。なんにしる現実に見にしたことがない世界を『どこかにあるもの』として知っているだけで、だからこそ本物に触れて驚愕するのは、当然といえば当然だろう。

「だけど、驚きの次にあたしが感じたのは恐れだった。自分の知らない世界の中で、まるで自分だけが取り残されているような感覚が怖かった。自分でも理由のわからない震えが、どうしても止められなかった」

自分の知らない世界。

急激に広がった世界。

それが人に与えるのは、自分の世界の拡張による喜びと同時に――
僅かな疎外感。世界の広さは時に残酷な暴力にもなりえる。

「それで考えた。どうして自分は震えているんだろう。なにがそん

なに怖いんだろう、って。……答えは簡単だった」

少しの間が沈黙を作る。

そうして、瞬いた瞳がこちらを見据えて言った。

「――あたしは、一人だった」

暗い影を落とす声。

憂鬱の色が翳りを見せた表情が、不意に記憶に訴えかけてくる。

まるで、その表情をどこかで見たような、そんな衝動が意識を襲った。

「その時だったのよ。一人の男の子が、名前も知らない男の子が声を掛けてきた。どうしたの？ 　って。あたしはそれが嬉しかった。今まで小さかった自分だけの世界が、その時初めて外の大きな世界と繋がった気がして。それで」

思い出すのは、遠い夕暮れ。

今日と同じ夕風の茜空。

霞んだ記憶の先にいる一人の少女。白い顔を夕焼けに染めて、涙を零しながら微笑む姿。

「気がついたら、あたしはその男の子が好きになってた。……それが、あたしの初恋だった」

ぎこちない笑顔を少女が浮かべる。

遠い過去。夕焼けを背中にして同じ景色を見ていた気がする。それがいつだったか。思い出そうとすれば遠退いて行く茜色の世界を手繰り寄せ、そしてようやくそれが形を成して記憶に顕現した。

夕焼けの記憶。濡れた笑顔。大きな瞳。一度だけ吹いた、夜の始まりの蒼い風。

忘れていたのではなく、思い出せなかった。

重ねた時の中で記憶が邪魔をし、そこに辿り着くのを妨げていたずっと昔の想い出。色褪せた心の奥の一ページ。始まりのページを彩る茜色を瞼の裏に焼き付けて、

「そうか。……思い出したよ、やっと」

口に出してみると、それはすんなりと受け入れることができた。

二人の始まりのページ。埋もれていた欠片を繋ぎ合わせて思い出す。

——また明日。

無邪気な声が聞こえてくる。泥だらけの少年の姿が夕焼けを背にしてそこにあった。

思えばそうだった。全てはあの日、十年前。重ねた痛み of 陰に隠れていた遠い夕暮れの景色。

空は、あの日と同じ世界の終わりの前に霞んだ夕闇だった。

1／「大嫌い」

1√the world in closed box

*

／
1

夕焼けの空に青が溶けていく。ただその様子をぼんやりと眺めていた。

とでも言えば、空の変化を楽しむ雅な印象があっただけかもしれない。

しかしより現実に迫った表現をするなら、この時の俺はただ途方に暮れていたと言った方が正しいだろう。まさか職員室に行っている内に他の生徒が全員帰宅しているとは思わなかった。何が億劫かといえば、最後に教室に残された人間の宿命として扉に施錠をし、その鍵を職員室に返却しなければならぬことだ。短時間に二度も同じ場所に足を運ばなければならないなど、面倒でなくて何であろう。

そんなわけで。

人気の絶えた教室で一人脱力しながら、近くの机に腰掛けて空を眺めてみたというのがこの次第にして真相だった。

数十分前の自分に何故荷物を持っていかなかったのかと文句を突きつけてやりたいが、それも叶わぬ願いであり俺は愚痴を零す代わりに溜息を吐き出した。

しばし人気の絶えた教室の雰囲気味わい、腰を上げる。

冷たい風を吹き入れる窓を閉め――飛行機雲発見――続いて黒板横に吊るされた鍵を取りに向かう。

教室の扉が開いたのはそれと同時にだった。

「なんだ律、こんなところにいたのか」

そう言って、いつもの飄々とした表情で蒼が立っていた。

「こんなところでも一応俺達の通ってる教室だ。いて悪いかよ」

「放課後の教室だぞ。こんなところで語弊はない」

腕組して蒼が歩き出す。

「それともおまえは、放課後まで教室に残っているほど真面目な生徒なのか？」

一本に括った長髪が侍を思わせる立ち姿。身長は別段高いというわけではないが、凜とした顔立ちや切れ長の瞳がどうにも近寄り難い威圧感を醸し出している。そこへ来て部活では剣道部の主将を務め、全国大会出場を成し遂げるほどの腕前を持っているというからとんでもない。化物か。

白い顔は、今は夕日に染められて朱が混じっていた。

「降参。おまえが正しい」

こういう時はさっさと退くのが肝心だ。

「おまえ、本当にあっさり負けを認めるんだな」

「そうすることが最善だって知ってるからな」

今のやり取りに勝ち負けの概念が存在しているのかどうかは、今は気にしないことにした。

「ん？」

突然なにかに気がついたように蒼が首を振って周囲を見渡す。侍のようなポニーテールがひよこりひよこりと揺れる様子が、愛嬌があるというかなんというか。非常にコメントの難しい姿だった。

最後に俺の背後を覗き込んでから、ふむ、と勝手に何かを納得したように鼻を鳴らして、

「今日は遊季と一緒にじゃないんだな」

「まあな。別に二十四時間いっしょにいるわけじゃないよ、俺達も」
「当然だ。寝る時までいっしょじゃ、友人として一言言ってやらねばらない」

おっと。

そういう切り返しで来るのか。遊季のことは蒼も知っているので、こいつがなにを指摘しているのかはつきりと解りかねるが、だとしても俺の返答は一つに限定されている。言葉を選ぶ必要もなければ慌てる必要もない。ただ質問に対して必然で決められた科白を返せばいいのだから。

「あいつは俺にとっての戒めみたいなものだ。それ以上のことはない」

「友人をそんな風に言うのは頂けないな……。まあ、いい。話を戻そう。……あー、おまえが皮肉れた勘違いをするからややこしくなった。いいか、私が『遊季といっしょじゃないのか』と言ったのはそんなことを揶揄したわけじゃない」

蒼が言葉を区切る。沈黙の間に俺に自分の意思を読み取れと訴えているらしいがしかし、仁王立ちして腰に手を当てた蒼の姿は持ち前の鋭い目付きや圧倒感と相俟って拷問官みたいだった。本人は自覚していないだろうが、こうなると常人は蛇に睨まれた蛙状態に陥り逆に口が利けなくなるので有効とは言えない。

もっとも、長いこと幼馴染みをやっている俺には関係ないが。

「解ってるよ。生憎と今日はこの後からバイトなんだ。遊季には悪いが一人で行ってもらった」

「そうか」

呆気なく蒼は頷いた。すると直ぐに呆れたようなため息を吐き出して、

「しかし律、この学校はアルバイト禁止だぞ。仮にも校則には厳しいことで知られているというのに、そんな学内で、あまつさえ生徒会副会長の前でその発言とは……さては取り締まられたいのか？」

確かに。この学校は校則に厳しい。染髪は禁止されているし、制

服も下手な改造を加えれば買い直しを強制される。だがそれはあくまで禁止というだけであり、ある程度なら破ったからどうということはない。

服装や容姿については毎週校門前で点検が実施され、熱心な現生徒会長が自ら検査官を勤めている。その生徒会長様というのがとんだ女誑しで、実際のところ服装点検の本当の目的は『学年を問わずより多くの女子に自分を認識してもらい、かつ自身も学内の女子を取り零しなく把握する』というものらしい。

「……なにをやってるんだろうな、生徒会は」

「ん？ なんの話だ？」

「なんでもないよ」

本当はかなりなんでもあるのだが。

服装点検に限らずその他の生徒会業務の実情を知るのは当事者と俺だけであり、俺は口止めを受けているので真実を軽々に口外するわけにはいかない。それに相手は蒼である。真面目な性格のこいつにそんなことを話してしまえば、生徒会室に巢食う女の敵を粛正しかねない。いや、確実にやるだろうこいつなら。

「それはそれで面白そうか」

つい口をついてしまった言葉に蒼が首を傾げる。俺の心中が読み取れず怪訝な表情を見せていたかと思うと次の瞬間には、そういえば、などと口にし、

「面白いと言えば、この間興味深いことを聞いたのだが」

何てことを言い出した。

基本的に蒼は周囲の女子とずれた部分がある。高校二年の少女にとって興味のあること、といえば身近なところなら迷信ともつかない都市伝説や生徒間の恋愛事情などなのだろうが、蒼の場合は違う。蒼はそういった一般枠の面白さには興味がなく、こいつが興味深いことと称するならそれは真性の『面白いこと』なのだ。当然気になってしまう。

「どんな？」

内容を促す俺に、蒼は表情一つ変化させずに言った。

「うん。童貞という生物は、女偏の漢字を見たり聞いたりするだけで興奮するらしいな」

訂正。

蒼爽架。

この女の感性は根本的に一般枠から飛び出していた。

「試してみてもいいか？」

「つまりおまえは、俺が童貞だと考えているわけだな……」

「違ったか？ まあなんにしろ、試してみれば解る」

「例えそうであつたとしても、そんなことで興奮なんてしねえよ」

「それじゃあ行くぞ」

「だから——」

「大嫌い」

「——興奮しねえよ！」

不意に大音声を上げてしまう。いや、だって、いくらなんでも『大嫌い』なんて言葉のチョイスはないだろう。しかも単純に『嫌い』ではなく強調して『大嫌い』だ。逆ならあり得るかもしれないが、仮に蒼の持ち出した迷信が真実だったとしても、これで効果があるのは一部の白虐嗜好者だけだ。

「おお」

蒼は目を見開き、しかし俺の声に驚いたのではないらしく、

「どうやらこの話は真実だったらしいな」

などと感心している。

……もはや突っ込む気が失せていた。ダメだこいつ、救いようがない。

うんうん頷いている蒼の姿はそれはそれで見る奴が見れば需要があるのかもしれない、俗にいうギャップがそこには垣間見えた。体育会系でありながら成績もいい蒼だが実は結構天然なのだ。言い換えるなら、単なる変人ともいえないくはないが。

「……ところで」

無気力な声で俺が切り出した。

「おまえこそ、教室に何の用だ。忘れ物でもしたか？」

最初のやり取りから引用した皮肉を含んだ質問だったが、蒼はそれに気付かない様子で——あるいは気付いていて流されたか——ん、と思い出したような声を漏らした。

「うん、そうだった。律、おまえを探してたんだよ」

「俺を？」

と一瞬驚きつつも直ぐに用件に察しが付く。

「……まさか、あいつか」

「生徒会長様だ」

「やっぱり、九ノ瀬か」

「頼みたいことがあるそうだ」

「断る」

即答。

案の定蒼が眉を寄せて睨むようにしてきた。

その表情に恐れをなしたわけではないが、直ぐに弁解を入れる。

「また面倒事を押し付けるつもりだろう。悪いが、そんな暇があれば遊季と帰ってるよ」

同意を求めると、蒼は存外あっさりとこちらの言い分を受け入れた。

「それも……そうだな。うん、その通りだ。すまなかったな」

どころか表情に愁いを見せて所在なさ気にしている。

謝るほどのことでもない。変な部分で責任感や罪悪感を感じてしまうのは蒼の長所であり短所であると思う。まあ、そういう性格が評価されて副会長に当選したわけでもあるのだが。今のところはプラスに働いているようなので指摘してやるほどでもない。

「それじゃ、俺はそろそろ帰らせてもらうよ」

「解った。では鍵は私が返しておこう」

生徒会室は職員室とは別の校舎にある。九ノ瀬の伝令で来たのなら蒼はこれから生徒会室に戻るのだろうし、もし仮にそうせず部活

に向かったとしても剣道場は位置的により遠くなる。どちらにしたところで、職員室に寄って行くには単純にエントランスへ向かう俺の方が手間が小さい。

「いいのか？」

「構わない。時間を取らせてしまったしな。それくらいの手間は手間とは思わないよ」

心底親切なことを爽やかな笑顔に乗せて言われると、その行為を無下に扱うのは申し訳ない。

俺は短く礼を言ってから教室を出、背中で聞いた別れの言葉に片手を挙げて返事をした。

1／不可抗力な出逢い頭

／2

この時季の空は暮れ始めがまるで示し合わせたように終業の鐘に呼応していて、校舎を出ると先刻まで半々の割合で染まっていた空が半分以上も夕闇に侵されていた。

沈んでいく太陽が世界中をオレンジ色に染め上げながら地平線の向こう側に消えていく。別れを惜しむように色濃く足跡を残しながら着実に。この景色が見られるのもまた明日までお預けである。とはいえ。

太陽にしてみれば年中無休の二十四時間営業で、実際のところ夜の間だって地球の裏側で輝き続けている。どこぞの国には夜さえも陽が沈まない日があるらしい。つまり休んでいるのは太陽ではなく、照らされる俺達の方ということだ。

循環を繰り返す存在にとって終焉や邂逅という概念はあってないようなものであり、巡り巡る世界の果ては人間にとっては遠過ぎる。そんなことを考えつつ夕風。

学校を出てから三十分ほどが経ってからの独白だった。

「……しまあ」

ぼんやりと夕日を眺めているだけでこれだけ思想を巡らせてしまうのは、俺が暇を持て余している証拠なのだろうか。

蒼を通して掛かった九ノ瀬の招集を無視してきたとはいえ、別にそれほど切羽詰っているわけではない。現に俺は先の独白を繰り広げるほどの時間を余していた。しかしながらそれは九ノ瀬の呼び出しに応じていられる程のものではなく、いつてしまえば束の間という程度の時間である。

まあ何にしろ、時間があってもなくてもそんなものは無視していたのだろうが。生徒会の雑務を無償で引き受けるほど俺はお人善ではない。それに九ノ瀬にもたまには自分で仕事をさせるべきだ。女子の品定め以外の真っ当な仕事を。

しばらく吹いていなかった風が一陣駆け抜ける。

水面を撫でる風が波紋を作って通り過ぎ、しばしその様子を眺めていた。

一瞬視界がぶれる感覚に襲われる。網膜に焼きつくのは去来したいつかの光景。覚えているようで覚えていない、現実のようで幻のような歪な世界。強く焼きつく夕日が唯一世界の色であって、その単色が支配した景色。

不意に訪れた喚起が泡沫の間に綻び、次第に現実の色を取り戻す。刹那の間茜色に染まった世界が再び中途半端に青を含んだ景色へと回歸し――そこに一人の少女を見つけた。

アスファルト舗装された土手の淵に座り込み、視線は遠く茜に霞む地平線。夕日に照らされた端正な白い顔がどこか儚げな印象を与える。消え行きそうに脆く、どうしてか涙を堪え震えているような虚ろな瞳。

吹きぬけた風の影響で乱れた髪を白い指が元の位置に戻す。

目が合ったのはその時だった。

「何よ、なんか用？」

十年前からの知り合いのような口調と、先刻の空虚な瞳とは正反對の鋭い視線。その姿は臨戦態勢でいながら即座に撤退できる距離を保ったままこちらを見ている猫に似ていた。

敵対的な少女の姿勢に第一印象を完膚なきまでに破壊し尽くされた俺は、そのあまりのギャップに自分でも出所の不明な溜息を吐く。その溜息を気取られたか、返事を忘れていた俺に明らかな不満の色を募らせた黒い瞳が威嚇するように輝いた。

「なんとかいいなさいよ。もしかして変質者なの？」

「違う」

「あっそう。それじゃヘンタイなんだ」

「なんでそうなるんだ」

広義では同じ意味の言葉だと思うのだが。

呆れて言う俺を大きな瞳が警戒心を湛えて見据えている。初対面の人間にいきなり話しかけられたのだから当然なのだが。それだけではなくこいつの場合は加えて挑発的な印象を受ける。強固な意思を孕んだ視線に低い位置から見下されている気分だった。

不意に少女の服装に目が留まる。

今更ながら俺はそれがまさしく自分の纏う制服と同じデザインを模した女子用の制服であることに気付いた。

「おまえ、市坂の生徒だろ？」

細まった瞳が一層警戒の色を強くする。

「なんで解ったの……」

怪訝な眼差しが動揺を隠そうとしているが、むしろそれは逆効果で揺れる胸中が筒抜けに窺えた。

質問その一、解答。制服を着ているのだからどこの高校かなどということとは薄明で、しかも同じ学校の生徒とあれば尚更だ。対象がコスプレイヤーでもない限り、この見立ては確実に間違いではない。こいつの場合、どう見たって在校生である。

しかしながら素直に種を明かしてしまうのは面白くない。

「実は俺、透視能力があるんだよ」

「う、嘘だ……!」

「市坂高校一年だろ？」

「だからなんで解るのよ!」

質問その二、解答。制服の校色。ブレザーの胸ポケットに刺繍された校章を彩るのが一年の赤だったことから、学年を割り出すことも可能だった。ちなみに一年ということはこの場における両者の上下関係は明らかだが、果たしてそれに気付いているのは俺だけなのだろうか。

……俺だけだろうな。

未だ俺が披露したエセ超能力が信じられないらしい少女は、どうやら本気で種が解らないらしく、先程からこちらをジト目で凝視している。黒水晶の瞳に自分の顔を探しながら思う。もう少し視線を下れば案外簡単に答えは見つかるというのに。

「……解った」

苦虫を噛み殺した表情が重々しく眩く。解ったというが、この様子では何かに気付いたようには見えない。自分の中で何らかの議題における妥協案を認めたといった風である。

果たして。

少女は俯けた顔を挙げて言い放った。

「それじゃあ、あたしの下着の色、当ててみなさいよ」

「……」

質問その三、解答。知るか。

公然猥褻罪的な発言と視線を宛てられて確信した。アホだこいつ。呆れ返る俺の様子を客観的に描写するなら、きっと開いた口が塞がらないとでも表現されるだろう。それぐらいに呆然と啞然の極地に俺はいた。

少女が眉を顰め、脚が打ち鳴らすように地面を蹴り華奢な体が跳ね上がる。腰に両手を当てて仁王立ちの傲然とした態度だが、僅かに紅潮した頬が迫力やら威圧感やらを根こそぎ剥ぎ取っている。台無しだ。

「どうせ超能力なんてそんな風にしか使ってないんでしょ！ ほら、言ってみなさいよ！」

「アホかおまえは」

若干暴走気味になっていた少女の額に手刀を軽く振り落とす。ふわっ、と悲鳴なのか何なのか理解に苦しむ声が上り、それほど大したダメージにはなっていないはずだが明らかに大袈裟なりアクションで少女は飛び退き患部を両手で押さえていた。

目の色が警戒の黄色信号から敵対の赤に完全な変化を遂げたのは正しくその瞬間である。一步引いた脚がどのタイミングでも踏み切

りが可能な程度に緊張している臨戦態勢。額に当てた手が決めポーズのようで緊張感がない。

「いきなりなにすんのよ!」

怒声。

「上等! 喧嘩なら買ってやるんだから! ……覚悟しなさいよ、あたし、手加減出来ない質だからね」

少女の体が沈む。上体が傾斜し、脚は、瞬間の踏み切りに備えて勢いを溜めている。

「――うっかり骨とか折れちゃっても、泣かないでよねっ!」
黒髪が靡く。

宙に流れる長髪が秒速で駆ける弾丸の刹那に描く黒い軌跡を思わせる直進。そして元より短かった距離は瞬時に詰められる。急停止した反動を利用して、極限まで弦を絞った矢のごとく少女の体が放たれた。

「歯、食い縛りなさい!」

弾丸から一本の矢へ。高速の一撃が飛び掛ってくる。
そして俺は。

矢の進行方向に拳を構えた。

「必殺――」

こっん。

「――いったあーっ!」

停止した体を慣性で長髪が追い越していく。

頭部を銃弾で打ち抜かれたように体を仰け反らせ、少女が尻餅をついた。

なまじ疾走の勢いが半端でなかったこともあり、これは意外と利いたのかもしれない。拳ではなく掌にしておくべきだっただろうか。少女の額がどれくらいの衝撃を受けたかは俺も拳を介して少なからず理解できた故に、小さな罪悪感もなかったといえは嘘になる。

「痛たたあ……」

右手で額を、左手で腰を摩りながら涙目。

「あーもう！ なんなのよあんた！ どこの達人よ！」

どうやらまだ戦意は失せていないと見えて、語調や視線からありありと伝わる敵意はもうじき殺意に変わろうとしていた。だが言葉や意思とは裏腹に身体が受けた負傷は大きいらしく、なかなか立ち上がろうとしない。

和解を申し出るならば戦鬪狂が動けないこの状況しかないだろう。「悪かったよ。ほら、立てるか？」

近づいてみると、同じだけ少女が距離を取る。伸ばした手は何の感触も得ないまま宙を泳いだ。

試しにさらに一步踏み出してみるが結果は変わらず。立ち上がらないまま後退して少女は逃げていく。前回との違いといえば距離を取った少女が小さな苦悶の声を上げたことで、無理な姿勢が腰に負担を掛けたようだ。

差し出した手を引っ込めて、これ以上の接近を諦めた。

依然として警戒を解こうとせず、どこか余計にその色を濃くした少女の瞳に諦観して息を吐く。

「なによその眼……。ふんっ。女の子相手に喧嘩して、挙句勝利の美酒に酔ってるっての？」

「酔ってねえよ」
「ていうか飲んでない。」

「いっとくけど、未成年の飲酒は禁止されてるんだからね！」

「……全部おまえの早とちりだろ。俺は初めから喧嘩なんて売ってない」

俺は無視することを覚えた。

「……むう」

頭に一発ショックが入ったことで臨界点に達していた熱が幾らか冷めたのか、この俺の発言には反論がなかった。しかしながら、反論がなかったというのがこの場合逆に問題だったのかもしれない。理屈では自分が反駁出来ないと悟った少女は、唇を噛み締めながらそっぽを向いた。

……何をやっているんだろう、こいつは本当に。

ちっこい体とは裏腹に人一倍意地張りであるらしい。

戦況——そもそも一方的に俺が攻められたただだが——が落ち着いたところで再び和解策を持ち出す。

「解つたらもういいだろ。ほら立てよ」

再度距離を縮め、素気無くされ続けた米国風の挨拶を試みる。

顔を背けていた少女は数ミリ程度首を動かし、差し出した手を一瞥した。

「解つたわよ。……言つとくけど、謝つたりなんてしないんだからね」

「構わねえよ」

「それに！ ……負けてないんだからね。引き分けよ。一旦休戦してやるだけだからね」

「そうかい。それじゃあ、その休戦が永遠に続きますように」

切実な願いを感情のない言葉で呟き、休戦協定に調印する。

苦い顔で振り向いた少女顔は沈む太陽の西日に染まっていた。そうして、名前も知らない下級生はこれまで汚物に対してそうするかのように避けていた手に触れようとして——

「あつ」

気付いたのは俺が先だった……と思う。咄嗟に出してしまった声は回収不能で世に放たれ、虚空を泳いで一番届いてはいけない岸に辿り着いた。問題は無意識に反応してしまったことではない。声が出てしまったのも本来なら修復可能な程度の細事であり、問題は、

「あんたね……」

新たな明かりを灯して燃え上がる純黒。消えたはずの火が今一度輝きを取り戻す。

問題は声を上げてしまったことではなく視線。俺が放った視線の矛先はあろうことか、問題の部位へ向かっていた。——眼下で倒れて惜しげもなく晒された、少女のスカートの中身へ。

「結局それが目的だったんじゃないのよッ！」

「違ッ、不可抗力だって――」

弁解虚しく。

跳ね起きた少女の強烈な上段蹴りを顎下に喰らい、俺は続く言葉を発することなく天を仰ぐことになる。舌を噛まなかったのがこの場合不幸中の幸いだっただろう。

意識を揺さぶられる一撃に痛覚を過剰刺激され、姿勢が後方に傾ぐ。

そしてその中で、俺はフィードバックした数瞬前の光景に先の独白を改めた。

質問その三、解答訂正。――水色と白の縞。

夕陽の映える茜の世界は、もうじき蒼い夜を迎えようとしていた。

1／キャッチボール（前書き）

サブタイトルの「／1」は、つまりは第一章という括りの表現です。のでミスではありません。紛らわしくてすいません（汗）

普段はサブタイトル付けないので、久々に付けたいなーとか（ネーミングセンスの鍛錬）

では、そんな惑わしサブタイトル「／1」は今回で最後です。
コメディーっぽくない……と思う方、遠慮せず罵倒を浴びせてくださいな。

1／キャッチボール

／3

*

もう会うこともないだろうと思っていた。

現在の時刻は午後十時三十分を少し過ぎた頃。いつもの河原沿いに差し掛かった俺の脳裏に浮かんでは、そんな願いにも似た根拠のない一言だった。しかし一切のプライドや羞恥をかなぐり捨てて正確にいうのならば。もう二度と会いたくない、が正しいのだが。

なんのことかといえば、それはもはや述べるまでもないと思う。

夕刻に見舞われた殺人的な一撃は脳天を貫く衝撃でもって俺の意識を朦朧とした白いところへ運び去った。そうして世界の裏側辺りを浮遊していた自我を取り戻したのは、およそ悲劇から数十分後のことになる。気がついたときには激痛が患部だけでなく全身を駆け巡っていて目覚めは最悪。それでもダメージのほどを考えれば絶命してはなかったただけ幸運と思わなければならないのかもしれない。

……というのは勿論過剰表現で、現実には絶命どころか気絶すらしなかった。だが顎下を襲った蹴りの衝撃は確かに失神寸前まで意識を追いやってはいたし、倒れ伏した全身が本来痛むはずもない部分で痛覚を絶叫させていたのもまた紛れもない事実である。非日常的な痛覚を表現するなら、それが大袈裟になっても仕方ないことだろう。

その後。

名前も知らない先輩を蹴り上げた一年女子は髪を翻して憤然と歩き去り、名前も知らない後輩に撃沈させられた二年男子がバイトに遅刻することで事態は収束した。

結局誰に得があったのか、そもそも損得勘定の適用される事象であるかも不明な暴力事件から数時間。まだ痛む患部を気にしながら夜道を歩く俺が、夕陽の演出がなくなったことですっかり暗く静謐に沈んだ河原沿いに差し掛かって抱いた感想が前述の一言だった。

人の出会いは一期一会。もう会うことはきつとない。……きつと。

「ない……んだよな」

絶望を感じさせる呟き。

途端、歩みが止まった。

均等に立ち並んだ街灯が照らし出す円形の空間が夜の世界で露になっている。さながらスポットライトが当てられているかのようなその内の一つに、俺の眼球はとんでもないものを認めていた。

丁度光の輪を三つ挟んだ距離。

手前のそれから数えて三つ目に、奴がいた。

「……」

「……あ」

今度の呟きは俺ではなく、夜の静寂に響いたのは涼やかな声音であつた。

世界が静止する。

ぴたりと固定された視線が一部に縫い付けられて黒瞳から逸らすことは叶わない。性質の悪い呪いに掛かった心地で俺は自らの状況を鑑みた。俺がそんなことをしている間に、奇しくも二度目の邂逅は、

「……何よ、なんか用？」

一度目と同じ言葉により迎えられる。

なるほど、これがデジャビュという奴か。どうやら冗談を交えて思考できるくらいには、俺の精神状態は安定しているらしい。

「なんか用かって訊いてんのよ！」

いきなり怒鳴られた。

相当ご立腹の様子である。怖い。

「いや、別に用ってのはねえけど……」

「おっけー。宣戦布告ね。了承したわ。さあ、戦争を始めましょう」

「おまえの耳はどんな構造をしてやがるんだ」

「賽はどうに投げられたわ」

「おまえによってな！」

じり、と砂利を踏む音がした。夜に煌く漆黒の眼光は、さながら発砲直前の銃口の輝き。

冷たい夜風が身を切り裂く刃となり、熱を帯びて闇を焦がす。一触即発の緊張感が張り詰める中、

「って……あれ？」

場違い過ぎる空気を正常化したのは、それを発生させた本人の感動詞二節。後に残ったのは間抜けなほどに平穏な日常だった。

臨戦態勢を解き、そうして少女はようやくにしてその事実を口に
する。

「あんた、それって市坂の制服よね？」

きょとんとした面持ちに尋ねられる。

今更に過ぎる発見に俺が首肯による無言肯定を返信すると。

「……てことは、え？ あ、そっか、だから解ったんだ」

一人でどんだん疑問を解決していく。納得の度に漏れる呟きはさ
らに続いた。

「それじゃあ、えっと、つまり透視ってのは嘘で——」

街灯に照らされた表情が、夕方のそれとは明らかに違った理由で
赤く変色していく。ぽかんと開いた口。絡まっていた疑問の糸が解
けたことによる爽快を表したままの面持ち。そして次の瞬間に大気
を揺らしたのは絶叫だった。

「じゃ、じゃあ！ あたし、パンツ見られ損じゃないっ！」

響き渡る叫び。見開かれた眼がぎょろりところらを向く。

え……なに？

「つぎけんじやないわよ！ あんたやっぱりヘンタイじやないのよ！」

「いや、ちょっと待った！　ありや不可抗力だ！」

全否定できない俺がいた。

誤解だが、なんにしても見てしまったことは事実である。……原因が俺の嘘であることも。

「もー！　どうせあの後、記憶を頼りに『ぐへへ』とか『ふへへー』ってしたりしたんでしょ！」

「してねえよ！」

限りなく抽象的な決め付けだった。伏字のつもりだろうか。

天井知らずの怒りが、その矛先を一ミクロン単位でぶれることなく俺に突きつける。

「このバカ！　ヘンタイ！」

罵倒を連呼しながらずんずん近づいてくる。留まることを知らず吐き出される無実の糾弾を投げつけられつつ、同時進行で物理的な距離は着実に縮まっていく。暴力に訴えることはないが、どこかで際限の外れた少女は激情の決壊を抑え切れず、言葉は前進の代償のように繰り返された。

「お、おい、落ち着けよ！」

「うるさい黙れ死ね木っ端微塵になれえ！」

接近を牽制しようとして手を出し、両者を隔てる距離がほんの僅かしか残されていないことに気付く。このままでは衝突は避けられない。当然、少女の踏み込みに対して俺は後退するしかなかった。

三步ほど退いたところでバランスが崩れる。傾ぐ姿勢。踏み違えた右足。

崩れた重心を修復するために体を旋回させ——河原が背になる体勢———どうにか持ち堪える。

「地獄に落ちろ！　バカ！　馬鹿ばか莫迦バカあ！」

「ちょ、待ってって、これ以上はやばい——」

勿論。

待ってくれなかった。

止むを得ず半歩下がる。が、苦肉の策であることを理解していたそれが予想の範疇内でありながら驚愕を生んだ。

突然に崩れる体勢。背後が傾斜になっていたことは認識していたので、脚を引く幅はぎりぎりにしていたはずだった。だがこの暗闇や無理な体勢、迫り来る少女の威圧など、様々な要因の下に距離の判断を誤ったらしい。

反った姿勢を戻すことは不可能で、既に抵抗のしようがないほど強大化した重力が強制的に天を仰がせる。夜空に疎らな星の下。俺は盛大に背中から斜面を転がり落ちた。それはもう、喜劇染みた勢いで。

「え？ うわっ、ちょっと！」

ほとんど密着状態にあった両者の位置関係が喜劇（悲劇）の連鎖を生む。少女の踏み込んだ脚は瞬間前まで俺が踏んでいた位置より少し奥に下ろされ、平面であると信じて疑わなかった地面に裏切られる結果になった。前進の勢いが全て置換された状況下で、その後何が起こったかは二の轍を踏んだとだけいっておこう。

廻る視界。世界が震撼していた。

それはもう悲惨なほどに頭や体の各所をぶつけて、とうとう行き着くところまで行き着いた俺は頭痛に魘されるように呟いた。

「……厄日だ、こんちくしょう」

仰向けで地面に伏し、真っ暗な夜の空を見上げる。

頭の中がまだ揺れてやがるし、目も回っていて気持ち悪い。どんな悪いことをしてこんな仕打ちを受けているのだろう。……いやまあ、原因は俺なんだが。夕方、どうやら俺はとんでもない外れフラグを立ててしまったらしい。

眼に映る果てまで全てを埋め尽くす黒い壁面。アクセントのように散りばめられた星の輝きが頭痛の比喻に思えて苦笑する。ありやなんだ。やまねこ座か？

「……そんなの見えるわけじゃないじゃない」

何気ない疑問を否定する声。

声が「痛たたあ……」と一度聞いたことのある台詞を挟んでから続けた。

「見えても精々北斗七星くらいだよ、この辺だと。だから……うん、あの辺りがおおくま座かな。田舎とかだったら違うんだろうけど。ていうか、やまねこ座なんて肉眼じゃどこ行っちゃって見えないわよ」独白のつもりが口に出ていたようだ。比較的落ち着いた雰囲気の声が俺の言葉を正した。別段本気でいったつもりはないのでそのことについてはなんとも思わないが、問題は声がした位置である。

頭を起こして声の方向に眼を向けてみれば、案の定。暗闇でも確認できる、ちょうど腹の上くらいに白い顔を発見する。なんだかもう慌てる気にもならない。

「もう……邪魔。さっさとどきなさいよ」

「乗っちゃってんのはおまえだ」

落ち着いてるようで、実は内情が錯乱していたりするのか。

「……ふん。今回だけはあんたの口車に乗せられてやるわよ」

「いや、事実だから。俺の言ったこと」

しかも既に口車には定期券が必要と思えるくらい散々乗ってもらっている。その行き先がこの結果だから、どこかで運転手がストを起こしてくれていたらよかったのに。

十字に重なる形になっていた状態が解除され、俺とは逆にうつ伏せで倒れていた少女が体を起こす。腕立てに似た運動でバネ仕掛けのように上体を跳ね起こすと、勢い余って尻餅をついていた。

「わざとよ!」

「そうかい」

言い訳された。知るかよ。

むう、とか唸りながら制服の汚れを払っている少女の姿を眼の端に引っ掛けて俺も立ち上がる。同じ様に制服についた土を手で落として、何気なく首を上空へ向けた。田舎とはいわないまでも、都会というには発展に乏しい街の夜空。天気がよければ星は結構に綺麗

に見える。人口の灯りに慣れた人間の眼には映らない天然の輝きが、街灯の支配下から外れることで確認できた。

なるほど気付かなかった。今日の星空が、意外と綺麗だったことに。

「星に詳しいんだな、おまえ」

視線をそのままにして、俺が話しかける。

「……まあ、それなりにはね。詳しいってほどじゃないと思うけど」

「好きなのか、天体とか？」

「別に、そういうんじゃない」

声が途切れて、俺はそこでようやく少女を見た。

初見で窺えた儂い横顔が星の天蓋に傾き、そして、ぼんやりとした遠い声が――

「――あたしにはただ、それしかなかっただけ」

憂鬱な、言霊だった。

かと思えば次の瞬間にはスイッチで切り替えたみたいに表情が変化して、

「ねえ、ちょっと」

不機嫌と無表情の狭間にある微妙な顔がこちらに向く。挑むように睨むような瞳が発する鋭い眼差し。星明りの下で輝く眼光が寸分外れることなく俺の眼球を射抜いた。

「……キャッチボールするから。付き合いなさい」

「はあ……？　なんだって？」

「キャッチボール！」

いや、聞こえてる。

「ボールは？」

問う俺に、ふん、と鼻を鳴らして汚れで黄ばんだ軟球を見せ付ける。

「さっき拾ったの。転がってるときに」

「物凄い反射神経だな。あ、いや、動体視力か？」

どっちでもいい。

「ていうのは嘘で、今拾ったのよ。ばーか、騙されちゃったー」

「……嘘を吐く意味がまったく解らん」

本心から意味不明だった。少しだけ楽しそうな表情の訳もまた、一ミリ程度も解せない。

「仕返しよ。仕返し。やられっぱなしは性に合わないから」

「何の仕返しだ。……ああ、なるほど解った。もういい」

よくよく考えれば先に嘘を吐いたのは俺の方か。しかしながら、俺の吐いた虚実は嘘と呼ぶにもお粗末過ぎる戯言で、こいつのは妙なところでリアリティがありながら欠片も意味のない捏造だ。別にどこでボールを拾ったかなんてどうでもいい。

俺がなんといっているいいやら解らず黙っていると、だから、と沈黙を裂いて少女が声を落とした。

「だから……これで手打ち！ 終戦協定よ」

そういつて。

ボールを握っていない方の手が、俺に差し向けられた。

「なんだ、その手。和解金の要求か？」

「違うわよ！ いったんでしょ、終戦協定だって！」

イマイチ飲み込めないが、とどのつまりこいつは俺に調印行為を求めているらしい。といっても俺は印鑑など持ち合わせていないし、調印すべき書類もない。ならば――状況から判断して俺が取るべき受諾の意思表示は一つだった。

少女白い手を握る。

夕方は拒絶されたその行為が、ここに長い過程を経て完了した。

それにしても滅茶苦茶な遠回りだ。今後は挙動に気をつけようと思う。

「よっと」

ぐっ、と力の籠る手。体が前のめりになるのを耐えて、その原因が少女が握った手を引いて立ち上がる勢いをつけたことだと知る。合図くらいして欲しい。

「よしっ。それじゃ、あんたあっち行きなさい」

「はい？」

これはイジメですか。

「はい？　じゃないわよ。キャッチボールするっていったでしょ。それともこの至近距離でする気？」

「いや待てよ。俺はそのことについてまで同意したわけじゃねえ。てか、何でそんなことしなくちゃいけないんだ」

「暇だから」

至極簡潔である。

「じゃあ家帰れよ。とっくに条例に引っ掛かる時間だぞ」

「うるさいなあ、もう！」

「転用禁止！」

「人のパンツ見といて、それくらいの責任も取れないの？」

そのことは解決したんじゃないのかよ。

「今度俺のも見せてやるから」

「ほんとに！？」

「見たいのか！？」

「んなわけないでしょ、バカ」

いいから早く行きなさいよ、と強引に押し切られて遂に観念する。駄目だこいつ。話し合いの通じる相手じゃねえ。

流石にこの暗がりでは危険を伴うので街灯の当たる舗道に上がる。適度に間隔を空けてから振り返って準備完了の合図を送ると、少女は右手から左手にボールを投げつけて感触を確認していた。なんだか様になっている。

「……痛い」

アホだ。

「オツケー。そんじゃあ早速座りなさい」

「座る？　キャッチボールじゃねえのかよ。素手でピッチングは危険だろ。暗いし」

「心配ないわ。肩は十分温まったから」

「俺の心配をしてるんだよ！」

「自分のことしか考えられないなんて……。人として最低ね」

こいつにだけは言われたくない言葉だ。

「……おまえがそれを言うか。とにかく、投げ込みは禁止だ。マジで危ないから」

論す口調で断固拒否すると、ここは珍しく相手の方が折れた。

「解ったわよ」

この上なく不満を満開にした口調が命令調で言う。

そういえばこいつは、俺の制服を見て市坂の生徒だと判断しておきながら学年までは解っていないのだろうか。あるいは都合よく気付かないふりをしているか、だ。確信犯ということもありえる。

「そっか。立ってする派か……マニアックね」

「キャッチボールは元来立ってするものだ」

「ん。そう？」

「そうなんです」

「まあ、いいわ。で、あんた前からする派なの？ それとも後ろからする派？」

「キャッチボールだよな！？」

いうまでもなく前者である。

などなど。そんな会話を二三挟んでからボールの投げ合いが始められる。瞬きくらいの間隔で闇に溶ける白球。灯りの下に現れて姿を曝したそれを難なく掴み取る。予想していた位置との誤差はほとんどない。素手ということもあり掌が少し痺れるように痛む。フォームも綺麗で、コントロールは悪くないし女子にしてはなかなかの球速だった。運動神経がいらしい。

手に収まったゴム製のボールを持ち変えて返球。白い放物線が少女のいる光の輪に架かる。

「ねえ、あんた名前は？」

数回同じやり取りを行い、握りの確認をしている少女に訊かれる。質問後間をおかずに相手が投球フォームに入ったため、返答は放たれた白球を受け取ってからにした。

「人に名前を尋ねるときは、まず自分からじゃねえのか」

常套句過ぎて、いつてから後悔する。無駄に名乗ることを惜しんでいるのか、それとも、俺自身もこの後輩の名前を知りたがっているのだろうか。答えはどうにも見えそうにない。

俺が投げ返したボールを受け取って少女が応える。

「だったらあんた、先に答えなさいよ」

「『だったら』の用法がおかしい。今の流れをどう解釈すれば、俺が名乗ることになるんだ」

「メンズファーストよ」

「なんだその男性ファッション誌みたいな単語は」

いつて間に返球が来る。気を抜いていただけに若干慌てた形での捕球になるが、指先が上手く縫い目に引っ掛かって敢えなく落球せずに済んだ。

見れば、少女はご機嫌斜めに眉を吊り上げてこちらを睨んでいる。その表情はおそらく、俺に対して「うだうだ言っていないでさっさと答えろ」と訴える意思表示だ。どこまで自分勝手なんだろうこいつは。

やれやれ。この一言に尽きる心境で、俺は握り直したボールを放った。

「絃井律——おまえは？」

意図せず力の入る肩。振り下ろした腕は今までより勢いよく、当然球速も上がるのだが、少女は何事もない様子で難なく捕球に成功する。それも利き手の方向にコントロールミスしたのを逆手で。なんとなく何かに負けた気がして暗澹とした。胸を満たす謎の敗北感に息を吐く。

「あたしは——」

キャッチしてから投球モーションに移行するまでが今までよりも早い。

興が乗ってきたとかそんな理由からか、フォームもさっきまでと比べて随分本格的で心なし脚も高く上がってやがる。

そして。

指先を離れたボールは思った通り勢い五割増しで、受け止めた俺の掌がゴムに打たれて実に悲痛な音を響かせた。

痛みを気取られないように努めつつ見据える先は闇に立つ長い黒髪の少女。

「あたしは――」

その表情に張り付いた、固く閉ざされた不機嫌が氷解して、

「――朱空末那。よろしく、律」

思えばそれが、俺がはじめて見た少女――朱空末那の笑顔だったと思う。夜空の下で、月にも負けじと輝く太陽みたいな明るい笑顔。俺はそれを忘れてしまわないように。

なくしてしまわないように、消え入りそうに綺麗な輝きを記憶に焼き付けた。

2／モーニング・イン・ブラックミスト

／1

誰かに名前を呼ばれている気がした。

そんな夢を見ていた気もする。

ぼんやりと眼に映る平面が自宅の天井だと認識に至るまでまばたき三回分。起床直後の妙に爽快な、それでいて朦朧とした思考回路をフル稼働して、俺はようやく自分が眠っていたことを自覚した。ということとは今は朝か。目覚まし時計のアラームが鳴っていないから、時間はまだ陽が出て間もない頃だろう。

しかしこの時まで俺の五感には満足に機能していなかった。

違和感に気付いた切欠は、欠伸と同時に咽返ったその瞬間。喉の奥に入り込んだ異質の気体を肺に流し込むまいと防衛反射から来た反応だった。続けざまに嗅覚が警戒サイレンを鳴らす。粘膜に絡みつく臭いが部屋中に満ちていた。そしてそれは炭素の焼ける臭いで、端的に表現するならば焦げ臭い。

それも、物凄く。

「嘘だろ……おい」

途端、急速に展開する記憶のビジョン。思い出すのは昨日の夜。眠ってしまう直前。

火の元は完全に絶ったはず。意識が眠り落ちている間に発火する要因など思い当たらない。それともなんだ。放火でもされたのか。あるいはお隣さんがまた馬鹿げた実験をやらかしたのか。いや待て。隣は今旅行中のはずだ。だとしたらさらに隣か。じゃなくて今はそれよりもまず――

タオルケットを蹴り上げて飛び起きる。簡易ベッドのスプリング

が軋む音がした。

原因より先に今は逃げるのが優先されるべきだ。発火箇所は――

「律――っ！」

……。

……………。

誰かに名前を呼ばれてた気がした。

だから俺は。

全ての現実から逃避してもう一度眠ることを決めた。

タオルケットを被り直す。頭の上まで深く深く。

「え！ あ、ちょっと、なんで寝るの！ 無視！？ 無視するつもり！」

うるさい。

「起きてよ律！ 大変なんだって！」

やかましい。

「律ってば！ 無視しないでよ！ 無視は泥棒の始まりだよ！」

そうか、それははじめて聞いた。いい教訓になったところで羊を数えることにする。俺は数週間後には出荷されるだろうジンギスカン達の点呼に移った。羊が一匹、羊が二匹、羊が……

「……」

「……」

……羊が、二十七匹。

「律」

「……」

「解った。いい。律がホモだってこと校内中に言い触らしてやるんだから」

「嘘つきは泥棒の始まりです！」

堪らず声を荒げる。事実無根の噂が学校という世界の中でどれだけ威力を発揮するかをこいつは知らないのか。七十五日程度じゃ収まり切らない。しかも時間を掛けてあらぬ尾びれも付属されていくというから性質が悪い。

大音声に驚いたように遊季は眼を瞑り、それをゆっくりと開いて上目遣いに俺を見た。どうも本気で驚かせてしまったらしい。確かに、朝から出すような音量ではなかったかもしれない。

「……おはよう、遊季」

取り繕って平常を。頭にある全ての疑問や困惑を頓挫させて、俺は普段の態度に努めた。遊季の眼に弱い自分がいることを否定出来ない近頃の日々である。

「ええ？ ……おはよ、律」

ぎこちなくも穏やかな笑顔が、漂う黒い煙の向こうに咲いた。
……。

黒い……煙。

「おい遊季、こりゃなんだ？」

「あ、そうだった。大変なんだよ律！ 玉子焼きが焦げちゃったんだよ！」

涙目に訴える。と、同時に俺の耳に届いた重くて鈍い小規模な爆発音。部屋に流れる煙の量が倍になった。どんな玉子焼きを作ろうとしてたんだこいつは。本気で火事と勘違いしてしまうのも無理はないと思う。

「どうしよどうしよ！ このままだと窒息しちゃうよ！」

「言いたいことは色々あるが……とりあえず、遊季」

沸々と湧き上がる憤怒の情に理性で制御を掛けつつも、震えるその声は地の底から這い出たような重たい響きで大気を振動させた。

「窓を、開けやがれこの野郎」

*

室内の換気を終えて一度落ち着きを迎えた朝の食卓。正確には折り畳みのテーブルに黒焦げになった玉子焼きの出来損ないを載せた

だけの悲惨な光景だが、そういえば少しましな画が想像されることだろう。

もはや備長炭のオブジェと言っても通じてしまいそうな状態になった物体を一瞥し、向かい側で所在なさげにしている遊季に言った。「で、こいつはどういう状況だ。説明しろ」

「玉子焼きが焦げたんだよ」

「見りゃ解る」

「じゃあ訊かないでよ……ひつ、ご、ごめんなさい！ そんな怖い顔しないで！」

現状を冗談程度に捉えていた遊季が怯えた様子で居住まいを正した。

「まず第一に、なんでおまえがここにいるんだ。俺の家だぞ、ここ」家、といっても所詮アパートの一室に過ぎない。室数も外の廊下と直結した玄関混合のこの部屋ともう一つ物置ほどの面積しかない空間が一つあるだけだ。そんな狭い安部屋ながら、小さくて扱い難くも風呂とキッチンは設置されているから一人暮らしならさりとて不便はない。

「鍵が開いてたから」

キッチン横の唯一の出入り口である扉に眼を遣った。セキュリティ万全といわないまでも人の侵入を拒む強固な鍵が標準で備え付けられている。一年ほどの生活の中で、俺がこの扉の施錠を忘れたことはない。今だって通常の鍵に加えてチェーンまでしっかり掛かっていた。

どう考えても扉はウェルカムを示していない。

「嘘だな」

「ホントだよ！」

もし仮に、遊季のいう通り鍵が開いていたって不法侵入を許容する理由にはなり得ない。

びし、と遊季の指差す先に視点を変更する。それは俺が直前まで見ていた扉の隣、キッチンの正面に位置する壁に穿たれ、現在換気

のために全開の窓だった。

「つまりおまえはあそこから入ってきたと」

「そうだよ」

「遊季」

「ん？」

「携帯取ってくれ、その辺にあるだろ」

「いいよ。何するの？」

「通報する」

「止めてえー！」

不法侵入者が飛び掛ってくるのを回避。既に受け取っていた携帯に番号を打ち込む。

さて、警察は何番だったかな。

無論冗談の域を出ない悪ふざけに過ぎないのだが、そこはそれ。

遊季は全力で俺の手から携帯を奪い取ろうと奮闘中である。俺は動きを牽制する意図で突き出した手を遊季の額に当てて、しばしの間動きを拘束してその慌て振りを観察していた。

「ちよっと待った！ 律、まずは話し合おうよ！」

「なにを話し合うことがある」

現行犯逮捕だ。

じたばたして腕を伸ばす遊季だが、どうもその手は目標に届きそうにない。

腕一本で完全に遊季を無力化した俺は脱力して部屋の掛け時計を確認する。二本の針が指し示す時刻は七時十分を少し越えた頃。お騒がせ小火事件もどきの後始末は思ったより時間を奪っていったらしい。既に制服を着込んでいる遊季と違って俺は洗面、食事、着替えなど全てがまだである。時間的にはそろそろ行動を起こさなければ遅刻の危険性も有り得る状況だ。

「遊季」

「ん？ どうしーはぐっ！」

哀しいかな、俺と遊季ではリーチに差がある。遊季の手が俺に届

かないとしても、俺の手は遊季に届いてしまう。俺は事件の副産物——原因でもある——を躊躇いなく遊季の口に押し込んだ。なに、死にはしない。と思う。……たぶん。

炭の塊を口一杯に頬張った遊季がのた打ち回る様子を横目に、俺は壁に吊るしてある制服に手を掛けた。

2／蒼爽架のセクハラ殺人

／2

双色遊季ふたしきといえば、四人いる俺の幼馴染の一人である。

一人は自称恋愛の貴公子こと生徒会長、九ノ瀬渚。一人は市坂の誇る全国級ラスト侍、蒼爽架。一人は遊季の双子の姉である、双色紗季。そこに遊季を加えて四人。俺を含むと合計五人が小学生時代からの付き合いを持つ幼馴染五人組だ。

ここで遊季にまつわる一つの事実を明かしておかなければならぬ。

遡ること十年前。小学の低学年の頃、遊季は病気がちな体質であったためによく学校を欠席していた。その為に当時の俺達にはクラスが同じでありながらも遊季と面識がない。それでも四人が既にコミュニティを確立した後で遊季がそこに参入したのは、その四人の中に姉の紗季がいたことが最大の理由である。

“ほら、遊季もおいでよ”

ある日の紗季の言葉。いつも通り放課後になってから集合して、さて今日は何をして遊ぼうかと話していたときのことだった。紗季の後ろに隠れてひよこりと顔を出した遊季を指して紗季が言う。

“弟の遊季っていうんだけど、この子も仲間に入れて上げていいよね”

拒む理由はなく一同の返事など聞くまでもなかった。

同時に紗季と遊季を除く場の全員の頭に共通の疑問が浮かんだ瞬間でもある。

弟。唯一にして最大の疑問点がその一言に完結していた。

俺達の前に現れた遊季は紗季と瓜二つの、服装や仕草――髪は少

しだけ遊季の方が短かったと記憶している――何から何までが紗季と同じのまるで鏡写し。特に琥珀色の瞳は、そこだけ切り取ればどっちがどっちだか見分けの付かないレベルでそっくりだった。両者を分け隔てるのは言葉で説明のしようがない、存在的雰囲気の違いだけ。

それでもしかし紗季の言葉の通り間違いなく、遊季は同じ年の少年だった。

とはいえ。

“うん。よろしく遊季”

幼い日の彼らにとって外見など、遊季と付き合うのに何の障害にもならなかったのだが。

「どうしたの律。お腹痛い、それともお腹減った？」

「強いて言うなら後者だよ」

今朝一番の騒動で俺は朝食を抜いているからな。遊季の口に黒焦げの玉子焼きを押し込んだことが二次災害を生むとは思っていなかった。昨日挙動には気をつけようと決めたばかりだというのに、半日以内に同じ失敗を繰り返してしまった自分が愚かしい。

「……まったく。朝はちゃんと食べなきゃダメだよ。例えばそれが黒焦げでも」

「あれを喰っていたなら、俺の回答は前者になっていたんだろうな」
空腹の方がいくらかマシである。あれを食して一日腹が異常をきたさないと思えるほど、俺は自分の胃袋に自信を持っていない。もっとも実際に食べてしまった遊季は部屋中を転げ回る程度で済んだのだが。二次災害とはそのことである。ちなみにまだ片付けは終わっていない。

「食卓に並べられた料理を食べるのは、作った側に対する最低限の礼儀だと思わない？」

「食卓に並べられたものが、本当に料理だったらな」

あれは料理なんかじゃない。ただの炭だ。あんな状態になるまで加熱された玉子料理を俺は知らない。

悪辣な言葉で返すと隣から、ぬう、と唸る声が聞こえた。横目に窺うと、遊季は頬を膨らませて険しい表情で通学路を睨んでいる。怒らせてしまったようだ。まあ、その方が静かでもいいかもしれない。遊季と登下校を共にすることは珍しくないにしても、頻繁にあることでもない。

蒼辺りがどんな風に思っているやら知らんが、今日みたいに遊季が朝から押し掛けてくる（ましてやポイズンクッキングをやらかす）なんてことはかなり稀有なケースである。この積極性は小学生時代にはなかった。小学生の頃の遊季は、どちらかというと消極的な性格をしていた。いつも紗季にくつついていたから霞んで見えただけかもしれないが。

姉である紗季は遊季が少女的な振る舞いをするのは偏に自分の影響であると語った。欠席の多かった遊季がもつとも多くの時間を共有していたのが自分であるからだとか、そんなことが理由であるらしい。とはいえやはり、同じ環境でも遊季のような人間が出来上がるのは極稀なケースだろう。

遊季の出で立ち。

言葉や仕草、立ち振る舞いから一切矛盾のない女子の制服を着込んだ立ち姿。標準位置がそもそも短い学校指定のスカートから生える脚。華奢な肩。百五十センチ前半の身長。琥珀色の瞳は紗季と寸分違わない。遊季の変化は紗季に似てきたというよりも近づいてきているといったほうが正しいだろう。

昔からの違いといえば腰辺りまで髪を伸ばしていた紗季に対して、遊季の髪は肩口下のセミロングであること――

「ん。なに、どしたの。やっぱりお腹痛い？ それとも」

「いや、遊季おまえさ、髪伸ばしてるのか？」

昨日覚えたばかりのスキル活用して矢継ぎ早に訊く。気のせいかもしれないが、背中に垂れる遊季の髪先端が標準位置よりも低い位置にあるように思えた。

「んん、そうかな？」

上半身を捻りつつ、逃げていく自分の背中に手を回して人房髪を引っ張ってくる。それを弄びながら遊季は「ふーん」「へえー」「ほほおー」など、一体何に感心しているのか読み取れない感嘆を特別感情もなく零していて、最後には小首を傾げてしまった。

「自分ではあんまり解らないね。でも、律が言うんだったら伸びてたのかな。それが、何？」

「ちよっと気になったただだよ。別に何ってことはない」
本当に何てことのない光景。

何てことがなさ過ぎて、遊季を紗季と見間違えてしまうような、そんな朝の通学路だった。

＊

「男の間でも意見が分かれる議題だと思うが、律、おまえは女の子に『可愛さ』と『美しさ』のどっちを求める？」

教室に入った俺を出迎えた蒼が、おはようだとかなんとか、その他時頃の挨拶よりも先に一切の前置きも脈絡もなく言ってきた。挨拶の重要性を知らんのか、こいつは。

「私が思うにだな、『可愛さ』派の男は根がエロい男だと思うんだ」
「そいつはまた、随分と主観的な意見だな」

「詳しく聞きたいか？」

「いいだろう。話してみろ」

取り分け聞きたいわけではなかったが、どうせ素直にそう言っても蒼なら無視して話を始めるだろうと踏んで先を促した。無理矢理聞かされていると自覚しながら興味のない話をされるのと、一応同意の上で一方的に語られる妄言を聞き流すのではメンタル的ヒットポイントの消費量から見てどちらが省エネかは瞭然だ。

ちなみに、校舎に入るまで同行していた遊季は別のクラスなのでこの場にはいない。遊季と別れた俺は教室後部の扉を開いた時点で蒼に絡まれた、というのがこと今に至るまでの次第である。

「うん。律、おまえにとって『可愛い』とはどういうことを指す言葉だ？」

「どう……っても。さあな、はっきりとした言葉じゃ表せないな。強いて言うなら愛くるしいとか、そういう意味じゃないのか」

「それも一つの見解だな。でもその場合の可愛い、は『子犬が可愛い』や『子供が可愛い』といったあくまで自分よりも相手を低く見た……というのは極論だが、つまりは愛玩対象への感動詞、いわば記号なんだよ」

「だったらおまえが言ってるのはどの可愛い、なんだよ」

「性的欲求を一言に凝縮した心情吐露だ」

間髪入れずに答えが帰ってくる。

「おまえアホだな」

「あれ、解りにくかったか？」

「……なんだかおまえには負けた気しかしねえよ」

なんでこいつ、頭はいいのに会話が変なところで噛み合わないんだろう。鼓膜に自分に対する中傷が入らないようにするフィルタでも付いてるんじゃないか。

「『可愛い』から連想される言葉は『はあはあ』だ。これは間違いなく相手に対して邪な感情を抱いているとしか思えない」

「おまえの思考回路はどんな風に設計されてんだ。俺はそれを見てみたい」

「そうか？ うんまあ、律が見たいというなら、少しくらい見せてやってもいいけど」

「結構だよ！」

怖過ぎる献身だ。開いた脳の観察なんてしたくない。呆れの感情を表す比喩表現に対してもいちいち本気になってくる蒼は、どう考えても扱いづらい類いの人種である。そんな風に考えてみると、昨

日の朱空末那な遊季はかなり扱い易い。なんだか奴らが恋しくなってきた。

「故に、可愛さ追求派の男はエロエロなんだ」

「なんか表現が変わってないか……？　ちなみに、美しさ追求派はどんな人間なんだ？」

「インテリ気取りの隠れエロスだ」

「おまえの主観、男はみんな変態じゃねえかよ」

「……？　私は別にエロを求めることを否定してなどいない。単に男の本性を暴いてみただけだよ」

「勝手に男の本性を捏造するな！」

「なあに、隠すことはない。解き放て、律！　おまえのエロスの射す方向こそがおまえの霸道だ！」

「んな霸道はねえ！」

ポニーテールを振り回して蒼が体を半回転させ、掌を窓の外に翳す。いやにカッコイイ背中が俺の前に屹立していた。マントでも着させたら歴戦の勇者にでも早変わりしそうな姿だ。

結論からして何を訴えたかったのか砂粒程度にも汲み取れない蒼による一人議会在終了すると、いつの間にもやら廊下に集まってきていた野次馬達から声が上がった。爽架さまー、蒼先輩ー、蒼ちゃーん、という様々な叫び声が海岸に押し寄せる荒波のごとく俺の背中を打ち付ける。その数や実に十を超える多数。振り返って数えるのが面倒なのでたくさんとしておく。

「誰が蒼ちゃんだ！」

鬼気迫る形相で蒼が振り向く。いつ頃からだったか蒼は自称に対して女性的なよそよそしさが含まれるのを毛嫌いするようになり、最近では『爽架ちゃん』などと呼称しようものなら真剣で斬り掛からん勢いで襲ってくる。事実竹刀を振り回して暴走した前科もこいつは持っているのだ。

補足として廊下に集合した面々について説明しておく、連中はいわゆる蒼のファンクラブに当たる存在である。全国クラスの腕前

を持つ剣道少女であり、さばさばした性格や端正な容姿から蒼は学園内のスターとして君臨し、今や学年や男女を問わず（割合は女子の方が八割を占める）絶大な人気を博していた。

先の犯人を見つけ出そうと躍起になっている蒼をどうにか宥める大方、ファン群衆の中に紛れていた本物の野次馬がふざけて叫んだのだろう。前述の通り学園内における蒼の知名度は高過ぎるくらい高いほどに高い。それ故に蒼の起爆スイッチは、在校生徒全員が握っていると言ってもいいくらいなのだ。

「落ち着け、蒼」

「これが落ち着いていられるか！ おのれ……こんな屈辱を受けたのは十五分前以来だ……！」

「さっきじゃねえか！」

なるほど蒼的屈辱は連鎖していたのか。累積した恥辱がこの殺気の源であるらしい。などという考察は早めに切り上げて、ここで聞いておかねばならないことがある。そいつをとっとと済ませておこう。

「離せ律！ 人には戦わなければならない時があるんだ！」

「だとしてもそれは今じゃない。とりあえず落ち着け。そして」

蒼の肩を掴み、脚で引き寄せた近くの椅子に座らせる。抵抗が激しい為に半ば強引になってしまい、座らせる際衣服が大変乱れてしまったが気にしない。

駄々っ子のように手足をばたつかせる蒼の鼻先に人差し指を突き付けて制止、そしてゆっくりとその指を教室中央に向かわせて言った。

「ありゃなんだ？」

俺が指差す先にはうつ伏せに倒れる男子生徒の姿。……実は経験上彼の顛末は説明なくして大体の予想はついているのだが、念の為に確認は取っておくべきだろう。

「……女の敵。もとい学園の悪だ」

「ほう。詳しく聞こうじゃないか」

「生徒会の仕事だ……律には関係ない」

「てことは九ノ瀬だな。で、今度の名目はなんだ、治安維持か？」

「そんな感じだよ。私は言われた通りにあの男を粛正したただけだ」

その後蒼から聞き出した事の成り行きに少しだけ触れよう。

先に言っておくと惨状——男子生徒一人意識不明、机が四つ倒れて中身をぶちまけている——は全て生徒会執行部の長、つまるところの生徒会長様もとい、九ノ瀬渚が原因である。先日とある女子生徒（匿名希望）が生徒会に相談を持ち込み、それが蒼の言うところである『女の敵』、『学園の悪』の成敗に繋がったらしい。相談内容はプライバシー保護の観点から伏せられるが、断言してもいい、本当ならその女子生徒の相談がこのような結果をもたらすようなことはなかったはずだ。

九ノ瀬より命を受けた蒼は今朝方偶然にもターゲットを教室で発見したそう。蒼は相談者の意思に則り話し合いに出ようとしたらしいが、相手は執拗に別の女子生徒に言い寄るばかりで聞く耳を持たなかった。この時点で相談内容が彼氏の浮気とか、付き合ってるのに他の女子に見境がない、とかそんなだろうと予想がつく。

困り果てた蒼だったが、程なくして男はちよっかいを掛けていた女子にそっぽを向かれてしまう。そこで次に男の獲物にされたのが蒼だった。蒼はこの次第を次のように語る。

「……胸を、触られた」

「……」

なんか色々端折^{はしよ}り過ぎだろ。

「『なんだ、あんたよく見れば有名な蒼爽架さんじゃん。へえ、本物は結構可愛いんだな。どう？俺と遊ばね？ゲヘヘヘ』と言われた」

「最後のは嘘だろ」

「『なあ、いいだろ？ちよっとぐらい相手してくれよ、その豊満な肉体で』と続けられた」

「解ったもういい。続きは聞かなくても想像がつく」

バカな奴がいたものだ。蒼への禁止ワードを含む発言に飽きたらず身体的なコンプレックス——スタイルのよさが悩みだというのは些か世の女性達には妬ましいと思う——に文字通り触れてしまうとは。……死んでないだろうな。

「『うわっ、やべ、あんたそれ見た目よりあるんじゃないって、おい……なにとりだしてんだよ？　ちょっと待った危ないって！　んなもん振り回さな——あぎゃああああああああ』と続く」

「だろうと思ったよ。得物はなんだ？」

「竹刀だ」

「生きてるよな？」

「……」

「おまえまさか……」

「手応えが……、あった」

「誰か救急車を！」

学園ミステリ——朝の教室に横たわる死体、とか冗談じゃ済まねえ！

俺が慌てて得物の竹刀を隠すように蒼に指示を出し、しかし凶器を抹消したとしても目撃者達が教室中に溢れ反っていることを発見する。不味い、逃げ場がない。こうなると最後の希望として被害者の生存に一縷の望みを託すしかなくなり——床に伏していた男を探して、その姿が消失していることに気が付いた。

「あ、あの……紘井くん？」

声を掛けられる。振り向くと話したこともないはずの女子が所在なさげにこちらを見ていた。話したことがないため声では解らなかったが、見覚えのある顔なのでどうやら同じクラスの女子のようだ。「あの人だったら、さっき物凄い勢いで出て行ったよ」

「え、ああ、そっか。報告サンキュ」

胸を撫で下ろす。生きていた。安堵の息が破裂寸前にまで肺に溜まって、吐息。

「は、走る死体か！」

「違えよ。どんな学園七不思議だ」

蒼は完全に殺したと思い込んでいる。かなり動揺してるのが見てとれた。

「泣いてたよ。……号泣。ちょっと引いたかな」

「泣きながら走る死体か!」

「だから違うって」

まずは死体という設定を忘れないことには解決は望めなさそうだ。

「不味いぞ律! 奴を放置しておけば他の生徒に噛み付いてどんどん仲間を増やしていく! このままだとこの校舎は死者の城と化すぞ!」

「どこの生物災害だよ」

「……原因を作ってしまったのは私だ。奴は、私が止める」

「好きにすればいい」

「ああ。行ってくる」

「気を付けてな」

蒼は掃除用具入れに隠していた竹刀を取り出し、疾風のごとく加速して脱兎の勢いで教室を飛び出していった。ごめん、俺の手には負えない。うつ伏せで顔は見えなかったが、一度だけ見た背中を思い出して念仏を捧げる。彼の魂に救いあれ。

俺は蒼が散らかしたまま放置していった机を立て直し、中身を収納していく作業に移った。俺が蒼の暴走の処理をするのは本意であるが、これもクラス内で定着してしまった役割だから仕方ない。なんと哀しき我が役回り。

不意に伸ばした手に誰かの指先が触れる。顔を上げる。さっきの女子だった。

「あ、ごめん」

「俺一人でやるから、座ってていいよ」

「ううん。蒼さん、わたしの為にこれひっくり返しちゃったから、手伝わなくちゃ」

どうも絡まれていた女子は彼女らしい。

「紘井くんさ、蒼さんに伝えておいてくれるかな」

片手に抱え込んだ教科書やノートの上に拾い上げた辞書を重ね、
落ち着いた笑顔が言った。

「助けてくれてありがとう、て」

2／生徒会長

／3

気分にもよるが、二年に上がって以来俺は昼食を生徒会室で取っている。

突き詰めていえば九ノ瀬が生徒会長に当選してからの習慣だ。春先の選挙からまだ二週間しか経っていないのだから、本来なら習慣というのもおかしい話かもしれないな。

生徒会室は、二年の教室を含む新館の正面に構える旧館の一室を陣取っているが、移動に掛かる手間を度外視するというならあれほど昼時に快適な場所もない。教室や食堂は生徒の大群でごった返しているし、バカ騒ぎしていれば周りの目が憚られる。会長権限でエアコンの使用は自由だし、他の生徒もいなくて静かな点を評価して生徒会室は穴場と呼べるだろう。何より基本的に教師放任というのが大きい。

本当ならば俺は生徒会の人間ではないので気軽に入室を許される立場ではないのだろうが、そこは現会長様の恩恵に与っている。はじめこそ少しばかりの緊張を持って開いていた扉も、今では何の感慨もなく無造作に開け放つことが可能だった。

今日もまたノックなしに手を掛けた扉をスライドさせる。
すると。

「……」

そこには見たことのない女子生徒がいた。しかも一年。

彼女は俺の存在を認めるなりびくりと肩を弾ませ、何故か謝罪の言葉を叫んでから数回速いテンポのお辞儀をしてから俺の横をすり抜けて退室して行った。なんだったのだろう。とは俺は思ったりし

ない。現状を把握するなんてことは簡単だ。なぜなら。

「お、よくきたな我が親友よ」

軽薄に片手を挙げて、そんなこと言ってくる男のことを、俺は残念ながら十年も前から知っているから。

生徒会長、九ノ瀬渚その人である。

室内に踏み込んだ俺は九ノ瀬から一番遠い位置の席に腰を下ろした。

部屋の様子を説明するなら、一般的な会議室を想像してもらえば誤差はほとんどないだろうと思う。普通の教室と面積は同じくらいで、形は縦に長く横に短い。黒板はなく代用されているのは移動可能式のホワイトボード。スタッキングチェア数脚と、長めの折りたたみテーブルが部屋の真中に置かれている。

「昼間から一年の女子を連れ込むとはまた大胆だな、生徒会長」

「昼間だからこそ、な。昼休みのここに人は寄り付かない。おまえも今日はこないと思ってたんだけどね」

「呼んだのはおまえだ。遅れたのは購買に行ってたからだよ」

「購買？ おまえ確か弁当じゃなかったっけ？」

確かにいつもの俺は弁当持参組みの一員だが、今朝はわけあってそんなものを用意している暇がなかったのだ。

「そうかい。ところで、俺がおまえを呼んだのは昨日なんだけどね。すっぱかされちゃったけどさ」

「だから、今代わりに来てやったんだろ。ていうか、昼休みは毎日来てるじゃねえか。それで、こうして来てみれば会長様は一年生の逢瀬ときた」

九ノ瀬を見ないようにして毒づきつつ、コロッケパンを開封する。「誤解だよ、誤解。今の子は相談者で、お礼をいいに来てくれたんだ。それだけだよ」

「てことは例のあれか」

「そ、目安箱」

九ノ瀬はどこか誇らしげにその単語を口にしゃがるが、俺からし

てみればそいつは悪魔のワードでしかない。なぜかと訊くなら単純明快な解答を述べてやろう。その言葉を切欠にしてなぜか毎回俺は疲れるはめになっているからで、いわば呪いのスイッチ、呪詛の響きだ。自分が厄介事に巻き込まれると解っていては、どんなに民主主義の権化みたいな言葉も耳障りなことこの上ない。

「なんでも兄が相当な女誑しらしくてな。あんまり見境がないからお灸を据えてくれ、って今の子がさ。おまえも知ってるだろ？ 今朝の事件は」

今朝の事件というと、蒼が起こした殺人未遂のことだろうか。確信はないがそれ以外には考えられない。この平和な学内で事件と称される事象がはいはい発現しまくっているとは思えないしな。なるほど、あれの依頼人は彼の妹だったというわけか。

昼休みにわざわざ礼を言にくる点、きつと兄に対する気遣いからの依頼だろう。だとしたら、彼女は物を頼む相手を間違えている。同じ理由で、九ノ瀬もまた肅正を受けるべきなのだから。こいつにもあんな妹がいたらよかったのに。

そんなモノローグの籠った視線を投げ掛けていると、思い出したように九ノ瀬が付け加えた。

「ああ、心配するな。爽架の暴動に関しては俺が教師側に話をつけておいたから」

「当然だ。つかおまえ、そんな依頼を蒼に任せちゃったらどうなるかぐらい予想が出来たはずだろ。マジで死んでたらどうするつもりだったんだ」

「さあな。仮定より現実を見ろ。実際は死んじやいないよ」

無責任過ぎる。何度思ったか知れないが、なんでこんな奴が生徒会長なのだろうか。甚だ疑問だ。

「なら現実の話だが、蒼なら確実にやり過ぎることは解ってたんじゃないのか？」

「やり過ぎるくらいがいいんだよ。でないともた同じことを繰り返すし、触発されたバカも出てくる。俺の餌場を荒らす輩がどうなる

かは多少大袈裟にでも示しておかなければいけないのさ」

「どこが誰の何だって？」

「この学園が俺の餌場だって」

にべもなく答えやがる。全生徒の代表として学園を預かる人物の口から出たとは思えない言葉だった。

「そうか？　なら言い直すよ。俺のハーレムを汚す野郎は、何人たりとも決して許さない！」

少年漫画の主人公みたいに言われても。

それにしたって百歩が五十歩になったようなものでしかない。あるいは生徒会長としての立場を利用して言ってるのか。だとしたらあからさまな職権乱用、もしくは公私混同だ。今すぐにも不信任の決議を行うべきである。

「全ての女は俺を愛し、同時に俺に愛される権利を持っているんだよ。基本的人権って奴かな」

絶対に違う。

「愛の安売りか。この女の敵が。見境がないのはおまえじゃねえかよ」

「それは違うさ。俺の愛は無償にして無限だ。女の数だけ恋が生まれ、恋の数だけ愛があるんだよ」

大層なことを仰るが、それだと無限を称するこいつの愛は数にしておよそ三十億くらいに限られると思うのだからどうなんだろう。まだ一口もつけていなかった購買特性コロッケパンを口に含み咀嚼しつつ、そんなことを考える。

ふにゃふにゃしたパンとコロッケの衣を飲み下し、得意気な表情で自分の弁当をナプキンから解放している九ノ瀬に向き直る。俺は言った。

「依頼が解決したなら、俺はもう必要ないよな。昨日の呼び出しは、どうせそいつを俺に押し付けるつもりだったんだろ」

つまり昨日の俺が素直にここに来て九ノ瀬の話を伺っていれば朝の騒動はなく、より平和的な解決を見ていたことだろう。依頼者の

彼女だって兄が生死の淵を循環うなどと危険な目に遭うことを望んでいたわけではいるまい。話し合いでことが済むならそれが何よりだ。

弁当箱の蓋を開けた九ノ瀬は箸を蟹鉗のように動かしながら俺を見、

「あー、いや、それは違う。この件は最初っから爽架に任せるつもりだったよ。言ってるだろ。この件はやり過ぎてこそ意味があるんだよ」

きっぱりと、しかしどこか困った風にそれを告げる。九ノ瀬の眼が今度は俺から焦点を外していた。

「おまえに頼みたかったのは他の相談……というか、依頼というか、なんというか」

開いた弁当箱の中身はまるで減っていない。九ノ瀬は言葉を探して視線を中空辺りに泳がせている。これから自分が言わなければならぬ事柄に相応しい表現に検索を掛けているようだ。なかなか適当なものが見付からないらしく、取り繕った微笑がそろそろ苦しくなってきた。その間に、俺はタマゴサンドに手を着け始める。黄色い卵を見たのがやたらと懐かしい。

「っあー、もう面倒臭い。百聞は一見にしかずだ。律、とりあえずこいつを見てくれ」

言葉にするのが面倒になったらしい。九ノ瀬はブレザーの懷から一枚の用紙を取り出す。その動作に反射的に身構えてしまったのは、なにもブレザーの内側から出てくるものが拳銃だと思ったとかそんなアメリカな理由ではなく、むしろ出てきたものが拳銃なんかではなくてもっと身近な紙切れだったからである。

はつきり言って逃げ出したい気持ちだった。帰っていいかな、俺。どうにも俺の嗅覚は面倒事の匂いを明確に嗅ぎとっているんだが。押し付ける手前からか、ご親切にも九ノ瀬渚生徒会長はその悪夢への招待券を持って俺の許までやって来てくださった。赤紙を飛脚人に手渡しされる気分で俺はブツを摘まみとる。

見た目には何の異常もなく、それは長方形に切られて折りたたまれただけの藁半紙。

表面だけ見ても仕方ない。今度ばかりは九ノ瀬の言う通り百聞は一見にしかずだ。

片手で藁半紙を開く。その内容に眼を通した。

「なんだ、これ？」

思わずタマゴサンドを落としそうになる。

綴られていたのは、これまでに俺が見た投書の中でも最短の文章。平仮名たった四文字で記された生徒会への要望。確かに、九ノ瀬が表現に困るのも頷ける。目安箱への投書は大きく分けて相談と依頼だが、これはそのどちらにカテゴライズしていいやら全く見当が付かない。

そこにはこんなテキストが踊っていた。

「『たすけて』……どこのホラーだよこいつはよ」

背筋を悪寒が駆け抜ける。もしかしたら九ノ瀬は内容を知らないのかもしれない、と有り得ないことを思っこの不安とも恐怖とも付かない感情を共有すべく内容を公開。言うまでもなく九ノ瀬にとってこれは既知だった。

「さあな。一つだけ確かなことがあるとしたら、これはホラーなんかじゃなくて我が愛すべき生徒からの投書だよ」

「バカバカしい。こんなもん悪戯に決まってんだろ」

いいつつ藁半紙を放り出す。ひらりと舞ったそれが床に落ち、無機質な文面が俺を見上げた。

目安箱への投書に基づく活動は生徒会、正式名称生徒会執行部の主な役職である。であって、校内におけるその知名度は高い。だからこんな適当な投書を行うという悪戯があっても不思議ではないのだ。高校生にもなってバカらしい。

「悪戯か。おまえはそう思うんだな、律」

俺の台詞などはじめからお見通しだったと言いたげな語調。嘲笑して九ノ瀬は肩を竦めるアクションを見せる。

あるいはそれは嘲笑ではなく自嘲なのかもしれない。

「悪戯で、こんな意味不明な投書を七回もするような暇人がいると思うか、おまえは」

再度、内ポケットに手を入れて抜き出す。さっきと違うことといえどそれは九ノ瀬が掴んでいた紙の枚数が、一枚ではなく六枚だったこと。同じ大きさの紙が重ねられ束になり、今、九ノ瀬の人差し指と中指に挟まれていた。この時点で既に内容など確認するまでもないことや、九ノ瀬は俺が思っているよりも案外本気で困っているらしいことを悟る。

いつも通り平準の柔和な笑顔が、今ならはつきりと苦笑に変わっていることが一目に明らかだ。そしてこんな顔をこいつがするときには、本当に困っているとき以外にない。

そう。九ノ瀬はどうやら困っているらしい。

「七回か……。毎日続いているのか、その投書は」

やれやれとばかりに事情を尋ねてみると、薄情にも九ノ瀬はあからさまに表情を明るめ、待ってましたとばかりに説明を開始した。しまった。嵌められた。

「二週間ほど前からで、毎日ってわけじゃない。曜日にも規則性はないけど、筆圧的には多分女子だ。うん俺が言うんだから間違いない」

「最後のは一番どうでもよくて、一番正確そうだな」

改めて足下に落とした半紙を拾い上げる。よく見れば確かに、筆圧云々もそうだがこれは楷書体にしては丸みを帯びていて、男の書いた文字とは考え難い。投書主が女子であると目した九ノ瀬の発言には全面的に同意してよさそうだと、ちよつと待てよ。

今更にして、俺の頭に根本的な疑問が思い浮かんだ。

「九ノ瀬、おまえ、これを俺に見せてどうするつもりなんだ？」

これまではなかった、どこから起こりようもないはずの質疑がそれだ。俺が生徒会に関わることになる場合、業腹だがそれは投書の

依頼内容を代行する際が主である。だから投書を見れば自分が何をすればいいのかを知るのは簡単で、どうすればいい、なんてことはそもそも考え得ない。

だが今回はどうだ。

不透明な依頼ないし相談内容に加えて無記名投書と来ていやがる。これでは投書主が何を望んでいるのか——は、明確だが具体的などころが不明だ——そもそも誰に対して執行すればいいのかそれら一切を求めるヒントが皆無。メッセージだけを受け取って、それで立ち往生するしかない。やっぱり悪戯なんではないだろうか。再び俺の中では悪戯説が最有力候補として息を吹き返した。

鮭の切り身を箸で口に運ぶ途中だった九ノ瀬が手を止めた。うん、と言って、やっぱりそうなるよな、を呟くタイミングで箸を置く。今の段階ではまだ、表情に真剣味が感じられない。

「この投書がはじめて行われたのは、さっきもけど二週間前だ。新学期が始まってからの第三週目ってことになる。これは仮の話だけど、ちょうどその時期ってのは一年がオリエンテーションとかやってる頃なんだよ。それでだな、生徒会長たる俺は生徒会について新入生全員の前で演説をしたわけだ。当然——目安箱についても」

「なにが言いたいんだよ」

「投書のタイミングが一致してるだろ。つってもそれが確証になるわけじゃないけど、投書主は一年なんじゃないかって俺は考えてる」そして、と九ノ瀬が身を乗り出すような姿勢をとる。まばたきの回数が極端に減少していた。

「仮設ではあるけど、俺はこう考えてる。こいつは可愛い一年女子からの救難信号なんじゃないかって」

「可愛い、ってのは重要か？」

「当たり前だろ。それが全てだ」

俺は今朝蒼に聞かされた話を思い出していた。

「……と、話がずれかけた。で、どこまで話したっけ？」

「おまえがエロエロだっところまでだ。次はその内に秘めたケダ

モナについて話してくれ」

「ああ、そうだっけ。知っての通り俺の中には獣が潜んでいて、そいつは恋という名を持つ運命の匂いに敏感なんだ。そして解放時は――」

「俺が悪かった。九ノ瀬、おまえは本当は投書主が一年の女子ではないか、ってどこまで話したんだ」

「可愛い一年の女子だ。間違えるな」

そうか、全てなんだっけな。

覚えているなら悪乗りしないで欲しい。いちいち話がややこしくなる。

「で、続きか。結論は先に言ったよな。俺はこいつの正体を救難信号、いわゆるSOSだと踏んでいる」

俺は今という瞬間が笑い時なのかそれとも気付かない振りをしてスルーすべき時なのかを真剣に迷ってしまった。親指の第一関節が知らず眉間を押さえている。

九ノ瀬は、自信満々の表情にしてアホ満開な結論を導き出しやがった。投書が悪戯でないならこいつの見解は確かに正しい。反論の余地がないほどに。証明も出来る。

床に落とした藁半紙を拾い上げ、俺はそいつを九ノ瀬に翳した。

「あのな、九ノ瀬。よく見ろ。『たすけて』って書いてあるんだから、そりゃあSOS以外の何物でもないだろ」

一年が投書主だとかいう件は間違っているとはいえないし、合っているともいえない。肯定と否定のどっちつかず。

もっとも俺が訊いているのはそんなことでは微塵もない。答えて欲しいのは誰がこの用紙を目安箱に入れたのかなんて過去のことではなく、その結果俺がこれからどんな役を演じなければならなくなるのかという未来のことだ。

「せっかちな、律は。俺の華麗な推理を最後まで静聴しようって気はないのかよ」

本気でがっかりしていやがる。そこまでその華麗な推理とやらを

俺に聞き届けて貰いたいのか。はつきり言って俺は聞きたくないのだから容赦なく話の先を促す。

「そんじゃ単刀直入に言うわ。今回、おまえにはこの投書主を見つけて出して貰いたい」

最高の冗談を受け取った心地で俺はしばし九ノ瀬の腹の内を探っていた。残念なことにとれだけ探ろうとも言葉以上の目的なんて粉ほどにも見付からない。九ノ瀬の要件は文面を百パーセント引用した、まさにそのままの要求だった。

「……一応、理由を聞こうか」

「目安箱への投書だ。無下に出来るはずがない。俺は生徒会長だからな、生徒からの要望には出来る限り最善の選択で応えるし、相談になら睡眠時間を削ってでも乗る。それじゃダメか？」

生徒会の業務執行を部外者に押し付けようとしている現行犯が真摯な対応を謳い文句にしたところで、そんなものには何の信憑性もありゃしない。

「この投書主がイジメを受けていたとして、助けを求めているのかもしれないだろ。生徒会長の俺がそんな悲痛な訴えを無視するわけにはいかない」

だったら自分で調査でも何でもすればいい。俺を巻き込むのはお門違いだ。

「会長として顔が割れてる俺が自ら動けば、それこそ目立ち過ぎて厄介じゃないか。おまけに相談したことがバレちゃって状況が悪化しかねない。その点おまえなら大丈夫だろ。生徒会役員じゃないおまえなら、相当目立つ行動をしない限りは問題ないはずだからな」

「役員でもない俺が何故協力してやらねばならんのか」

「役員でなくても、おまえは俺の親友だろ。だから友情の元に協力を仰いでるんじゃないか」

「断る、つつたらどうする？」

九ノ瀬の口元が苦笑に歪む。皮肉を噛み殺したような崩れた笑みが、最高の冗談を聞いたとばかりに俺に向けられた。

「断れないだろ、おまえは。紘井律が困ってる誰かを見捨てられるのかよ」

根拠としては実に曖昧で不確かな物言いがなんだか気に食わない。「何度も言うがこんなも、ただの悪戯かもしれないねえだろ。むしろその可能性が高い。だったら誰も困ってやしない」

「悪戯なら、それはそれで説教……いや、口説く必要があるだろ」
言い直した結果間違っていやがる。

「少なくとも俺は困ってる。頼むよ、律。ここは親友を助けると思っ
てさ」

ぱちん、と安っぽく手を合わせて頼まれる。

俺は投書の内容に再度目を向けた。もう一度見れば中身が変化しているかもしれない。角度を変えれば見えなかった文字が浮かび上がっている可能性もある。見下ろした文章に何の超常もなかったことは言わずもがな、藁半紙に並ぶ四つの文字に変化はないし減少も増加もしてなどいなかった。

形だけの思案する素振りを自分の言い訳とばかりにし、とつくに
出ていた答えを提出することに決める。俺は半分ほど残っていたタ
マゴサンドを平らげて席を立った。

「解ったよ。無駄かもしれないが探すだけ探してやる」

どうせ俺がどう答えるかは九ノ瀬の中で予想出来ていただろうし、
そうと解っていて協力の意思を示してしまう自分が馬鹿らしい。愚
の骨頂とはこういうことだ。

ドアに触れながら言うと、後は急いでここを出ていく算段だった。
別れの挨拶もなしに退室を急いで扉を開く。これ以上ここにいるの
は自分を辱しめているみたいで嫌になる。少しの間一人になりたい。
しかしそれは残念ながら叶わぬ望みという奴で、部屋の前の廊下
にいた人物を見て俺は脚を止めてしまう。そこには。

「え——？」

ドッペルゲンガーでも見たような顔をして、朱空末那がそこに
いた。

2／依頼成立！

／4

普通に考えれば、同じ学校に在籍しているのだから廊下でばったりなんてこともあるだろう。確立こそ低いが、それ自体はなんら驚くことでもない。意識してしまえば本来なんでもないはずの事象も特別な風に思えてしまうものだ。

つまり何が言いたいかというと、今の俺は内心ちよつとばかり驚いていた。

だってそうだろ。つい昨日いざこざを繰り広げた相手がいきなり目の前に現れたりすれば、驚いてしまうのは人の心理として当然だと俺は思う。

相手がいくら常識はずれな人間とはいえこの状況下での心境は互いに同じものであるらしく、朱空末那もまた目を大きくして驚愕を露にしていた。

「あんた生徒会の人間だったわけ？」

が、精神ステータスの乱れをまばたき二回で回復させた朱空は、えらく落ちついた声でそれを訊いてくる。もしかしたら驚嘆の表情もいきなり過ぎる再会に由来するのではなく、俺を生徒会役員と勘違いしているところからきているのかもしれない。

「違うよ。ちよつと用があつて来てただけだ」

「用ねえ。あんたが用があるのって、生徒指導とか進路指導とか保健室くらいじゃないの？」

「保健室ってなんだ？」

「え？ カウンセリングとか受けてないの？」

朱空の中にいる俺はどんな人物なのか結構真剣に気になり始めた

のが正に今である。これも軽口ならいいのだが。いや、そうだよな。言いたいことを言いたいだけ言いやがった朱空は腕組みの姿勢で憤然と俺を見上げていた。事情を知らない第三者がこの様子を目撃したならば、一体誰が両者の学年格差に気付くかと思えるくらい朱空の態度は大きい。しかし、なにが気に入らなくてこいつはこんな無然としているのだろう。

出会い頭に罵倒される覚えなど俺にはない。あるとしてもそれは既に解決しているはずだ。それも朱空の意思によって。まさか振り返そうとは思っていないな。

さあ、と音がした。一人状況整理に精を出していた俺はその音で現実に関を向け直し、今のが朱空が体を捻り発生した髪の流れる音だと知る。威風堂々と歩き去っていく後ろ姿が、尻尾を立てて道を行く黒猫を俺に思い出させた。

……。

「待たんかい」

どうにか寸前で手を伸ばし、まだ捕捉可能な位置にあった朱空の肩を掴む。

これは驚き。予想に反して素直に歩みが止まった。

「な、なによ……離しなさいよ」

「おまえがここに理由をまだ聞いてねえ」

「そんなのあたしの勝手でしょ。いいから離してよ」

頑なに答えるのを拒む辺り、どうにも発憤の理由はそこにあるのかもしれない。

などと予想を立てている最中、気の抜けた一瞬に不意を衝かれ腕を振り払われる。自由を手にした朱空はそれをいいことに反撃に転じるのかと思いきや、意外にも肩越しに一瞥をくれるだけにその行動を留めるのだった。なにが気に入らないのだろう。

「どしたよ律、なにかあったのか？」

いつまでもドアを閉めなかったことを訝しんだのか、九ノ瀬が廊下に現れる。またややこしいタイミングで出てきたものだ。案の定

半身を振り返っている朱空の姿を発見するなり、九ノ瀬の態度は急変した。音もなく部屋の中に戻っていくと、

「おや？　なにやら運命を感じて出てきてみれば、予感に違わぬ素敵なお嬢さんでは――」

びしょん。俺は力の限り扉を封鎖してやった。

体半分を猛スピードのドアに挟まれた九ノ瀬は、部屋の中から悲痛な叫び声を上げる。

「あのさ、つかぬことを訊くけど、もしかして今のバカ？」

「もしかしくなくてもバカだ。そしてバカにして生徒会長だよ」

第一印象と合わなさ過ぎる役職名に朱空の眼を見開く。感情が顔に出やすいタイプらしい。きっとポーカーなんかをやらせればいいかにもなるだろう。今度機会があれば誘ってみたいと思う。

九ノ瀬の登場は朱空に対してこれまでにないほどの衝撃になったようだ。眼をぱちくりさせて何やらをうわ言のように呟いている。

見当を付けるならおそらくは先の信任投票の際、九ノ瀬の名前の横に丸印を付けてしまったことを悔やんでいるとかそんな感じと見れる。一年なら用紙の一番上に書かれた名前に適当に丸を付けてしまっても無理はないからな。

「いてて……律、てめえ」

「なんだ、生きてたのか」

「殺すつもりだったんですか！？」

九ノ瀬はドアに体重を預ける形でどうにか立ち上がっている状態だった。膝が震えている。

一撃必殺を目論んだ攻撃も残念ながら瀕死の状態に追い込む程度しか効果を発揮しなかったらしい。手心を加えてしまったことが実に悔やまれた。

それはそうと、とか声だけではどうにか気丈に振舞って九ノ瀬が口にする。その視線は、昨日俺に向けたものと同じ侮蔑を湛える瞳で己を見下す朱空に向かっていた。まだ何か妄言を撒き散らすつもりなのかと思った俺だったが、そこはさすがに生徒会長。

人格のシフトチェンジは実に見事な早業だ。

「君、生徒会室に用があつてきたんじゃないのか？」

「……まあね。そうかも知れなかったけど忘れた。あんたみたいなのに頼むことなんてない」

上級生に随分なものいいである。

不遜に過ぎる態度を肯定した一年に対してもしかし、会長モードの九ノ瀬は動じない。

人畜無害な微笑を軽く口元に浮かべつつ、

「目安箱への投書か。なら申し訳ない。今中を調べてたところなんだよ」

爽やかさを全面に押し出した九ノ瀬の会長スマイルが言う。そしてどうやらこいつの言っていることは専ら見当外れでもないみたいで、眼を細めた朱空が遂に全身で振り向いた。その動作だけで九ノ瀬の読みを肯定していることになるが、本人は自分の失態に気付いていないらしい。

「だから、あんたに頼むことなんてないし目安箱なんて知らないわよ。いいから、あんたはそこのバカといっしょにバカっぽくてアホなことしてなさいよ。はつきり言つてあげるわ。あんた目障り」

またよく解らんことを。昨日のことと合わせて今の状況を検分するに、朱空は動揺すると勢いで物を言ってしまう癖があると見受けられた。胸中の漣が言動から丸解りだ。

つうか俺を括りに入れるな。

「落ち着けよ朱空」

「落ち着いてるわよ！」

あ、強がってる人間の顔だ。

「なんか相談があるんじゃないのか？ 別に隠すことじゃねえだろ。それに会長こそこれだが、生徒会自体は意外と頼りになる。なんせ天下無双の豪傑を率いているくらいだからな」

パラメータで表すなら知力も戦闘能力も限りなく最大値に近い。蒼がいれば執行不可能な依頼なんてないのではないかと俺は本気で

思っていたりする。失敗することがあるとすれば、今朝の事例に同じく過剰加害くらいだろう。

「なによそれ、真田幸村みたいな奴でもいるっての？」

「本人は宮本武蔵だとか言ってたけどな」

至極どうでもいい。

とかいいつつ、話が逸れたのがいけなかったのかもしれない。廊下を満たす空気は恐ろしくくらいに固体化してしまった。九ノ瀬は表面上こそ会長としての体裁だが、状況打破に転ずる手を持ち合わせていない様子だし、朱空は、こいつはこいつでさっさと教室に帰るなりすればいいのに仁王立ちで俺を睨み続けている。

こうなってしまうえば、俺がどうにかするしかないのか。……そうだろうなあ、もう。

「とにかくだ」

何がとにかくなのかは我が事ながら不明だが、

「目安箱への投書には管理する側に守秘義務が生じる。俺は生徒会の面子じゃないし、この場で依頼のやり取りが行われるのはよくない。だからこの場は一旦なかったことにして、依頼があるならまた機会を改めればいいんじゃないか？」

後半はむしろ朱空に対して言ったつもりだったのだが、律儀にも応答してきたのは九ノ瀬のほうである。

「それもそうだな。それじゃ、昼休みも残り長くないし。律の案を採用するでしょう。それでいいかな？ えーっと、朱空さん」

砕けた表情をしているのは九ノ瀬だけで、それだって本心からの感情表現ではない。生徒会室の前ということもあり、場の最高責任者としての義務的対応から漏れ出た安寧の笑みがそれだ。一歩気持ちの配分を間違えれば苦笑にもなりかねない絶妙のバランスでそれは保たれている。

「……人捜しよ」

だってのに、丸く収まりかけていた状況をまた尖った形にしかねない発言するのは勿論、朱空末那だ。酷く苦い表情で、壮絶な苦悩

の果てに辿り着いた答えがその一声であるかのように、朱空は上目遣いに俺を睨みながら口にした。どうでもいいが、そんなことを俺に言っても仕方ない。何度も言うが俺は生徒会の人間ではないのだから。

「人捜し、それを頼みに来たって言ってるの」

「おまえ俺の話聞いてたのかよ」

「聞いてたわよ。宮本武蔵なんでしょ？」

そうかい。やっぱり聞いてなかったのかい。

「だからな、その話はまた後日だって」

言っただよ、とは続けられなかった。俺の台詞の結びを九ノ瀬が奪い去ったからだ。

「承りました、お嬢さん」

いつの時代の紳士をイメージしているのか、脚をぴたりと揃えた九ノ瀬は右手を胸の下に左手を後ろ手にして腰に回す姿勢で軽く礼をする。少女漫画に登場していきそうな執事を思わせる動作だった。面を上げた九ノ瀬が次に標的に選んだのはあろうことか俺で、繕い物ではない本物の笑顔に口元を吊り上げながら意味深なウインク。なんだよ。なにを訴えてやがるんだ。

とか思いつつも実のところ、俺は考える必要がない。

九ノ瀬の笑顔は反論も否定も許す余地を作らず、ここに来て明確すぎる腹の内を俺に明かす。

いつもの顔だ。

そう。九ノ瀬の――厄介事を他人に押し付けてしまおうという、邪でねじくれた考え。

理解するに時間は秒を要さなかったが、それでも俺の制止は間に合わない。事態は既に取り返しが付かない段階にまで発展していた。なぜなら俺が九ノ瀬の意思を解する刹那の内よりも先に、あのバカは了承の意思を示してしまっているのだ。

「それじゃあ丁度いい」

いつからか。

春前に九ノ瀬が生徒会長に選ばれてから？ 違うね。

「律、この娘の面倒はおまえが見てやってくれ」

なら十年前に九ノ瀬と知り合った日から？ それだって違う。

遡るのは、そこまで昔でなくいい。もっと近い。ずっと近い日。

「おまえに頼んどいた件も似たような内容だし、この娘……朱空さんだって俺よりおまえをご所望だ」

たった一日前。歯車を狂わせる出会いはまさに昨日。

俺が、朱空に声を掛けちゃったその瞬間だ。

「な、いいだろ？ 俺達、親友じゃねえか」

定型句と化した台詞を臆面もなく口にして、微笑みかける幼馴染。覚えていやがれ、友情の代償はいずれ形を伴って返してもらう。

断りきるだけの理由を探す手間さえも億劫過ぎて、苦笑さえも作る心境にあらず、俺に出来るせめてもの抵抗は一つだけ。不服を告げる漆黒の瞳で俺を睨む朱空の、その端麗な容姿を見下げる。

「ふん。色々不満はあるけど取り合えず納得しといてあげる。じゃ、よろしくね、律」

言葉通り不満を拭い切らない挑発的な面構えの小娘の、けれど不敵に微笑む口元を発見して元からなかった戦意をマイナスの領域にまで落とした俺は、頭一つ低い位置から差し出された手を握ることしか出来なかった。

客観的に見て。

始まりの光景が昨日だとするならこれはその再現であり。

違いといえば、今度の邂逅はキャッチボール程度じゃ終わってくれそうにないことだった。

やれやれ。

誰か代わってくれ。

3／デイリーアフタヌーン＋α

／1

目安箱とやらの実態を説明するに当たっては江戸時代に徳川吉宗が行った改革の意図と内容を転載すれば、記述問題の解答としてはほとんど満点が貰えることだろう。

相違点があるなら実施された期間だけであり、この公立高校の歴史は遡っても江戸時代などではない。目安箱の設置は前任の生徒会長が行なって九ノ瀬が引き継いだため、その歴史は現在にして三年目に突入したところだ。

生徒達は自身が抱える溢れんばかりの悩みや要望を文字によって紙に投影し、それを生徒会室前に置かれた目安箱に入れるだけでもれなく願いが叶うといった具合である。あくまで常識の範囲内での話だが。

なんら不自然のない試みではあるが、民主主義の観点からしてこの目安箱には一つ問題がある。この場合の問題とは不条理とも言い換え可能だ。

その不条理が何であるかなんてのは想像に容易い。考えてもみる。投書に基づき依頼を執行する側は目安箱による恩恵を受けられないのだ。民主主義が平等を謳うなら、こんなものはとんだ不平等じゃないか。

現在、そんな悲しき不条理の犠牲になっている男子生徒が一名。他ならぬ俺だ。

「あんたさあ、どうして生徒会の役員でもないのに、生徒会の仕事なんて手伝ってるの？」

俺の一步前を歩く朱空が首だけで振り向きながら問いかける。

腕を組んだ上に前方不注意では、事故ったときの対処が一切できない。今でこそ昼休みも終盤で、そうでなくても人気の絶えた旧館の廊下だから問題ないとはいえ。普段からこんな無茶苦茶なことを平然とやらかしているのだろうか。

「そんなもん、俺が知りたいくらいだよ。理由なんてない」

「弱み握られてるとか？ あたしならそうするけど」

「……だろうな。だから、違うって。別にそんなんじゃないよ」

生徒会室前で的一件から新館に戻る廊下の道中。

横柄な態度と歩行中常に俺の一步前を先導するように歩く朱空の姿。当事者の俺自身ですら両者の学年を間違えてしまいそうな画だった。岡目なら罪人の連行と間違われるかもしれない。

「理由もなしに他人に協力するなんてありえないでしょ。人間なんて損得勘定の権化じゃない。……ん、まあ、言いたくないってんならさわりだけで構わないけどさ」

「聞くんじゃないか」

誤解されがちだが、さわりとは本題を意味する言葉である。こいつも誤認していた口か。

「誰にも言うなよ」

声を潜めて俺は言う。聞き取りづらかったのか朱空が立ち止まる。「本当は俺、国から金で雇われた作業員なんだよ。ある事情からこの学校を調査しているんだ」

「あら、奇遇じゃない。実はあたしも似たようなものなのよ。ただしあたしはフリーランスのトレジャーハンター。狙いはこの学校に隠された秘宝よ」

「なんだと……ならおまえが、あの――」

「ふふ、あまりあたしの眼は見ない方がいいわよ。あんたの心を盗んじやうからね」

「……」

「知らないから余計なもの盗らせないでって言ってんの」

……この小娘。

負けじと反撃の手を講ずるも、その糸口は見つかりそうにない。どころかこれ以上こんなやり取りを続けるなら、余計にとつばに嵌る結果になりかねない気がした。落とし穴があると解っていて、わざわざ飛び込むような真似は誰だっけしたくないだろう。俺だって同じだ。

一人会議の結果、この場合は諦観することを決めた俺の表情が朱空にはさぞ滑稽だったらしい。満足気に鼻を鳴らすと、自信に満ちた笑みを振り撒いて再び俺に背を向けた。俺は黙って脚を動かすことに専念する。

「あ、そうだ。今のあたし達って一応協力関係にあるわけじゃない？」

頷く。気分的には協力って感じではないのだが。

「だったらさ、あんたが請け負ってる案件ってのも話してよ。さっきの奴……名前思い出せないや。生徒会長が似たようなことって言うってたけど、あんたも誰か搜してるわけ？」

「まあな。そんな感じだ」

答えるべきか逡巡もあったが、俺がしなければならぬことが投書の中身に直結することはない。何せ依頼を執行するとか以前にまず、その投書主を発見することから始めなければならぬのだからな。俺の行動は所詮生徒会執行の前準備、お膳立てでしかないのだ。

「ふうん」

同調しただけの返事に、朱空は興味を持った風に声を出す。

振り返ろうとも立ち止まろうともしない背中が、さらなる疑問を投げかけてくる。

「どんな奴を搜してるの？」

「そいつは言えないな」

核心に迫り過ぎだ。これ以上は個人情報漏洩の恐れに繋がる。俺の口から話すには荷が重いし、その権利はない。

「初恋の相手とか？」

「答えられないって言ってんだろ」

「親の仇とか！」

「何でちよっと楽しそうなんだよ」

声が弾んでいた。

ていうかそんな依頼を学校機関に持ち込むな。警察に行け。

「……じゃあ何なのよ」

「世の人間が全員初恋の相手か親の仇かしかいないと、おまえは思ってるのか？」

恐ろし過ぎる世の中だなそいつは。

あんな、と呼びかけてから生徒会室の前で言ったことを繰り返す。投書の内容について守秘義務を主張すると、朱空は意外にも「あつそ」の一言で引き下がった。元からそこまで興味があつて訊いてきたわけではないようだ。

校舎から裏庭に出る。渡り廊下で繋がっている一棟と二棟は内部から移動できるが、旧館と本館は一度屋外に出る必要があるのだ。鳥瞰図で一棟、二棟、本館、旧館の位置関係を表すなら先の三つが形成する凹型の裏に旧館が、本館と平行に描かれることになる。

本館と旧館を結ぶのは、点々と埋められたコンクリートの道。その一つを踏み、今度は俺から朱空に訊いた。

「おまえこそ誰を捜してるんだ？」

協力関係というなら、俺の方こそ朱空が目当てとする人物を知っておかなければならない。

投書主を捜すに当たっては不特定多数の人間にコンタクトを取ることになるだろうから、朱空の捜す人物がその過程で偶然発見できる場合もある。調査を並行して行えるならば、どちらか一方に集中するよりも効率はいはずだ。

びたり、と朱空の動きが止まる。

「知りたい？」

「知りたい」

振り向いた眼が本気を告げた。無表情の白い顔が場をシリアスな雰囲気に変える。

「聞いちゃったら、もう後戻りはできないけど……それでもいいの？」

「……」

え、なにこの空気……？

とん、と軽い音がした。小さな跳躍を終えて、俺の体の前に落ちてきた朱空の体。

上目遣いでこちらを見上げ、

「ヤダ。教えない」

悪魔みたいな喜色満面がそこにはあった。

「大丈夫よ、あんたが知っておく必要なんてないから」

「ならどうやって捜すつもりだよ」

「だから心配要らないってば。あたしにはちゃんと策があるんだから」

あんたと違ってね、とか、さぞかし痛快に笑って言う。協力関係はどこへ行った。

お互いに必要以上どころか必要最低限の情報さえも提供し合う気がないことが判明した。といっても俺の場合は話さないのではなく、話せないが正しい。

よく考えればこれは奇妙な光景だ。

俺は生徒会の人間ではないのに生徒のお悩み相談なんぞに付き合っているし、朱空は自分から生徒会に持ち込んだ依頼の肝心な部分は伏せている。それならはじめから自分一人でことを済ませてしまえばいい。目安箱への投書なんて必要ないはずだ。

……いいや、違うか。

おそらく朱空は生徒会の協力ではなく権力が必要だったのだろう。こいつの言う『策』とやらを行う為に。それがどんなものなのか俺には知る術もなければ知る気もないが、精々常識に適った策であってくれることを願いたい。生徒会の権力なんて学園を出れば何の効力もないのだから。権力と呼ぶのさえもおこがましい。

見れば朱空は片足のステップで飛び跳ねながら足場を渡っている。

左右を交互に使い分けながら時々回転。無邪気に遊んでいらつしやるご様子だ。とか保護者みたいな心地で見守る内に、朱空はコンクリの足場を越えて校舎の入り口にまで到達してしまった。

慮外なことだが本館に到着した朱空は、そこで信念のごとくに貫いてきた後姿をあつさり放棄して俺を待っていた。

「それでだ朱空、どうするんだよこれから」

「なんのこと？」

階段を昇りながら尋ねる。きょんととして首を傾げる朱空。

「ん。ああ、さっきの話？ 別に、することなんてないわよ。あんたはあんたで勝手に行動してていいわよ。用があったら言うから、それまでは別行動」

さも当然のここのように、朱空はそんな返答を口にした。

「それから」

最後の一段を飛び越えて、昇降口に着地。

朱空が体を翻し、まだ中段にいる俺は見下ろされる形になった。

突き付けられる指先。宇宙を丸ごと詰め込んだみたいな瞳が、

「名字で呼ばれるって嫌いだから、あたしのことは名前で呼ぶこと解った？」

予鈴の音をバックにして、現状に一切関係のない注文を寄越した。

3／搜索開始＋β

／2

昼休みから数時間経って放課後。

この後の行動は九ノ瀬に押し付けられた案件を片付ける方針で動くか、それ以外かの二択から選ぶことになる。俺の選択は前者。進行度ゼロで解決の見込みはまだないが、だからって放っておいては一向に進展など訪れない。当てはないが手をつけることにしよう。面倒事は手元に置いておきたくないからな。

九ノ瀬曰く投書主は一年の女子であるらしいから、情報収集を行うならば一年を捕まえてソースになってもらうのが正攻法だ。問題は誰に協力を仰ぐかであり、部活に所属していればいざ知らず、帰宅部の俺には後輩と呼べる人間が存在しない。

いたとしても何と説明すればよいだろう。

そもそも、この方法は今の俺に適していない。正当な生徒会委員ならば問題はなくとも、俺はそれでないのだ。一年から話を聞きだすのには、上級生というだけでは弱すぎる。九ノ瀬の推測が正しいならば、しかも相手は女子でなければならぬ。面識のない上級生男子としては立ち回りが憚られる。

でなくてもなんて聞けばいい。おまえのクラスに誰か苛められる奴はいないか、なんて言えるはずがない。そんなことが可能なら九ノ瀬が自ら実行すればいいのだ。俺が動く意味がないし、何やらを嗅ぎ回ってる二年の噂はすぐに広がる。本末転倒もいいところだ。「どうしたんだ律。浮かない顔をしているな」

「ああ、蒼か」

ホームルームが終わってから席を立たない俺の前に帰り支度を

整えた蒼がやってきた。

ふむ。妙案が浮かんだ。

蒼に手伝って貰うのはどうだろう。蒼なら学年を問わず絶大な人氣を誇っている有名人だし、その人格は広く学園内に流布している。変な疑いを掛けられることはなく、簡単に口を割ってくれるかもしれない。情報を引き出す相手が剣道部の後輩ともなれば尚成功率が高い。

「本当にどうしたんだ？ さっきから私の顔をじろじろと」

「いや、なんでもない」

冷静になって考えてみれば、蒼を中継ぎ役にしても同じことだ。

蒼に事情を話してしまえば、こいつはあらゆる手段でことを解決し、犯人——この場合は仮定としてイジメを行っている側の人間——を半死半生状態になるまで痛めつけるだろう。それが解っているから、九ノ瀬も俺に案件を持ってきたのだ。なら、この案も破綻する。

「怪しいな。律、おまえは嘘を吐くとき、まずはじめに『いや』と口にするんだ。さらに『なんでもない』と続いた際は大抵なんでもある」

「なるほど。よくご存知で」

「十年も幼馴染をやっているんだ。私を簡単に欺けると思うな。ほら、困っていることがあるなら話してみろ。それとも私には話せないことなのか？」

話せないことだと、今まさに結論を下したところなのだが。

こうなった蒼を納得させるのはなかなか困難だ。

「……解った。蒼、よく聞けよ」

「う、うん。急に畏まって、びっくりしたぞ」

小さく息を吸う。

吐き出すのは吸い込んだ空気だけではなく、蒼に対する答え。

「好きだ、蒼」

揺るぎない瞳で俺は言い放った。

「な、なにをいきなり！ さては、律、そうして私を混乱させるつ

もりなんだな！」

「いいや、真剣だよ。蒼、おまえを愛しているんだ」

「う、あああああ、愛とか言うな！」

「アイ、ラブ、ユー」

「解った！　もういい！　詮索した私が悪かった！」

全速力で教室を飛び出していく蒼だった。

まだ帰っていなかった生徒達の眼が痛い。なにも叫ばなくていいだろうに。

無敵と思われる蒼にも弱点と呼べる部分は存在するのだ。知っているのは俺と九ノ瀬くらいだが。

さて、と呼吸を整える。

蒼に全てを詳らかにしてしまうことは避けたが、問題は一步も解決に向かっていない。その気配もない。昔の人はこういう状態を指して八方塞と言ったのだろう。困難を切り開く術が見つからず、問題の始発点で立ち往生。俺は途方に暮れて窓の外を見た。毎日飽きもせず同じ場所に沈んでいく太陽と、やはり普段通りの赤い空。

あ。

これは盲点。俺にとって協力者になり得る一年は意外と近くにいることを忘れていた。いや、自覚がなさ過ぎて気付かなかったといふべきか。

朱空末那もまた、なにを隠そう市坂高校に席を置く一年生女子だった。

だがどうだろう。朱空が、果たして俺に情報提供などしてくれるだろうか。それに相手が朱空になったとしても用件柄、俺が自分の目的と意図を共有しなければならぬことに変わりはない。昼休みのこともあるし俺の気分上、掌を返すにしてはタイミングが悪い。

しかしながら他に有効な選択肢がない以上、いくら劣悪な発想とはいえ今はそれにすがるしかない。頭があればこれ考えている内に、体はその結論を導き出していたのだろう。ポケットから取り出した携帯のディスプレイにはメール制作画面が映し出され、宛先は『九

ノ瀬渚』を表示していた。

朱空末那のクラスを尋ねる本文を考えうる中から最短の文章で打鍵して送信。指先が文字を生み出す間に教室を出、上の階を目指す。一年と二年は校舎が同じで、五階建ての校舎をそれぞれツーフロアずつ占拠している。二階と三階が二年のフロアで、同じように四階五階が一年となる。

三階の階段を登り終えたところで携帯のバイブレーション。九ノ瀬の返信が届いた。俺がメールしてからまだ五分と経っていないはずだ。メッセージを見た後で調べたのであればやけに早い。事前に調べていたのだろうか。曲がりなりにも朱空は目安箱を通じて生徒会に依頼を持ち込んだのだから、それくらいはしていても不思議はない。

メールの内容は実にシンプルで無駄がなく、与えられた情報は朱空のクラスと出席番号。出席番号までは頼んでいないが、これは確かに役に立つ。余談を付けるなら、朱空の出席番号は一番だった。それもそうだろう。これで数字が二桁の方がおかしい。

かくして俺はさらに上のフロアを目指して階段を踏む。

そこで、

「あっ、律。珍しいねここで会うなんて。なにしてるの？」

鞆を肩から提げた下校スタイルの双色遊季に出くわした。

「この階に何か用？ 渚ならもう生徒会室に行ってると思うよ」

俺と蒼が同じクラスなら、遊季は九ノ瀬の隣のクラスに所属している。

廊下を歩く九ノ瀬を見かけたのだろう。遊季の言っていることは正しいと思うが、九ノ瀬に用があるならそれは既に済んだことなので関係がない。それに直接会う必要もないので、遊季からの情報提供はまったくの無意味というわけだ。

「いや、別に九ノ瀬に用があるわけじゃない」

俺がここにいる理由に少なからず九ノ瀬が関係しているのは事実なのだが。そんなことを遊季にいう必要はないし、言っても事態が

拗れるだけだろう。なので俺は、一目に解り切っていながら遊季に質問してみる。

「今から帰りか？」

「うん。生徒会の手伝いなら協力するよ。この階のことなら僕の方が土地勘はあるわけでしよ」

土地勘とかいう言葉が適応されるほど我が校の校舎内は複雑ではない。ていうかどの階も同じだ。

「大丈夫だよ。俺一人で問題ない」

「よっし。それじゃあ決まりだね。で、なにをしてるの律？」

「……つまりおまえは、俺が何を言ってもついてくるつもりなんだな」

すたこら。遊季の小柄な体躯が俺の隣に回り込んだ。

どうしたものか。別に遊季一人引き連れて歩いていても不信感が増すわけではない。いても邪魔にはならないと思うが、どうだろう。俺は構わなくとも朱空の方は構うのではないか。昨日今日の接触から朱空末那の人格を分析すると、奴は非常に解り辛い人見知りだ。初対面の人間に懐かない猫、とかそんな感じ。

「ほらっ、黙ってたら解らないよ。なにをしてるのか教えてくれないの？」

急かされてもなあ……。

俺は現段階でまだ、おまえの同行を了解した覚えはない。やはりここはきっぱり断っておくべきだ。ただでさえ扱いの面倒な人間と話をしに行くのに、遊季を連れていってはかかる手間が三割増しする。

「律……」

遊季、ご立腹。

解り易く頬に空気を溜めて膨らませ、上目遣いはいつしか視線の鋭角を成していた。

「解ったよ。好きにしろ」

ふっ、と遊季の表情が緩和する。引いていた顎を上げたことによ

り上目遣いが見上げる視線に移り変わり、細くなった瞳が通常の大
きさに戻る。それを確認してから俺はご機嫌を取り戻した遊季に「
ただし」と注釈を付け加えた。

「用があるのはこのもう一つ上の階だ。仕事の内容も俺一人で事足
りるから、おまえは大人しくしてろよ」

「オッケー。解ったよ」

本当は解っていない奴の返事を俺は聞いた。なんで俺の周りの連
中はみんな、俺の話を聞かないのだろう。壮絶な無視が行われてい
る気がする。

「それにしてもよくやるよね。いつそのこと正式に生徒会入っちゃ
えばいいのに」

「面白い冗談だよ、それは」

面白くも笑えない。そんなものを冗談と呼んでいいのかは解らな
いが、先行して階段を上がる俺に一段分後方下部から遊季が戯言を
投げてくる。

「冗談のつもりはなかったんだけど……。律が生徒会のお手伝いし
てるのってさ、渚が会長だからなの？」

「まさか。んなわけねえよ」

冗談というならその方がまさしくだ。

「だよね、やっぱり。うんうん。律だったらそう言うと思ってたか
な」

なんか楽しそうな声のトーン。からかわれてるのか、俺。

「でもさ、律が何て言っても、どんな風に思っても結果的には手伝
っちゃうんだよね。無視できないんだよね。他人事だとか、面倒く
さいって言いつつも、いつだって頼まれたら断れなくて最終的には
協力してるんだよね。昔から困ってる人は放つとけないもんね、律
は」

「なにが言いたいんだよ、おまえ」

「言いたいことなんてないよー。でもちよっと思っただけ。律はず
っと変わってないな、ってさ。随分無愛想にはなっちゃったけど。」

相変わらず自分以外には甘いよ」

歌うような声は続く。

「けどそういう考えは早目に棄てた方がいいよ。律本人は破棄したつもりかもしれないけど、実際周りから見たら全然そんなことないんだよ。昔のまま、変わってない」

罪状を謳い上げる遊季の声。先の読めない訴え。

一オクターブ低くなった声のトーンが、二分休符の間を挟んで言った。

「ずっと気になってたんだけどね、律。律はさ——て、うわッ」

これまでに比べて控え目な声を遮ったのは謀らずして俺だった。正確を期して描写するとすれば、上機嫌に舌を回す遊季は喋りに熱が入った結果正面で立ち止まっていた俺に気付かずそのまま衝突した、といった成り行きだ。舌嚙んだりしてないだろうな。

「あ、悪い」

「もー！ 急に立ち止まらないでよ！ 現実でこんな風に事故るなんて思ってもなかったよ！」

急にと言われても。俺は単に目的の教室に到着したから足を止めただけで、そんなこと、いちいち告げなくても雰囲気で察せるだろう、普通は。それに立ち止まった途端にぶつかるほど近距離に遊季がいたことも気づかなかった。

階段の下で会ってからここまでずっと背中越しに会話をしていたことに、遅まきながら俺は今自覚する。会話なんて言っても実質、遊季が一人で喋っていただけだ。振り返らなかったのは遊季の話は聞き流す程度で真剣に耳を傾けていなかったたので、興味がなかったからといえばそれが理由になる。

関連して俺は昼休みのことを思い出す。

背中を見せて話をするのが昨今、密かに浸透しつつあるブームなのだろうか。

「痛いよー、鼻打ったよー」

騒ぐのを止めた遊季が鼻を押さえて俯き加減に泣き言を漏らして

いた。下を向いているからよく見えないが、視認できる範囲で鼻血は出ていないようだった。重症になるほど勢いのある衝突ではなかったと思うけど。

「悪かったって、大丈夫か遊季？」

「窪んだかもしれない……」

「安心しろ。絶対じゃない」

遊季の受けたダメージは俺が思うよりも大きいらしく、涙目が引くまでにはもう少し時間が掛かりそうな様子である。俺としてはこれからターゲットと接触しなければならぬのだから、遊季には静かにして貰える方がありがたい。

とはいえその前に一つ。

「遊季、気になってたことってなんだ？」

最後に言いかけて、けれど遂げられなかった言葉の先を促す。

と、遊季は。

「もういいよ。……もういいってば！」

怒号して明後日の方向に顔を背けた。俺が悪いのか？

「興が削がれたよ」

「涙目で言っても似合わないな、それ」

「黄昏たよ！」

「意味解らねえよ」

楽しげな様子はどこへやら。本人の言う通りすっかり興が削がれてしまったらしい。黄昏てはいないけど。遊季はあれだけ饒舌だった口を硬く閉ざして窓に凭れ掛かった。この様子だと続きは訊いても教えてくれないだろう。

遊季が大人しくなった隙に俺は正面の教室内部を窺う。

今日の時間割だと一年も二年も授業数は同じのようで、既にホームルームが終わったと見える教室には数えられるほどしか生徒は残っていないかった。机に腰掛けて談笑する数人の女子集団を概観して窓際の席を前から順番になぞる。この時期だとまだ席替えは行われていないだろうから、朱空の席はその辺りにあるはずだ。

なのだが。

窓際の席はどれも空席になっていた。

よく見ると教室に残っているのはさっきの女子達となかなか作業を開始しない掃除当番（箒を持ってる連中）だけだ。念の為にもう一度教室全体を見渡してみたが、やはり朱空の姿はない。

「……あいつ、もしかして」

帰ったのか？

自分の視界を信用するならば、当然導き出される解答。

結果から言うと、もしかしていた。

教室は間違いなくここで合っていたし、出てきた生徒を捕まえて質問してみたところ朱空はさっさと帰宅してしまったとのことだった。否、帰宅した、とは正確ではない。正しくは教室を出た、だ。それはまだ校内に留まっているかもしれないということでもあつて同時に、前述の通り帰途についてるのかもしれないということになる。

「誰か探してるの、律？」

機嫌を直した様子で遊季が訊いてくる。首肯。そして尋ね人が予想地点にいなかったことも付け加えた。

「そっか。でも意外だな、律って一年の知り合いなんていたんだね。あ、知り合いつていうか生徒会関係だから、目安箱の投書主かな？」
問われて俺ははじめてその疑問に思考が及ぶ。朱空はこの件について何者かと問われた答えは、あちらの言葉を借りるなら協力者だ。だが俺個人にとってならば、生徒会への依頼主でもある。この場合遊季にはどっちで応えるべきなのだろうか。

「そんな感じだよ」

どっちでもよかった。

前者でも後者でも生徒会、目安箱関連なのに差異はない。俺にとって朱空は問題事項の種。その意図だけ伝われば口上の表現などなんだって構わない。遊季自身そこまで詳しく追求する気はないだろう。

さあ。

教室を出るときと同じ、冒頭に立ち返って再び選択肢は二つ。
あるはずもない心当たりを基にした朱空搜索の第二劇を開始する
か、

この時点で事を切り上げて帰っちまうか。

続行か、中断。

決定に寸陰を費やして、俺は踵を返した。

俺はどうも正解を選んでいたらしい。

その選択がモラルとして正しかったのか間違っていたのかは俺には判断しかねるが、眼前の光景は目的達成の面で見ても疑いようもなく正答を俺が選り抜いたことを証明している。反論の余地などなく完璧な、減点なしの証明だ。

これほどに絶対的な解答が他にあるはずがない。

夕陽を反射する水面を見つめて、土手の斜面に腰掛ける朱空末那がそこにいた。

九ノ瀬に教えられた教室に朱空を発見できなかった俺は、その後それ以上の行動を切り上げて帰宅を選んだ。朱空なら明日の昼休みに教室を訪ねれば会える。今日必死になって探さなくてもいいだろう。それが俺の出した結論。

そして、その所懐を実行したことで行き会ったのがこの結末。

帰り道の河原に、先日と同じく朱空末那を発見した運びだった。

それはまるで昨日の再現。

夕焼けの赤い空も、光る川の水面も、吹き抜ける風も。ビデオテープを再生しているみたいに変化なくそこにある。何もかもが、切り取られた一枚の絵のように。与えられた役割に忠実で、愚直なままで同じ夕風を作り出す。

朱空はやはり何を考えているのか解らない顔をして遠くを見、土手に座って脚をばたばたさせていた。その横顔は俺が知っている傲慢で横暴なのに乗せて生意気な小娘のものとは似ても似つかず、常に自信に満ち溢れた挑戦的な瞳は細く、黄昏に消えていく赤色を見

詰める様子は儚い。朱空の格好をした別人を見ている気分だ。

それにしても朱空は何をやってるのだろう。何もしてないのは一目瞭然だが、だからこそ俺はその疑問を抱かずにはいられない。なぜなら朱空がこの場所にいること自体がおかしいのだ。

放課後なんだから学校に残っていなくても特別不思議ではないが、今日の朱空には残る理由がある。あの娘は生徒会に人捜しなる依頼を持ち込んだことで見事に、それが本人の思惑だったのかは定かではなくとも、協力者の名の元に俺という疑似権力を手に入れることに成功した。ならば早速それを利用して行動を起こせばいい。朱空は生徒会の後ろ楯をいいことに強引な方法に訴えることだってやりかねない奴だ。本質を見極めたつもりではないが、数回の接触で俺は朱空末那をそういう人物だと認識している。

だってのに現実是这样だ。朱空は早々に学校を出たかと思えば何かしているのでもなく、土手で脚を上下させているだけときた。この光景を正常だと思うことは、どうやら俺にはできそうにない。

「律ー。おーい律ってばー」

遊季の手が俺の顔の前をワイパー染みた動作で往復していた。古典的な手を使うんだなこいつは。

「突然ばーっとしちゃってさ。……も、もしかしてまたあの持病？」

「いや、俺、持病とかないから」

人の設定を勝手に弄らないでもらいたい。とは思うものの、一方では遊季の中で俺の身にどんな病が宿んでいるのかということには多少興味がある。地雷を踏む覚悟で訊いてみた。

「僕に恋しちゃう病」

地雷だった。それもすこぶる質の悪い地雷。ゲリラなんて目じゃないほど。

「あっははは。嘘だってば。さっきから律が構ってくれないから悪いんだよ。いっしょに帰るなんて久し振りなんだからさ、ね、もっとお話しよっ」

「話ってもな……」

「例えばさ、律は爽架が本命なのかそれとも渚と禁断の愛の道を密かに歩んでいるのか、みたいな」

「蒼……蒼だな、それは間違いない」

「スルーされると悲しいよ律……」

遊季が悲しむ様子はこの際気にしないことにして、俺はこの状況下において次に自分が取るべき行動を思案した。

さっきまで捜していた朱空が見つかったのだから、当初の予定通りに情報提供を求めるのか、それとも遊季がいることを考慮して今は声を掛けず素通りするのか。分岐点でまたしても俺は二択に迫られる。毎回のことながらどちらを選んでも明確な答えがあるわけではないから厄介だ。

俺がどちらかを選択するよりも早く、声を上げたのは遊季だった。いつの間にか目線を朱空のいる土手に向けていた遊季は、ちらりと俺に一瞥をくれてから、

「あの娘知り合いなの？」

「まあな。あいつがさっき捜してた奴だよ。今度の仕事の……」
依頼人。

「……協力者だ」

朱空を紹介する肩書きにどちらを口にするべきか一秒未満で迷って、俺は結局そっちを採用した。今から何をするか考えれば協力者という方が正しい。朱空の案件についてでは、俺は協力者でさえないのだからこの場合依頼人と呼ぶのもおかしい話だろう。

「へえ。律が捜してたのって女の子だったんだ。なんだか意外だなー。てっきり中学の後輩とかだと思ってたよ」

遊季は朱空から眼を離さないで言う。

相手を値踏みするような視線。遊季は表情なく朱空を眺めた後で俺を見た。

「綺麗な娘だね。うん。きつといいところのお嬢様だよ」

「朱空がか？ それはないだろ」

名家の出にしては毒舌に過ぎるし、行動にも言動にも品がない。

優雅さとは疎遠の人柄だ。……いや、今の時代そういう考えは古いのか。品格とか雅さとかは家柄に深い関係を持てはいいのだろうか。

「よかったね律。あのまま学校を捜してたら大失敗だよ。もしかして解ってたの？　ここにいてること」

「そんなことは……」

思い出すのは昨日の風景。

星を見上げてからキャッチボールをした夜。

「ない、と思う。……いいやない。ただの偶然だ」

自信のない否定。よくよく考えれば心のどこかで俺は朱空がここにいると直感していたかもしれない。ただそれを予測するに十分な証拠と鑑みる象限が少なかったから、可能性としても見なかったのだろう。昨日そこにいたからといって、今日もまた同じ場所に行けば会えるなんて保障はどこにもない。

「よし、それじゃあ行ってきなよ律」

「行ってこいって、おまえは行かないのかよ」

「僕が律といっしょに動いたのはあくまで彼女を捜すことに力を貸すためだよ。これ以上は生徒会の領分だし、律の言う通り個人的な部分に立ち入ることになっちゃうからさ。だから僕はここでお役御免だよ」

遊季にしてはまっとうな意見だ。確かにその通りで正しい。だが俺の知っている遊季はここまで聞き分けのいい人間だっただろうか。とも思わなくもないが、そういうえば遊季は生徒会絡みで俺が行動する際には無闇につきまとったりしていなかった。今度と同じで、相談内容に間接的なことにしか関わっていない。

双色遊季はそれなりに分別のできる人物なのだ。

「じゃ、僕は先に帰るから。頑張ってねー」

あっさりと手を振る姿が遠くなる。別れを告げてからの遊季は振り返ることなく夕陽の中に消えていった。

……さあ、ここからが一仕事だ。

はじめから俺が懸案にしていたのは朱空を発見することなどではない。大変なのはその後である。なぜならば、朱空末那には決定的に協調性が欠けている。俺が協力しろと言ったところで平然と「嫌だ」と突っぱねるだろう。朱空自身も人間は損得勘定の権化などと言っているほどだ。俺に肩入れしてもメリットがないなら、朱空はきっと動かない。

俺は、それでも朱空がこれもまた自ら口にした『協力関係』という言葉を信じてみることにした。当たって砕けろ。

朱空の第一声。

「嫌よ。どうせエロい質問する気なんでしょ」
一蹴された。

覚悟の上での玉砕は、それはそれで痛いことを俺は学習する。ダメモトの心得なんて心の保険にもならねえよ。くだらないオマジナイだ。

「スリーサイズとか……聞きたいわけ？　もう、男ってそういうの本当に好きよね。世の中数字じゃないとか言ってる奴ばかりなのにさ。バツカみたいね」

偏差値のことを言ってるのか。あるいはテストの点数か。

「ちなみにあんたは、どうなのよ」

「どうとは？」

「胸、おっきい方がいいかちっさい方がいいか」

「いや、別にこだわりはないけど……」

「男が好きなのね」

「……締め上げるぞ、小娘」

「いいわよ。ただし縄は持参で手数料は全部自己負担。明日は体育あるから体に響くプレイはなしね。諸注意はそんなところで代金は――」

「俺はおまえが思ってるような特殊な趣味は持っていない！」
のっけから激しい勘違いだ。

「ん。まあ、冗談はこれくらいでいいかな。そんな慌てちゃってさ、

もしかして本気にした？」

冗談だった。

「おまえに関わっていると、いつかとんでもないトラウマを抱える気がしてならねえよ」

「そう？　だったら、その期待に応えて上げようかな」

「いらん。いいから真面目に話を聞け」

朱空が流れを完全に支配してしまう前に、俺が話の腰を折る。声音から空気の違いを感じ取った朱空が小悪魔の微笑を崩して眉を吊り上げた。俺に主導権を握られるのが気に入らないらしい。

そんなことなど委細構わず俺は言った。

「期待には応えなくていいから、質問に答えろ」

「嫌って言うてるじゃない。面倒くさい」

「とうとう本音かよ」

俺をからかっていないときの朱空は大抵無表情だが、今のそれは憤る心境がありありと表れた形相。朱空は感情の変化が面白いくらい顔に出る。本人に隠す気がないだけかもしれないが。

ここにきて俺は自分のミスに気付く。朱空を怒らせてしまっただけは話が進まない。どうあれ現状では俺にとって朱空は硬直状態を打破のために必要な鍵なのだ。下手に機嫌を損ねられてはいつまで経っても先に進めない。

一度深呼吸をして、気持ちの切り換えを行う。

そうして、そこからがまた一苦勞。

一度傾いた朱空の機嫌を元の位置に持ち直すために俺はまず自分の非礼を心にもない言葉で詫びて、さらに調子に乗った朱空の要求にできる限り誠意を取り繕って応対するなどしてようやくまともに話ができる状態にまで場を進行させた。この際だから俺がどのような言葉で朱空を宥め、どのようなことをさせられたかは謹んで割愛させていただく。

何度目かになる朱空の唸りを聞いた後。

「……解ったわよ。協力関係だもんね、仕方ないから力貸して上げ

る」

不本意だけどね、と如実に語る黒い眼差しが、俺が回復させたつもりでいた機嫌など逆に累乗されたといわんばかりに細められた。面倒だと言ったのは他に断る理由があるのを隠すためではなく、真からの言葉だったらしい。

朱空の了承を得た俺だったのだが、ここで原点に立ち返り思索する。曖昧なままで放置しておいたもう一つの懸案事項。俺の本意を勘繰られずに必要な情報を引き出すにはどうすればよいか。決着を先送りにした迷いが俺の前に立ちはだかる。

……ええい面倒だ。

「率直に訊くが、おまえの知る範囲で……その、なんつうか周りから浮いてる人間ってのはいないか？ 周囲に溶け込めていないだとか。そうだ。環境に馴染めていないとか、そんな雰囲気の奴だよ。知らないか？」

「知らない」

芝居ほどの考える仕草も見せずに朱空が即答する。

建前でもいいから少しくらい思い出す素振りでもすればいいのに。「だって知らないんだもん。知らないことを思い出そうとするなんて無駄じゃない。で、訊きたいことはそれだけなの？ だったら残念だけどあたしはこれ以上協力できないわね」

朱空は残念そうな様子など微塵も感じさせない風に耳の横の髪を払った。

これ以上も何も、俺はまだ協力してもらった実感がない。いたずらに時間を浪費しただけだ。

「だいたい何よその質問。あんたが捜してるのってそんな奴なの？」上下する踵が地面を打ちつける。ざくざくと踏み付けられる草花が不憫で仕方ない。心なしはじめに見たときよりも速度が上がっている気がした。どうやらその行動は朱空の鬱憤に比例して加速するらしい。

「……よく解らないけど、あたしにはあんたが捜してるような奴に

心当たりなし」

「そうか。解ったよ、もういい。時間を取らせて悪かったな」
本心を明かすなら。

上手く話が運んだのなら俺は朱空に調査活動にも協力してもらおうと企んでいた。しかしこの雰囲気ですんな提案はできない。それによく考えれば、朱空にそれを頼むのは俺のエゴだ。あいつはあくまで依頼した側。生徒会の人間でもなければ、俺に協力する義理もない。

今はもう有力な情報が引き出せない以上、俺は黙って場を辞すことにした。これで本当に行く宛なし。明日からは別の方法で解決を図ろうと思う。今のところは、具体的なプランはない。

朱空に謝辞を告げつつ――実感はないが、形式上これでも一応協力して貰ったことには違いない――俺は外れてしまった帰途に戻る。斜面を登りながら今後の活動方針について思索していると、意外なことに俺を呼び止める声があった。

朱空末那だ。

「ちょっと待ちなさいよ」

「なんか思い出したのか？」

「違うわよ。そんなんじゃない。……なんていうか、その、あんたの聞き分けがよすぎて気持ち悪いのよ。あたしが悪いことしてるみたいで……なんだろう、えっと」

「『申し訳ない』か？」

「酷く遺憾なの！」

怒髪が天を衝く。この場合だと俺と朱空の位置関係からしても、怒声は天に放たれることになり奇しくも文字通りというわけだ。

俺は立ち止まってその高さから朱空を見下ろす体勢で会話に挑む。もしかしたら朱空は俺の立ち位置に文句の一つも付けてくるのではないかと思ったが、それも杞憂。朱空は尻尾を垂らした猫の面持ちで現状を受け入れていた。

「あんたさ、自分が誰を捜してるのかってこと、解ってないんじゃない」

ないの？ ……解り辛いんだけど、誰かを捜してるんじゃないかって、誰かを捜そうとしてるみたい。つまりね、自分が捜している人間がいるんじゃないかって、自分が捜さなきゃならない人間を探ってるっていうか……」

俺には、朱空の言い回しがよく解らない。けれどこの奇妙なズレの正体は臍氣にだが掴むことができた。

朱空と俺の搜索は似て非なるもの。誰かを捜すという大原点は同じでも、前提や過程がまるで異なる。俺はいるかどうか解らない予想の上に存在している人物をゴールにして、まずはその終着点がどこにあるかを定めてから搜索を開始するが、対して朱空は既に定められたゴールに向かっていくだけでいい。

両者の間には認識の微妙な相違があったのだ。

「口振りからすると、そうね、あんたがしてるのは元から依頼なんかじゃなくてその前段階。目的のために状況を整えてるってところかしら。……さっきの条件だと、はみ出し者を捜してるみたいだったわね。でもイマイチそれだとピンとこないかな。ん……あんたが嗅ぎ回ってるのって、イジメとかじゃない？」

「……否定はしねえよ」

と、遠回しに赤丸を送る。冷静を装ってはいたが、朱空の推察には素直に驚いた。勿論ヒントは俺の発言中にいくつか転がっていたのだろうけど、それにしてもだ。洞察力が無駄に鋭い。

「ふうん。そっか、生徒会もなかなか真面目なことしてるのね。あんな会長だから、てっきり活動なんて全部悪ふざけみたいなものだと思ってた。ほらあれ、毎週やってる服装点検ってあるじゃない？ あたしずっと邪なものを感じてたのよ。でも……うん。勘違いかな」

「いや、素晴らしい感性だと思うぞ」

九ノ瀬の支持率が保たれているのは、ともすれば俺や蒼の活動成果が奴の作り出す負を上回っているからなのかもしれない。としたら、俺達は知らぬ間に九ノ瀬の尻拭いをしていることになる。気に

入らないとしたらそれだ。もっと早く気付くべきだった。

「イジメねえ……。そんなの、うちの学校にはないと思うけどな。市坂ってさ、一応それなりの進学校なんでしょ」

「世間の評判はそういうことになってるな」

進学校というほどのものではないが、市坂は地元では確かに高めの偏差値を記録している。一年を生徒として過ごした経験から言うと、俺だってイジメなんかが起きているとは思えない。

「よし……決めた」

宣言するや、飛び上がる朱空の体。

翻る黒髪。

流れる体躯。

夕陽をバックに旋回した朱空の、極上の悪戯を思いついたときの子供のような、その不敵なまでに晴れやかな笑顔が声を張り上げて叫ぶ。

ずっと遠くまで響く涼やかな声が、彼方に降りようとする夜の帳を越えて吹き抜けた。

「明日からはあんたに全面協力して上げる」

ワンステップで俺の傍に馳せた朱空の仁王立ち。

腰の位置にあった左手の腹がびしりと俺の鼻先を射抜く。

「安心しなさい。あたしが味方になったんだから、どんなことだってたちどころに解決よ」

声高らかに胸を張り、輝きを増した瞳が光を散らす。

面喰う俺は何も言い返すことが出来なくて、自分よりも一回り小さい少女の前に棒立ち。続く言葉を拒むこともできず、だからといって受け入れたわけでもなく、爽快に過ぎる清涼な笑顔が下す決定を、無言のままに聞き遂げた。

「あんたに発言権はなし。今からあたしがあんたのルールよ。ほら、いいから黙って頷きなさい！」

3／昼休みの来訪者＋δ

／4

朱空の言葉の真意を俺が知ることになったのは、二日後の昼休みだった。

「いなかったわ」

「……なにが？」

教室中にある全ての衆目が俺と、俺の席の前で腕を組む朱空に集まっていた。そしてそのどれもが好奇心や猜疑心やあるいは野次馬的精神でもって俺達を注視するのではなく、ただ純粹に途方に暮れるかのごとき啞然とした面持ちをして蜃気楼でも見るような目をしている。ようするに、状況を正しく理解できている人間は朱空を除けば他に、この教室内に当事者たる俺を含めても一人として存在しない。

水を打ったような沈黙に誰かのまばたきの音が聞こえた気がして、そいつが俺の瞼が立てた音なのではないかと思い、自分の意識はどうやら正常に稼働しているらしいことに気が付いた。

状況を確認しよう。今は昼休み。場所は二年三組の教室で俺のホームルーム教室。俺はこれから普段通り生徒会室に行って弁当を広げようと椅子を引き――時間が停止したのはその直後だった。

変に鮮明な記憶を辿る。教室の扉は閉まっていたはずだ。だからこそ並外れた開扉に伴う馬鹿でかい音に反応して反射的に俺はそちらに顔を向けたのだし、ついでに言えば朱空末那というそこに有り得ない幻を発見したのはその時だ。朱空は顔色一つ変えずに目の焦点を、俺が昨日朱空を捜している際にしたのと同じ動作で室内に振

り撒き、サーチライトの眼光はやはり俺を捉えることで動きを止める。上級生達から注がれる不審の眼差しを一身に受けながらも威風堂々と、朱空は俺の前にまでやって来て――冒頭直後の台詞をのたまった。

夢見心地（夢といっても悪夢の方だ）で数回瞼を開閉させてから俺はもう一回問う。

「なにが、いなかったんだ？」
ていうかこの状況はなんだ。

「なにを寝惚けたこと言ってるの。あんた四限目ちゃんと受けてた？　目開けたまま寝てたんじゃないの」

ずい、と中腰になって顔を近づけてくる朱空。鼻の頭がぶつかり合うくらいの近距離で俺の目玉を抉る朱空の黒瞳が放つ光。ややあつてから、何事もなかったように顔を離される。

「……解った。いやちつとも解らんが、とりあえず解った。そうしよう。だから朱空、話があるなら場所を移させてくれ。ここは人目を引き過ぎる」

目線でギャラリーの群衆を示す。朱空はそれでやっと自分が衆目の中心になっていることを悟ったのか、不快そうに喉を鳴らしてかと言った。

「そうね。それじゃあ移動しましょ」

そして言うなり唐突に俺の腕を掴み、強引に引き寄せる。抵抗する間もなく体勢を崩された俺は、引っ張られるよりもむしろ引き摺られる形でたどたどしい足取りを刻んで廊下に出た。

まだ目の前で起きた現象に思考が追いついていないクラスメイト全員から見送られながら、視界の端に蒼の姿を見出す。蒼は、沈黙がざわめきに変わりつつある空間の中で唯一静観の姿勢を保ち、とつか保っていたのだろう。喰い広げた途中の弁当が何よりの証拠だ。蒼は俺と目が合って箸を置く。助けを求めたつもりはないが、客観的に見ればその時の俺は濡れた野良犬みたいな瞳をしていたかもしれない。

俺と目を合わせた蒼はなにを思ったか親指を上立て、口元を歪めた。

いや、止めろよ幼馴染み。

蒼の見せた謎の微笑みが最後。以後の忌まわしい記憶の一部始終は俺の海馬から一切を残さずネガごと焼き払ったので覚えていない。忘却は人間の持つ素晴らしき自己防衛本能だなあ、とか考えつつここは屋上前の踊り場。俺は埃を被った鉄扉に背中を預けて立っていた。

朱空は何重にも施された嚴重なる鎖の閉鎖を解こうと奮闘していたがやがて、我が校の屋上侵入に対するセキュリティは素人手におえないレベルだと観念。絶対無敵も不遜。ここに勝敗は決し、ナンバーロックと二つの南京錠並びに頑強な鎖の束縛とキーロックの防御精鋭に朱空は苦杯を喫した。

「もうっ！　なによこいつ！　律、なんかこいつムカツクわよ！」

「扉を擬人化するな。つうか、開いてないんだから諦めろよ。いくら生徒会のバックアップがあっても校則違反までは帳消しにできないぞ」

「南京錠が一つだけ外れないのよ……。あんたちよつと用務員室行ってチェーンソー借りてきなさい」

「んなもんは置いてねえ」

冷静に突っ込みつつ、

「ちよつと待て……他は開いたのか!？」

やっぱり感情を押し殺せない。ピッキングの達人が俺の前にいた。「ピッキング？　ううん違う。錆びてたから壊しちゃっただけよ。

楽勝だったわ」

九ノ瀬に言ってもつと頑丈な鍵を用意させよう。

自分の器物破損行為を朱空は誇らしげに語る。現行犯だ。今すぐに手錠を掛けられたとしても文句は言えない。だが困ったことに俺まで連帯責任を負わされる恐れもあるので密告したりはしないが。

「昼休みの密談とくれば場所は立ち入り禁止の屋上だって相場が決

まってるのに……」

「どこの相場だよ」

俺は肩に被った埃を叩きながら訊く。

「話ってなんだ？」

「はあ？　なんで解ってないのよ。さっきも教室で言ったじゃないの」

朱空が教室で言っていたことは、確か『いなかったわ』だったと記憶している。その発言だけで用件を察しろといわれても無理があり過ぎやしないか。俺には読心術のスキルなんてなければ、多くを語らずに心中を察し合う仲になった覚えもない。

薄暗い踊り場に舞う浮埃が吹き飛ばされるほどに大きな溜息を、朱空はこれ見よがしに吐いた。

「信じられないけど、ほんとに解ってないみたいね……。言っただじやないのよ、あんたに全面協力して上げるって」

「そういえば言われた気がする。おまえあれ、本気だったのか？」

答えを聞くまでもない。

朱空の仕出かした無茶が本気の証だ。

積もった埃を踏み締めながら朱空は俺の前の壁に移動した。暗がりでも目立つ端正な白い顔が呆れ半分と癩癩半分のブレンダーされた顔色でもって、黒の瞳に俺を据える。

「昨日調べてみたけど、あんたが捜してたような奴はどここのクラスにもいなかったわよ。勿論絶対とは言えないけどね。でも、信憑性はあると思っていいわ。あたしの眼から見ても、この学校の治安は安泰だから」

啞然として調査報告を受ける俺。

用意した原稿が尽きた様子の朱空は、感想の一つも述べない俺に不満を訴えて眼を細めた。正直ちよつと怖い。

「そ、そうか。悪いな、わざわざ調べてもらって」

「別に。あたしがあたしの意思でしたことよ。あんたの為じゃないし、お礼なんて言わなくていい。それにこんな結果じゃ協力もなに

もないでしょ？ 手がかりがなくなっただけじゃないの」

「いや、そうでもない」

元より俺が捜しているのは有象無象の雲みたいな人物だ。存在しないなら、それはそれでこの件は九ノ瀬の杞憂だったという結論の下に幕を下ろす。一年が投書主と決め付けたのは九ノ瀬だが、あくまで推論の域を出ない。一年に該当者がいないという調査結果は、三学年の内一つの可能性が潰れたことを意味する。

残る二つの可能性に関しても上に同じ。

先日の内に俺と九ノ瀬で二年の可能性は潰したし、三年は元からないものと考えている。僭越ながらも進学校と呼ばれるこの高校において、三年にもなってそんな問題は起こらないだろう。生徒会役員のほとんどが二年であることもあり、三年は調査の対象外と捉えていいはずだ。

これらより導き出される結論は一つ。

つまり、投書はそのものの悪戯だったのだ。

肩の荷が下りた心地でそれを受け入れて、俺は改めて朱空に言う。

「十分だよ、助かった」

「だ、だから、お礼はいらないって言ってるじゃない！」
言ってないけどさ。

「ふん。このくらいのこととも一般生徒の協力なしでできないなんて、生徒会も無能揃いよね！」

生徒会に罵詈雑言を浴びせても俺の心はちっとも痛まない。

「だいたいさ、高校生にもなってイジメってなによ。アホらしい。
どんだけ根暗なのよ」

「おまえがそれを言うかよ。小学生の時なんて苛めてる側だったんじゃないのか」

度々睥睨を挿みながら顔を背けて罵倒を続ける朱空に軽口を利いてみると、いかにも心外だといった面持ちで正面から睨み返される。暗くてはつきりと確認できないが、仄かに頬が赤い気もする。

「失礼ね！ あたしだって苛められれば少しくらい悦ぶわよ！」

「なんか……ごめんな」

否定しつつさりりとんでもないことを言われ、謝ることしか出来ない俺であった。

何はともあれ、朱空の証言を最後にしてこの案件は一旦幕だ。九ノ瀬の話ではここ数日で例の投書が行われることはなくなったらしい。一年の投書であるとの予想が最有力だったこともあり、朱空を信じるならばその可能性も九割方潰えたと見ていいだろう。結局九ノ瀬の危惧は杞憂に終わり、この件は悪戯という形で決着がついた。俺に課せられた役目は投書主の発見だから、厳密にはまだ完遂に至ってはいないが。しかし悪戯なんだとしたら必死になって探すこともない。俺はここで下ろさせて貰うつもりだ。

なぜなら。九ノ瀬より与えられた、俺が果たさなければならぬ案件はもう一つ残されている。

朱空の依頼に次は取り組まなければならない。

それは依頼者本人こそ助勢を拒んでいるが、解決に至らない限り俺の自由が訪れることはないので早目にけりをつけたい。とは思いつつも、俺の中には楽観も存在していた。朱空は、自分には捜している人物を見つけ出す秘策があると言った。どんな手を使うのかは知らないが、搜索に明確な手段があるなら解決は思うより早いかもしれない。

すぐにでも案件を片付けたい俺はその旨を朱空に伝え、活動方針をそっちに向けることを提案した。

だが。

「なんでよ。言ったじゃない。あんたの協力なんて必要ないって」
仏頂面で一蹴に伏される。

「勘違いしてるなら言っとくけど、あたしは『この件に関してあたしがあんたに協力する』って言ったの。協力の相互関係になったわけじゃないんだから、逆は必要ない。あたしのことはあたしが自分で解決するから、あんたは余計なことしないでいいのよ」

頑なに朱空は俺が自分の抱える案件に関わることを拒否する。朱

空の言葉と瞳は、明確に両者の境界線を定めるように静かな拒絶を訴えていた。それを見てどこか高揚らしい感情の昂りが冷め、信頼に似たなんらかの感情が芽生えかけていたようで自分が嫌になった。朱空が俺に協力する気になったのは、気紛れや酔狂などではなく、俺の案件を解決することで生徒会と自分との距離を作ることが目的だったというわけか。そんなことは少し考えればすぐに解る単純な行動理念。自信の為に行動する、実に人間らしい理由だ。

「それじゃあこれでおしまいね。あたしの方は大丈夫だから、あんたは何も心配しなくていいわ」

当たり前のように告げて、当たり前のように去っていく。別れの挨拶もなしに背を向けて階段を降りる後ろ姿をすぐには追いかける気になれなかった。なにをしているんだろうまったく俺は。

かくして、朱空と俺の間にあった繋がりは一層希薄になり幕を閉じる。朱空の『策』に俺は必要ではないだろうし、また普段の平穏が舞い戻った。その平穏が束の間なのか、悠久なのかは今のところ解らない。どちらにしても精々有効に活用させて貰うさ。

実は朱空が俺を必要としなかったことは、後に大きな救いになる。なにせ俺はこの後、新たな厄介事を背負うことになってしまうのだから。

もしも人間の人生に筋書きがあって、その台本を運命などという陳腐な名で呼ぶのならば——俺の運命が決定的に齒車を狂わせたのはこの後の事件で間違いない。

しかしこの時までそのことを知らない俺は、残り少ない昼休みで弁当を食べ切らなければならぬ焦りだけを感じていたのだが。

いやはや。

全く以てつくづく——この世界は笑えない。

4／新しい問題

／
1

その日、朝一番で俺は九ノ瀬の呼び出しを受けた。

携帯電話の普及率が生徒数の過半数に及ぶ現代で、例によって蒼の口頭による呼び出しだった。

生徒会絡みの用件を九ノ瀬が俺に伝える際には基本、奴は蒼を使う。本人曰く、副会長にもなにか仕事を与えてやらなきゃな、とか、メールや電話だと気付かない可能性もある、だそうだがその内意は明らかでない。

蒼は淡々と言われた通りの言葉で俺に九ノ瀬の意思を伝えると、「絶対に昼休みだぞ。忘れるな」と念を押すように時刻の指定を繰り返した。伝言を終えると、それさえも九ノ瀬の指示であることを訊いてもいないのに明かしてくれる。やけに執拗なことを踏まえて考えるに、無視できる雰囲気ではなさそうだ。

案ずるに、またいつものように目安箱に関連した呼び出しだろう。よくもまあ不服の尽きない生徒達だ。目安箱を利用する分には好きにしてくれていいのだが、その俗事の始末が俺に廻ってこないように気を遣ってもらいたい。朱空ではないが、九ノ瀬も生徒会だけで問題を解決できないなら目安箱なんぞを設置しなければいいのに。

それら不平を並べはしても、昼休みなら呼ばれずとも生徒会室に馳せ参じるのが俺の習慣である。呼び出しに応じるようで癪に障るが、無視して教室に停留するのも意固地っぽくて気に入らない。普段通りに努めよう。

昼休み。俺の決定は揺るがなかった。

自前の弁当を引っ提げて生徒会室にやってきた俺は憚りなしにド

アを開ける。九ノ瀬はいつもと同じ席に座っていて、俺は生徒会長様と正対する形になった。

「わざわざ呼び出さなくても、昼は毎日顔出してるだろ」

手前の椅子を引き、九ノ瀬の正面にならないよう腰を下ろす。

「そうとも限らないだろ。今日に限って来ないかもしれないと思っ
てな」

「今日じゃないといけない理由でもあるってのか。で、用件は何だ」
本題を急ぎ立てる。九ノ瀬は苦笑して、そしていつかのようにブレザーの懷に手を差し入れて――やはりいつかのように藁半紙を指に挟んで取り出した。既視感を覚えて、なんとなく先が読めた俺は九ノ瀬から藁半紙を受け取らずに内容を予測した。

「まさか、今更になってまたあの投書じゃないだろうな。悪いがもうごめんだぞ」

「心配するなよ。その件は悪戯ってことで片付けたじゃねえか。あれ以来かっきり音沙汰なしだ」

だったら何だ。また別の案件か。

「いいから見てみる。俺の口から説明するよりそっちのが早い」
藁半紙を突き出される。

俺は紙の表面を中身が透視できそうなくらいに吟味した。無論内容を讀み取ることとは叶わない。不承不承、九ノ瀬の指から藁半紙を摘み上げる。あの世への片道切符を受け取った気分だ。

四つ折りの紙切れと九ノ瀬とを交互に見てから、決心して内容の披見に移る。紙面に並んだ文字が姿を現し、横書きの短文に目を通した俺は嫌な予感が嫌な現実に変わるのを感じた。直後に垣間見た九ノ瀬は苦笑して肩を竦めている。投書された藁半紙には、俺の読解能力を尽くして解析した結果、次のような文章が書かれていた。

「『朱空末那に近づくな』」

ホラーの次は脅迫か。この学園の行く先が何なのか本気で解らなくなつた。

音読してみると余計にその意味が飲み込める。疑いようがない。

意味は単純。横書き一文だけなので縦読みすると本旨が伺えるといったトリックも仕掛けられていなさそうだ。故に疑うのは文面や投書した人間の意図ではない。これが九ノ瀬の悪戯である可能性は排除できるだろうから、俺が浮かべるべき疑問は、

「生徒会の目安箱はいつから郵便受けになったんだ？」

こいつは投書でも何でもなし。こんなのは目安箱本来の使用法を一切無視した所業だ。

さらに問題はそれだけではなく、目安箱がお手紙ボックスに変身してしまったことよりもっと大きな問題がある。この投書（便宜上そう呼ぶとすれば）の内容は文面以前にその存在が常軌を逸していた。

そも目安箱とは一般生徒が生徒会に要望を提出する為に設けられた民主主義の産物である。学内の不満や学校生活の不安を相談することによりよい学園生活を送れるようにとそんな目的を有した、いわば生徒自治の受け付け係。

ならばおかしいだろう。差出人の名義と同様、宛先など書かれてはいないがこの文章はどう考えても俺宛である。そして俺は生徒会役員ではない。こいつを投書した何者かが俺個人にメッセージを宛てたとしたら、目安箱を利用するのは明らかな間違いだ。

もし仮にこれが生徒会、ないし九ノ瀬や蒼の他の正式な生徒会の人間に宛てられたものだとしても不明な点が残る。こんな投書はありえない。なぜなら、朱空が生徒会に依頼を持ってきたことを知るのには、朱空本人と俺と九ノ瀬の三人だけ。朱空と俺とが何らかの関係を持っていることは、いつかの昼休みが原因で一部の生徒には知られていても不思議ではないが、だとしても俺と朱空とを繋ぐのが生徒会だとは関係者以外知り得ないはずだ。よって投書を行ったのはその三人の誰かに限定される。

少な過ぎる容疑者は誰をしても疑いの余地がなく、俺ではないのは確かだ九ノ瀬には動機がない。朱空の自作自演という考えも強引に持ち出せるが、それはあまりに信じ難い。朱空ならこんな回りに

どい手は使わず言葉と態度で拒絶を表明するはずだ。現実には俺はそうされた。

「どういうことだと思うよ、律」

「知るか。意味が解らん」

突き詰めれば必ず矛盾にぶつかる議題をいつまでも討議しては埒が明かない。

俺は考えることをやめた。

「おまえ、マナちゃんに何かしたんじゃないの。仲良くし過ぎて彼氏の怒りを買ったとかさ」

「何もしてねえよ。てか、いるのか彼氏？」

いたとして、なら何故おまえが知っているのかも疑問だ。

「例えばの話だよ。それだったら辻褄が合わなくてもいいだろ。マナちゃんが生徒会に関わってることを知ってるのは、俺とおまえとあの娘だけなんだしさ。あれを投書したのは俺じゃないしおまえでもない。文面からマナちゃんも有り得ないなら、誰かが誰かに喋ったとしか思えないだろ」

「それにしたって同じことじゃないのか」

容疑者の梓は三人のまま変化しない。

「ちなみに俺じゃあないぞ。一応訊いとくけど、おまえは誰かに喋ったか？」

不意に思考が止まる。

「俺も喋っちゃいない。内密にって言ったのはおまえじゃないか」

「だから一応って言っただろ。疑ったわけじゃないよ。でもだったら何なんだよこれ。こんなもんを目安箱に入れるなっつての」

もっともな文句だとこのときばかりは九ノ瀬に同意する。こんなものを目安箱に投書する意味がない。俺の下駄箱かロッカーにでも差し込んでおけばいいのだ。だがこの何者かは目安箱を利用した。わざと生徒会を経由して俺にメッセージが届くようにと。顔を隠して匿名で。

どうにも解らないことがある。

九ノ瀬の腹の内だ。

「ところで九ノ瀬、おまえ、これを俺に見せてどうするつもりだ。また投書主を探せとか言うのか？」

「まさか。こんな投書にかまかけてるほど、律も暇じゃないだろう？ おまえが捜したいってんなら止めはしないけどな」

冗談じゃない。仮に俺がそんな妄言を吐くようならば、そのときは殴ってでも止めてくれ。

「俺がおまえを殴ったことなんてないだろ……。あ、いや、そういうえば中学のときに一度あったような気もするな。覚えてるか、律？」

「さあな。覚えてないよそんなどうでもいいこと」

「どうでもよくないだろ。忘れられない大切な青春の一ページだ」

「覚えてないんだろ、おまえも」

どちらも曖昧な思い出しにしか持たない青春の一ページだった。適当なことを適当に口走る奴だ。加えろと俺にしてみれば九ノ瀬のその適当さ加減が逆に訝しまれる。この男は何でもない言葉の中に時限式の爆弾を仕掛けていることが多い。今度だってこれを伏線にして俺に面倒を押し付ける魂胆があるかもしれない。そう怪しむ俺に九ノ瀬は慌てて付け加えた。

「安心しろって、あくまでこれは俺の親切でしかないんだよ。こんな妙な投書があった以上、おまえに報告してやらないわけにはいかんだろ」

「そうかい。ならそういうことにしといてやるよ」

親切とか言われても、俺にしてみれば無駄な懸念材料が一つ追加されただけに過ぎないが。これに関しては本当に裏がなさそうなので、九ノ瀬の言葉を信じることにしよう。

「これからどうするんだ律」

声色を改めて真剣そうな空気を醸す九ノ瀬に問われる。いや、本人は間違いない真剣だ。必要以上に場を重くしないようにと配慮して軽さを残したのだろう。

「どうするとは？」

「……おまえなあ。こんな投書があったんだ。確かにわけは解らんが意味ははっきりしてる。マナちゃんの件はまだ片付いていないんだろ。だったら今後は行動が制限されるんじゃないか？」

俺が九ノ瀬の言っていることを理解するのに普通よりも多くの時間と言葉を要したのは、現在朱空との協力関係が奇妙な形になっていたからだ。朱空の人捜しに俺がまったく関与していないことは九ノ瀬に話していない。

「問題ないよ。ていうか、朱空の依頼に関して俺には一切の役回りが無い。どうもあいつは生徒会の権力が欲しかっただけらしい。俺の協力はいらないそうさ。なんで、こっちの件が片付いてからは会っていない」

「そうなのか？」

ぼかんとして九ノ瀬が口を開く。まあ正しい反応だろう。目安箱に投書した人間が自ら生徒会の助力を拒否するなどこれまでになかったことだからな。九ノ瀬が驚くのものにも頷ける。

「なんだ、それならおまえが今抱えてる案件はないわけだ。てことは、他の仕事を頼んでも大丈夫だな」

「また投書があったのか？ 短期間でこれだけの量は多くないか」

「いや、頼みたいのは書類系の雑務だよ」

「お断りだ」

目安箱の依頼執行にしたって生徒会でない俺が請けるのはお門違いだというのに今度は雑務とくるか。金でも貰わないとやってられない。

「いいじゃないかよ。頼むって律。これも人助けだと思ってさ。親友が困ってるんだから、見捨てるなんてしねえよな」

「おまえが困っているように苦しんでいるように俺には関係ないな」

「全部ってわけじゃないんだよ。俺も残って手伝うからさ！」

手伝うのは俺の方ではないかと突っ込むべきか迷って自粛した。

「頼む！ 放課後にちよっただけ残ってくれればいいから！ そんなに時間は取らせないから！」

遂に頭を下げる学園生徒のトップ。時間を取らせないとは言うが、同じ台詞を前にも聞かされて渋々了解してやったときは結局下校時間ぎりぎりまで付き合わされた。こいつのことだから、ここで頷いて放課後來てみれば、性懲りもなくまた滞納しまくった大量の書類がテーブルの上に積み上げられていることだろう。

非情になって再度懇願を切り捨てる。

「悪いが今日はおまえに付き合ってもらえないんだよ。悪いな九ノ瀬」

「これだけ頼んでもかよ……。なんだ、さては女か？」

「まあ、そんなところだな」

やさぐれた口調で訊いてくる九ノ瀬に、俺は肯定の返事をして退室すべく席を立った。

このタイミングで部屋を出ようとしたのは、続く言葉の反応を俺自身が見たくなかったからかもしれない。ドアをスライドさせながら、肩越しの視線を九ノ瀬に送り言った。

「紗季とデートの予定だよ」

4／二つの季節

／2

蒼が俺に伝言を伝えるよりも先。本日の俺は別件でもう一つの呼び出しを受けていた。

ことの始まりは自宅の扉の隙間に挟まった一通の封書で、なんだろう最近紙切れに俺の生活は支配されているのではないか、と思いつつ二つ折りの用紙を広げる。そこには放課後校門にて俺を待つといった旨のメッセージが書かれていて、一見したところ内容自体は何の変鉄もない。問題は文末を括った差出人の名前だ。

三回見直したが三回とも同じ内容と名義であり、封書を差し込んだ人物は――双色紗季を名乗っていた。目安箱に投書するよりはまともな手法といえるだろう。しかしいくら俺の住む安アパートといえども部屋の前に郵便受けくらいは設けられている。ドアの隙間に挟むなんてことをしたのは、俺が新聞を取っていないため週に一度ほどこか中身の確認を行わないのである意味正しい方法なのかもしれないが。

放課後までこのことは誰にも話しちゃいない。九ノ瀬には言ってみたが、どうせ本気にはしていないだろう。俺だって信じられないくらいだ。

担任がホームルーム終了を告げるや、俺は蒼がやってきて談笑を始めようとしたりする前に教室を飛び出した。手紙には時間指定ま でなかったもので、だらだらしていると頃合を逃してしまうかもしれない。待たせるよりも待つ方がいいはずだ。

そして五分も経たない内に俺は唯一指定のあった校門に思惑通り先回りすることに成功した。

以上が本日、今に至るまでの顛末である。

待たせるより待つ方がいいとは言ったが、それも待ち時間が十分やそこらの場合だけだ。俺は振り返って校舎の時計を見る。時刻から察するに全てのクラスが既にホームルームを終えている頃だった。放課後というなら今こそ完全な放課後だ。

帰宅する生徒の波がピークを過ぎて静けさを取り戻した校門前。聞こえてくるのは遠くから響く運動部の掛け声や吹奏楽部のオーケストラ。

こちらに向かう生徒の姿は今のところない。そのことを確認した俺は嘆息することもしないうちに待ち惚けを放棄して家路につくことを決めた。

「あー、律！」

背後からの声に脚を止めて振り返ると、俺がそれまで背もたれにしていた壁からひよこりと顔だけを出した少女の姿が見当たった。その少女は驚愕の表情をして俺を見、飛び跳ねるような勢いで駆け寄ってくる。

手紙の意を、俺は間違って汲み取っていたらしい。校門とだけ指定された場所は、門の内側を指していたということか。通りで待っている来ないはずだ。お互いが既に到着している相手を持っているのだから。

「ごめんごめん！ 外で待っててくれたんだっ。気付かなかったよ。あはは、何かおかしいね。あれ、どうしたの？ ……なーんか浮かない顔してるね。大丈夫？」

訝しむ声と表情が、くすりと零れた笑顔に霧散する。

「ほら、テストっ」

ささ、と背中をとられる。その意図を読み取る前に俺の視界が覆われた。何の真似だこれは。

「さて、わたしは誰でしょうか？」

「……」

そんなこと、考えるまでもない。

さっきまで見ていたのだから、間違えるはずがない。

俺は言った。

「……………紗季」

その名前を提出した。

「正解っ」

開放される視界。夕陽が目には痛い。

細めた視界に笑顔の紗季が戻ってくる。

「よかった。律のこと怒らせちゃったかと思ったよ。でも待たせちゃったのは変わりないから……………ごめんね？」

悪びれる様子の欠片もなく手を合わせる。

「ねえ、なにか言ったら？ さっきからずっと黙ってるけど。……………やっぱり怒ってるの？」

「怒ってない」

「嘘だ。怒ってるでしょ」

「怒ってねえって」

「本当に？」

「本当に」

「じゃあキスして」

「なんでそうなるんだよ！」

どこのバカップルだ。ちなみに忘れてはいけないことにここは学校唯一の出入り口である。外客や中から出て行く生徒達も皆無ではない。擦れ違うたびに浴びせられる視線が質量を持って突き刺さる感覚を俺は絶賛体感中だった。何の罰ゲームだよ。

「なんだ。してくれないのか。……………律の甲斐性なし」

古臭い。

毎日通う高校の真ん前は、甲斐性も根性もない。というより常識や理性があると評価されるのが正当のはずだ。

「いいけどね、律はそんなだってことくらい昔から解ってたことだもん」

拗ねた風に口を尖らせる紗季。

「仕方ないなあ……律が気にするなら場所を変えよっか。人気のないところならいいよね？」

「どこにしたってよくない」

「冗談冗談っ。顔赤くなってるよ？ あは、やーらしい」

心底楽しそうに笑う紗季と、対照的に沈んでいく俺。

釈明に聞こえるかもしれないが顔が赤いというのは真正面から夕陽が差しているからだ。

双色紗季。俺の幼馴染にして――初恋の相手でもある。というよりも恩人に近いかもしれない。誰かを好きになったことがなりから、それがそういうことなのかも解らないので便宜上そんな風にずっと思っていた。何にしても普通より好感を持っていたことには違いがない。

「じゃあ、行こっか」

油断している隙に手首を掴まれる。走り出した紗季に合わせて歩幅を広げてついていかなければならない。なので必然、俺も走ることを強制されていることになる。いまいち状況が飲み込めなかったが、振り払おうとしても紗季の手が俺の手首を離す気配はないのでとりあえず走った。

「待てよ、どこいくつもりだ！」

決してジョギングに収まらない速度で走っているため呼吸の乱れに伴い語調が強くなる。

舌を噛みそうで不安だった。

紗季はスピードを落とさず笑顔で振り返る。それがあまりにも双色紗季が持つ表情と同じだったから、目の前のそれを見るのが少し戸惑われた。

「いいから、ついてきて！ 大丈夫だよ――律もよく知ってる場所だから！」

手首を握る力が強くなった気がする。

明かされぬ目的に疾行する速度がまた上がる。

一つだけ不安があるとすれば、行き着く先よりも転んでしまいそ

うで危ういこの状況だった。

＊

高校生にもなって道端ですっ転ぶというお笑いはどうにか回避できたことにひとまず安心した。といっても最初から最後まで走りっぱなしではなく、百メートルも走れば息の上がった紗季が俺の手を解放した時点から歩き始めたのだが。体力よりも大通りを疾駆する謎の高校生として珍妙なものを見る目を向けられるのに精神力がもたなさそうだったので助かった。そのような羞恥に耐えきるだけの自信はあいにく持ち合わせていない。

紗季の歩みが止まったのはいつもの河原だった。

見渡しのいい周囲を確認する。遠く視界の果てまで見通して、そのどこにも朱空の姿は見当たらない。ここにくればお約束みたいに現れる奴だから鉢合わせになるかと危惧していたがどうやらその心配はなかった。

「はい、ここでした」

案内を終えた紗季がバスガイドみたいに到着を告げる。

途中から何となくそうじゃないかとは予想がついていたから、特に驚きもない。ここにくる理由も思い当たる節があるので、残る疑問は今更こんなところで何をしようというつもりなのかとそれだけだった。

「懐かしいね」

「俺は毎日通ってるからそうでもないな」

それだけでなく、最近は一悶着起こした挙げ句土手を転がったり裸眼で天体観測したりキャッチボールしたりと、懐かしむには既に

色々あり過ぎた。

「違うよ。そういう意味じゃなくってさ。昔はよくみんなで遊んだでしょ、この河原で。横を通ることはあっても、こんな風に下まで降りてくるのは久し振りだよ。それに律と二人だけでくるのははじめてだしね」

小学生の頃。

五人の遊び場になっていたこの河原。

昔から近くに公園も空き地もなかった俺達にとっては遊ぶ場所といえどここだけだった。

「覚えてるよね、律」

「臍気には」

「怪しいなあ。もしかして忘れてたとか？ 酷いなーみんなの思い出の場所なのに」

そんなことを言っただけで、紗季は河辺に走って行く。ゆっくりと流れる水は今夕焼け色に光っていた。

子供の頃の想い出。

とりわけ他の小学生と違った日々を送っていたわけでは決してない。俺の記憶にあるのは、そのままどこにでも転がっていておかしくはないほどに極普通の毎日。仲のいい五人と陽が暮れるまで駆け回った記憶。

大きな事件が起きたこともない。代わり映えのしない毎日の繰り返し。けれどそれは二度とない一瞬で、今更なにをしても手の届かない彼方の景色。だから今になってやっと、楽しかったと思えたのだろう。

その日々を愛しいと。

叶うことならもう一度と。

——そんなことを考えないように、ずっと忘れようとしていたのに。

「ねえ律」

河を背にして立つ紗季の姿。手を後ろに組んだ姿勢で改まった口

調に名前を呼ばれる。

「昔のこと、本当に忘れちゃった？」

蠱惑的な潤みを含んで、琥珀色の瞳が真摯に問いかける。

「いいや。忘れてることもあるだろうけど、なにも全部忘れちゃったわけじゃない」

「それって答えになってないよ」

薄く微笑んで肩を震わせる。

俺は呼吸を落ち着けて目の前の少女を見直した。想い出に変わらない笑顔がそこにあり、琥珀色の瞳はやはり寸分変わらず双色紗季の色を帯びている。けれどだからこそ俺はやっと確信できた。

今が夢でないことと、やはり願いは願いのまま叶わぬこと。

二度とはそこに存在しない遠い日の想いを繋いで、今ここにある現実に向ける。

「覚えてるよ、ある程度は。全部忘れたわけじゃない」

へえ、と含み笑いだした紗季が小さく声に出す。

「渚が他の小学校の上級生と喧嘩して、結局爽架が一人で男の子五人くらいやつつけちゃったこととか」

「そんなこともあった気がする」

「爽架がみんなでした肝試しで大泣きしたこととか」

「剣道の全国大会に出た記念だったか？ いや、優勝の祝賀だった気もする」

「律が遊季に告白した一つ上の男の子と本気で喧嘩したこととか」

「あった気もするな」

「律の将来の夢がメイドさんだったこととか」

「それは絶対じゃない」

紗季はそこで一区切り呼吸を置いて口を閉じる。流れるような問答が途切れる合間に紗季が自分から作った距離を詰めながら歩いてくる。俺もそれを止めようとは思わないので、気の済むようにさせてやった結果、紗季が立ち止まったのは互いの爪先の間に足の幅一つほどの距離を隔てた位置だった。

「じゃあねえ——」

頭一つ低い高さにある紗季の顔。

手を腰の後ろで組み、元からある身長差をさらに広げるようにして若干の前屈み。一步退いた右足の踵を上げて小さく背伸びして、上目遣いが笑顔を作る。その微笑みが、その瞳が、

「わたしが——双色紗季が律を好きだったこととか。覚えてるよね？」

最後の問いを発した。

双色紗季の言葉。

俺は思い出す。思い出したくないが、それでもどうしてもどうしようもなく、抗えない記憶の奔流に流れていくいつかのあの声が、笑顔が、悲しみが、涙が、ノイズに紛れて回想にならない想起が駆け巡るように点滅する。

俺は。

俺の、返事は。

「覚えてるよ。それだけははっきりと」

——忘れないで。と、彼女は言った。

それだけは間違いなく彼女の言葉だったから。

俺は、その過去を忘れずに背負ってきたつもりだ。

紗季は、紗季の姿をした目の前の少女は満足そうに唇を歓喜に歪める。そして背筋を伸ばしたそいつは踊るような足取りでまた俺から離れていき、くるりくるりと二回転。紗季の髪にはまだ足りない中途半端な長髪が流れるその向こうに見えたのは、濁りのない澄んだ瞳。

いつか永遠に失った輝きが、亡くしてしまったその姿が夕陽の前に陽炎のごとく滲む。

「嘘だっ。本当はずーっと忘れてた癖に。律の嘘つき」

変わらず浮かべた微笑みの奥に、優しさで覆った瞳のその奥に、明確で深い、混沌と渦巻く憎悪を覗かせその少女は笑う。好意の中に敵意と嘆きを含み、優しさの中に殺意と糾弾を籠めて。開かれた

瞳の放つ眼光が、抑え切れない悲嘆と怨嗟を湛えていた。

「ねえ、律。本当に覚えてたの？ わたしが律を好きでいたこと。ずっとずっと大切に思ってたこと」

単調な声で。

「誰よりも見てたこと。なによりも欲しかったこと」
神に訴える悲鳴のように。

「誰よりもいっしょにいたかったこと。どんなことよりも優先して
いたこと」

傷口に刻まれた嘆きの再生のように。

「誰よりも想っていたこと。いつでも一番に考えてたこと」
身を切る痛みに耐えるように。

「誰よりも見てたこと。どこにいても呼んでたこと」
切実に罪状を読み上げるように。

「誰よりも話していたこと。ずっと、なによりも、どんなことより、
いつだって、どこにいても必ず——律が大好きだったことも。律は、
覚えてるって言うの？」

俺は。

俺には。

黙示録を詠う紗季の目に、虚勢でも頷くことができなかった。
二つの琥珀色が、既に輝きの褪せた暗い絶望の眼差しが語る。お
まえは何一つ覚えてなんかいない。ずっと忘れたままで置き去りに
してきたのだと。

「ねえ、律はさあ……わたしのこと好き？」

「……俺、は」

双色紗季が好きだった。

迷いながら、言葉にはできずその意思を視線に籠めて返す。

「ふうん。……じゃあさ、今でも、わたしのことが好き？ その気
持ちはまだ律の中に残ってる？」

俺は答えない。

無感動な白い顔を黙視することしかできない。

「やっぱり、忘れちゃったんだ。律の中のわたしはもうどこにもいないんだね」

それは演技だったのか、本心だったのか。

冷たい無表情が一刹那の間に見せた悲しさの陰。

それは本当に一瞬で。

次の瞬間に残ったのは激情を殺して静かに震撼する、偽りのない瞳の糾弾だった。

「……約束、したよね？」

音の震えを隠すような低い声。顔を俯かせて表情を隠蔽し、振り絞って紡いだ僅かな声は、吹いてもいない風に流されて消えた。

「……もういいだろ」

言ったのは俺だった。夕風の終わりを告げる夜風が世界を揺らす。ざわめく水面に落とした影は、いつかの思い出にしか存在しない少女の形をしていた。

俺は言う。言葉を選んだりするだけの余裕などはない。

「もうやめてくれ……これ以上はもうやめろ」

耳を塞ぎたかったのは俺だけではなく、きっと彼女も同じだと思うから。その先を聞きたくなかったし、言わせなくなかった。

少しの静寂。音の全てが絶えたように静謐が世界を包み込む。オーケストラが終わった後にある沈黙に似た静けさが満ちた河原は、けれどこの後には感動も賞賛もない。あるのはただ垣根なしの後悔や泥のような息苦しさ。

その中で。

「約束したのに。忘れないでって、言ったのに」

果たしてそれは、どちらの言葉なのか。今の俺にはそのことさえも判断できない。

頭にあるのは拒絶だけ。これ以上聞いていれば絃井律という人間が保てないと心が警告する。逃げ出さなければ壊れてしまうと軋む。

「……やめてくれ」

「わたしが望んだのはそれだけだったのに――」

「もうやめろ……!」

自分でも驚くくらいの音声が怒声になって飛び出す。呼吸はマラソンの後みたいに荒れていて、背中は汗をかいたように冷たい。風が触れる度に骨が凍る寒気が走った。

「頼むからもうやめてくれ——」

夕陽と夜の闇が入り交じる空を背景に従え、罪人を裁く審判の代行者のように悠然と立ち、

「——……遊季」

双色遊季はただ感情の色の失せた瞳に俺を見据えていた。

双色紗季と双色遊季。

瓜二つの双子の姉弟。

その気になれば見た目だけではなしに互いが互いに扮することも可能だろう。事実遊季はそれを証明して見せた。俺の前には間違いなく紗季だったし、その実遊季でもあった。だから一見しただけでは俺に二人を見分けることなど本来ならできない。

それでも俺ははじめから、目の前の人物が遊季だと気付いていた。今朝の手紙を見たときから既に。放課後会うことになる相手が遊季だと。

解らないはずがない。

紗季からの呼び出しなんてあるはずがないのだ。

俺は知っている。忘れられないのはただその事実。消えてくれないう記憶があつて、否定できない現実がある。双色遊季の姉、双色紗季は——もう二年も前に死んでいるのだから、今日この場に現れるわけなどなかった。

「約束したんだよね、律。お姉ちゃんと約束したよね」

憎悪の欠片が声から滲む。

制止をかけることさえできなければ、俺はそれに頷くこともできない。

俺にできることはただ断罪の瞬間を待つて遊季の言葉を受け止めることだけだった。

4／箱の中の偽善

／3

「ねえ、大丈夫あんだ？」

どれくらいの間そうしていたのか、人の声を聞いたのがずいぶん久しぶりに感じた。

辺りはもう陽が落ちた後らしく頭の上からは街灯の明かりが注いでいる。どうやらそれなりに長いこと自失状態に陥っていたらしい。今何時だ。星や月、道を行き交う人気のなさから推測してあまり早い時間とは考えられないが。

「ちょっと聞いてんの？ 人が心配して上げてるのに無視とはいい度胸ね」

顔をほぼ真上に向ける。膨れ面の朱空がいた。

「いたのか朱空」

「……名前」

頬がさらに膨らむ。朱空は主語も述語もない、単語のみの発言をして、

「なーまーえ！」

理不尽に怒髪した。

「あたしを名字で呼ぶなって言ってんでしょ！ 嫌いなものよ。いい？ 今度からちゃんとルールは守ること！」

「断る。俺にも俺の主義があるんだよ、朱空。いつからいたんだ？」

「……さっきからよ。なに、悪い？」

「誰も悪いなんて言ってないだろ」

「夜の散歩してたら道の端っこに回収され忘れられた粗大ごみを見かけたから近付いてみたら、あんだが座り込んでたってわけ」

「そうか」

納得しかけて、

「……誰が粗大ごみだよ」

「一応つつこむのね」

どっちがボケたのかよく解らないやり取りが展開された。

夜の散歩。朱空はそう言った。なら夕方のあれこれは目撃されていないだろう。あれはあまり人に見られていて気持ちのいいものじゃない。俺自身の記憶からも削ぎ落したいと思うくらいだ。柄にもなく凹んでやがる自分が気に入らない。

「なんかあったの？」

「なにも。あー、今日最終回のドラマ見逃した」

「こんな時期に最終回ってなによ」

「だったら第一話」

「その時点で嘘だってバレバレよ。なんかあったんでしょ。バカでも凹むようなこと。隠してもダメなんだから」

どうしてこう、この小娘は人の傷口に塩を塗り込むばかりか、麻酔なしで心臓を切り開いた上でするか心の中をスパイクで踏み荒らすのか。ちなみに心臓を開けば心が見えるのかは俺にも解らない。どちらかといえば頭の方が適切なのだろうか。

などと適当なことを言いながら適当なことを考えて、外では朱空を、内では自分を誤魔化そうとしてみる。今はなんでもいいから気を紛らせたかった。

とすん、と軽い音がして隣を見る。そうするのがまるで当たり前みたいな顔をして、朱空が脚を伸ばして斜面に腰を下ろしていた。

「どうでもいいけど、隣であんたが辛気臭い顔してるとあたしまで気が滅入ってくるのよ。なにかあったなら聞いて上げるから話さない。それが嫌ならそんな顔しない。ほら、どっちがいいの？」

俺には何故自分が朱空の怒りを買っているのかさっぱり解らない。それに俺が取る行動の選択肢に帰宅が含まれていないのはどういうことだ。俺が退散すれば解決するじゃねえか。それかおまえがどっ

か行けばいい。

「ダメよ。だってここはあたしの特等席って決まってるんだもん」

「誰がいつそんなことを決めたんだ」

「あたしが今この瞬間決定したのよ」

ようするに移動する気はないわけだな、おまえは。

街灯が照らす範囲はそれほど広くない。光の中に人間二人が体を納めようものなら肩が触れ合うくらいには身を寄せ合わなくてはならなくて、それにも朱空は躊躇いなく寄り添ってくる。なにがしたいのだこいつは。人肌が恋しくなる病気にでも罹ったのか？

俺は空を見ていた。朱空もおそらくそうしていただろう。

平坦な調子の声が隣から聞こえた。

「夕方のこと気にしてるの？」

遠慮など露ほども見せやしない。憚りない口調で朱空が訊いてくる。

「ずっといたんじゃねえか。何が夜の散歩だ」

「気を遣って見付からないように隠れてたのよ。お取り込み中みただったから盗聴だけして、様子見してたのよ。相手の女が帰ったのに、あんたってばそのままぼーっとして、最後には座り込んで、時間経ってから来てみたら、あんたがまだバカみたいに座ってたってわけ」

俺は、色々とぶつけてやりたい文句の弾幕を振り払って嘆息した。がつつりこつちの事情を解っていながら再三俺の口からそれを言わせようとしていたのなら、こいつは悪魔そのものだ。

「別れ話って雰囲気じゃなかったわよね？」

「そんなんじゃねえよ。それにおまえには関係ない。つうか聞いてたんじゃないのか」

「遠くからだもん。はっきりとは聞き取れないわよ。雰囲気尋常じゃないことと、あんたが叫んでたのくらいは解ったけどね」

あのときの俺はそれほど大きな声を出していたのか。朱空の他

にギャラリーがいなかったことを切に願う。

「それにあたしがあんだ達を見付けたときにはかなり話が進んじやった後みたいだったし。二人とも周りのことなんて頭に入っていない感じで、そこだけ別の空間みたいで近寄り難かったのよ」

大っぴらに開放した屋外で知らぬ間に境界線を引いていたなら、それはもう相当だったのだろう。当事者の俺が他人事のように推量で語るのもおかしい話だが、逆にこの中心にいたからこそ客観的な事実の予測が難しい。台風の目はいつも晴れているから、周囲の被害規模は解らないのだ。もっとも今度の場合、その中心に手榴弾が投げ込まれたような結果になっているのだが。

「約束とか言ってたでしょ。あんだが何かの約束破って喧嘩にでもなったの？」

「そんな簡単なことならよかったんだけどな」

約束を破ったのかどうかすら、俺には解らないのだから。

俺が紗季と交わした約束。

紗季が最後に言った言葉。

それはただ一つの望みを、忘れないで、と彼女は哭いた。

「朱空、おまえ夢ってあるか？」

唐突に俺はそう切り出した。

「なにそれ、どこの熱血教師になったつもりよ。……そういうのはないかな。それがなに？」

「俺はさ、昔、正義の味方になりたかったんだよ」

「バカなの？」

「そうかもしれない」

ホンモノの痛い奴を見るで朱空。俺は自嘲して返した。

ある少年の物語。

よくある話かもしれないが、少年の家庭は両親の仲があまりよくなかった。毎日口喧嘩が絶えないだとか父親が暴力を振るうだとか、そんな解り易い不仲ではない。その家族にはそれさえなく、彼らはただただ互いに無関心だけ。

彼が知っているのはいつも無表情の父と母。家の中には会話がなく、テレビでも点いていない限り静まり返っているのが常。子供だった少年まで、真似をして息を潜める始末。呼吸をすることさえ苦しくて、家の中は監獄か何かみたいだった。

普通の家族を知っている人間が見ればそれは間違いなく異常だっただろう。その家の住人は生きているのではなくただ漠然とそこに存在しているだけで、生活してるというよりも毎日規則的な活動を繰り返しているだけだったのだから。

まるで箱庭。

意思のない人形が、囲われた世界の中を動き回っているだけの作り物。

少年が五歳になる頃には、その家族は極自然に崩壊していた。崩壊といってもそれまでであった何かが壊れたりしたのではなくて、もともと、何もなかったのだから崩壊というのも間違っているかもしれない。それでも彼らが家族としてあった理由となる柱みたいなものが、ある日突然折れてしまったのだ。

それは本当に自然に、子供の彼にも解るくらいにそれは当たり前で――少年は悲しいと感じることさえ許されなかった。失うことを、当然のように受け入れることしかできなかった。

一つだった家族が二つに割れて、少年は母親に連れられてそれまで自分のいた箱庭を出た。切欠というならそれがそうなのだろう。新しく住む家――安物のボロアパートだ――が見付かったその日の夜。母親は少年に言った。

――ごめんね。

少年にはなぜ母親が謝っているのかも解らなければ、どうして泣いているのかも解らない。そのとき彼にあったのは自分が母親に話しかけられたのだという驚きだけで、それ以上のことは考えてはいけない気がした。

母親は声を殺して泣いている。

感情さえ忘れかけていた少年にも、涙の意味は理解できたから。

それが哀しいことだとは解ってしまった。

——どうして泣いてるの？

少年が尋ね、母親は答えずに彼の背中に手を回す。いつかもっと小さかった頃に感じた温もりが直ぐ傍にあって、それは小さく震えていた。母親に抱き締められてようやく気付く。今、母を泣かせているのは自分なのだと。幼い心は震える体に触れて理解した。

どうして。

どうして、泣いてるの？ お母さん。

先に泣いていたのは。

自分だというのに。

その理由が解らなくて涙が止まらない。

自分を抱き締める人の嗚咽がこんなに苦しいなんて、知らなかったから。

人の想いがこんなにも温かいなんて、忘れていたから。

それが自分の忘れていた大切なものだったから、思い出せたことが嬉しくて泣いていたのか。その大切なものを既に半分失ってしまったことが悲しかったのか。彼には解らなかったけれど、この思いだけはずっと忘れないようにと心に決めた。

いつかこの日が傷痕になったとしても。

——今は痛みさえ愛しいと思えたから。

それがはじまり。

次の日から母親は毎日少年に話しかけたし、少年も毎日笑って返事をした。まるで親子みたいだと、少しでも幸せを感じながら。二人は本当の親子だというのに。

あの日母が泣いたのは、自分の家族を失ったからだと言った少年は思った。同時に、彼からも同じものを奪ってしまったから。どれだけ空虚な世界でもそこは虚構ではなかったのだから、失って悲しくないわけなどなかったのだ。

だから少年は小さな誓いを立てた。

母を泣かせてしまった自分に十字架を背負わせるように、小さな

胸に不相応な大きさの願いを懷いた。

——この家族は、自分が守るから。^{セカイ}

母と自分の新しい世界を、二人だけになってしまった家族を守ると決めたこと。それが少年の原初の夢。ちっぽけで理想まみれの幼稚な夢が少年にとっての全てになった。

「——正義の味方なんて大それたものじゃなかったんだ。母親一人だけのつもりが、気付けば俺は俺の周りで誰かが悲しむのが嫌になってた。それも誰かの為なんかじゃなくて、誰かに悲しまれるのが嫌だから、俺は俺自身の為にそれを願った」

特に自分の近くにいた人間には。

「……あんたが生徒会の手伝いしてるのってそれが理由なの？」

「さあな。忘れたよそんなこと。俺も九ノ瀬も気付けば今みたいな関係になってただけだ。恩返してんなら、それは一生できなくなっちゃったからな」

恩があったというならそれは紗季にだからな。

なんにしてもあの四人は俺にとって大切な存在だし、感謝もしてる。あの頃連中がいなければ俺はきつと潰れていたと思う。なんにしても家族が半壊しあまつさえ失った直後にその重さを知った子供だったのだから、抛り所がなければもたなかっただろう。

初めに気付いて話を聞いてくれたのが紗季で、それだけのことがあの頃、俺にとって最大の救いだった。もしかしたら俺の押し付けみみたいな正義感が家族の枠だけに留まらなかったのは紗季に憧れたからかもしれない。

朱空は齒痒い表情をしていた。どこにぶつけていいやら解らない葛藤を抱えていて、それがどんな感情に当たるのか解らず表現できないといった感じである。

どこかで変なスイッチが入ってしまった俺が続きを語ろうとして、朱空がそれを制した。

「もういい解った。それ以上は必要ない。聞いただけ時間が無駄だわ」
「……」

「もう、いいから。ちょっと頭冷やしなさい。あんたどっかおかしいわよ。バカに拍車がかかってる」

やおら朱空が立ち上がり、どこに行くのかと俺は目で追ってみる。朱空はどこ行くではなく一歩後ろに下がって半転するとまた膝を曲げた。背中が重なり合う。あの野郎、人を椅子の背凭れかなにかと考えているのだろうか遠慮も躊躇もなしに体重を傾けてきやがる。

決して重くはなくても、いいようなない違和感がどうしても生じる。

「後ろ向いてて上げるから、今なら泣いてもいいわよ」

茶化すように馬鹿にするように――どこまでも不器用な優しさを含んだ声がそう告げる。

「馬鹿言うなよ」

余計なお世話だ。

「あんた今はどうしてるの？」

「高校に上がってからは一人暮らししてる。母親が再婚することになったんだよ。相手は一応俺の正式な親父で、つまり前の旦那だ。

俺は今更昔の家に戻りたいなんて思わなかったから、一人でこっちに残った」

母親の話だと三つ下の妹がいるそうだが、これだけ長い間顔を合わせていなければ兄妹なんて意識はあってないようなものだろう。

名字が同じで血が繋がっていても、通っているのはそこまで。これまでの時間が作った空白を埋めることなんてできない。

たとえ家族でも。

ならば友人なら尚更に。

俺と、俺や他の連中が過ごした日々に紗季がいなくて、空いてしまった穴はどんなことがあっても埋められやしないのだ。遊季がどうしてあんな真似をしたのかは俺には解らないが、あいつはそれによって空白を埋めようとしたのかもしれない。

双色遊季にとって双色紗季は姉というだけに留まらず、自分の分

身にも似た存在だった。

紗季がいなくなったことは遊季にとって、自分が半分欠けたのと同じ意味を持つ。

「そっか。あんた、家族とか友達とか、そんなのを優先して生きている人間なわけね」

寂寞の声が、

「……あたしには、そういうのよく解らないかな」

星に眩くように朱空はそう吐露した。

「あたしの家——朱空は地元では大きな旧家なのよ。このビル社会に信じられないような武家屋敷が家でさ。本当、バカみたいに大きな家よ」

俺は遊季の言葉を思い出す。いいとこのお嬢様。お嬢様とかの柄では間違いなくないけれど、いいとこの出であることは当たっていたらしい。人は見かけに依らないと言うが……いや、朱空の場合だと見てくれではなく挙動だろうか？ どちらにしても俺が面食らったことに変わりはない。

「大きな屋敷で、人もたくさんいた。けれどあたしはその中の誰が自分の親なのか解らないままだったわ。小学校と中学校はいつも使用人みたいなのが車で送り迎えにやってきて、家に帰ったら用意されてるご飯を食べるの。誰一人あたしに構ってくれやしない。悪い意味で完全放任。だけどね、その反面であたしが屋敷から出ることは厳しく禁止されてた。あたしが知る外の景色は、庭から見上げる空と、車の中から見える世界だけ。あたしね、そんな風に十五年も育てられたの」

あっけらかんと捲し立てるように朱空は言い切る。俺は、発言のターンが自分に回ってきたことを自覚しつつもなんとコメントしていいやら困惑するばかりで口を開けずにいた。

朱空はさらりと言っているが、こいつが育った環境は明らかに異常だ。そんなこと俺にだって解る。朱空はずっと囲われた世界の中で過ごしたという。誰と言葉を交えるわけでもなく。誰に愛情を向

けられることもなく。完全な無関心の支配に束縛されて。

俺が世界を奪われた人間だとしたら、

朱空は世界に奪われた人間。

囲われたセカイと箱庭少女。

「今もそんな生活をしてるのか？」

「高校に入るときに家を出たわ。というよりも逃げ出したって言った方が正確ね。……ああ、逃げたなんて言っても脱獄みたいなことイメージしないでよ。それでも了承は取ったんだから。二つ返事だったわよ」

背中合わせに聞こえる声。朱空がどんな顔をして話しているのか無性に気になる。

そうか、と相槌を打ちながら俺は朱空がやたらに自らへの呼称を名前にしろと強要してくる理由を理解していた。朱空にとって名前は、唯一にして無二である世界との繋がりで個人の証明——おそらく朱空の両親がこいつに与えた最初で最後の愛情だっただろうから。「本家の血筋なんだけど、男じゃないと家督は継げないらしいのよ。あたしはそんなものに興味はなかったけど、あのままずっと家に縛られてるのが嫌だった。どうしても外に出ないといけない理由だっであつたしね」

俺には朱空の家が下した決定の背景など読めない。朱空は自分が家を出ることはイコールで厄介払いだと考えているみたいだが本当にそうだろうか。朱空はまだ朱空の名前を使っている。つまり破門や勘当を受けたわけではない……と思う。俺には旧家のシステムなんて解らないからな。断言はできない。朱空家は朱空末那という人間を開放したつもりなんじゃないだろうか。巨大な箱庭の中から外の世界へ。

彼女がそれを望んだからこそ。

世界を与えた。

……なんてのは流石に綺麗事で解釈し過ぎかもしれない。朱空の言う通りただ単に世襲になれなかった娘が必要でなかったという説

も十分有り得る。どちらが正解かなんて、考えたって俺には解りやしない。

「だからあんたのことが解らない。あたしは自分より他人が大切だなんて思ったことないし、そんな風に考えるなんてことなんてのもこの先きつとない。あたしにとって家族はただ同じ屋敷で暮らして他人に過ぎなくて、学校の友達なんてのも……相手がどう思ってるかは知らないけど作らないでいたつもり」

あたしは違うものだからね。幻聴を疑うほどに聞き取りにくい声で朱空は自虐的にそんなことを口にした。文字通り、住む世界が違うと。その言葉は多分、そう言ったつもりだろう。

例えるならばかぐや姫。いつか失ってしまうと解っているから初めから近付けない。距離を隔てていなければ触れてしまうから遠ざける。手に入れたものの暖かさを知ってしまったら、手放したときに悲しいから手に入れない。別れるくらいなら出会わない。それができないから必要以上に近付かなかった。

ふと疑問が浮かぶ。朱空の言う『しなければならぬこと』とは何なのだろう。

よくよく考えれば矛盾しているではないか。今までの話からだ、朱空は高校に入るまで屋敷の外の世界とはほとんど繋がりがなかったはずだ。外の世界に残すものが何もないように毎日箱庭に戻る日々を繰り返していたというなら。

しなければならぬこと。それが他者に課せられたものでないとしたら朱空は、世界に未練を残していることになる。そしてそれは家を出る決意をさせるほどに、朱空の中での最優先事項。

思い当たる節がある。

「余計なこと、考えてるでしょ？」

後ろに目が付いてやがるのかこの小娘。それも千里眼とか心眼とかの類いだ。なんで表情も見えないのに俺の胸中が透かせるのだろうか。拍動か心拍がモールス信号にでもなって伝わっているのかもしれない。

「その『しなければならぬこと』てのは、おまえが捜してる誰かに関係してるのか？」

あるいはそいつを捜し出すことがそうなのか。

真偽がどうなのか、その答えは期待していなかった。

「残念でした。それは違うわよ」

にもかかわらず、朱空は存外あっさりと口を割った。

「まったく関係ないわけじゃないんだけどね。……あたしもあんたと同じでね、約束ってのがあるのよ。もう十年も前の約束だけど」

十年前、としたら朱空は俺の一つ年下だから当時五歳だ。そんな古い約束とやらを殊勝にも記憶していて今からでもそれを行動原理にしていられるなんて。俺が思うより朱空は義理堅い奴らしい。十年も前の約束なんて、相手は覚えてもいないだろうのに。

いや待て。

五歳だと？ そんな頃にどんな約束をしたのかなんてことは知らないが、そもそも約束なんて成立するのか。

朱空家が外交に閉鎖的な家系なのは間違いない。加えて齢五つなんて子供なら、一般家庭であつても放置はしない年頃だ。外出の際には送り迎えが車で行われていたというし、だったら家の外の誰かと約束を交わすシチュエーションなどない。十年が経って尚も自らに影響を及ぼすほどに強力な契りを、ただでさえ他人を避けていた朱空が交わすだろうか。

若さ故の過ち、とは五歳児にも当てられる言葉であるのかを俺が考えていると、突然背中にかかっていた負荷が消失した。解ったことが一つ。朱空が俺に体重をかけていたのと同じように、俺もまた朱空に凭れる形になって負担を軽減ないし相殺していたらしい。なので同一直線上から同大の力が消えて、慣性により俺は仰向けに体を反らすことになった。

「今日はここまで。あんたも落ち着いたみたいだし、いつまでも悄気てないでさっさと家帰りなさい」

後輩に言われることではないな。

いつぞやのように背中を見せる朱空。振り返らず、
「続きはまた明日」

5／朱空末那

／
1

そして翌日。

朱空の「また明日」は放課後のことだったらしく、昼休みやその他の休み時間に奴が俺の前に現れることはなかった。しかも終業の後教室で十分ほど待ってみたが、呼びに来る気配もない。一年の間割が本日二年よりも一限少ないのか、それとも俺から出向けという意味なのか。

しかしよく考えてみれば朱空が場所を指定しなかったのは、それが指定する必要がないと判断したからかもしれない。もしそうだとしたら俺がどこに行くべきかは考えるまでもない。朱空末那の所在地はいつでも決まっている。あの女はいつだってダンジョンの指定位置に鎮座するボスキャラのごとく、自分の居場所を確保していたのだから。そこで会わなかったためしがない。

夕陽の指す場所です。

茜色に染まる世界で。

五人の思い出が残留するあの河原で。

朱空はいつでも彼方の空を眺めていた。

その数分後の事になる。

結果からいうと俺の推論は途方もなく外れる結果となり、解答から遠く離れた的を射抜くことになった。

驚いたのはそこに朱空がいたことではない。あの傲慢で高慢で高飛車な小娘が殊勝なまでにしかもスタンダードに――校門などという常識と照らし合わせて是とされる場所で、まるで誰かを待っているかのような行動をとっていたことが俺にはノストラダムスの予言

並みに信じられなかった。

ぱたぱたコンクリートを打つ靴の裏が高速でビートを刻む。

腕組みをして門に凭れかかる表情は果てしなく憤怒に構えていて、爆弾処理班も逃げ出したくなるだろうほど、それは今にも爆発しそうなくらいに膨れ上がっていた。かくいう俺も驚駭して思わず立ち尽くしてしまったのだが。

これはあれか。

俺が、悪いのか……？

そう思ったとき、間が悪いことに朱空の右目が俺を映す。

タタタタタ、と一定のリズムを刻んでいた律動が停止した。俺は心臓が止まるかと思った。

初めに動いたのは首で、次に全身。朱空が大股で歩き出す。怒りの表情で口を固く結びながら目では批難の罵詈を連呼し、

「おっ——そい！」

胸倉を掴まれた俺は顔を背け、右の鼓膜だけでその雷鳴染みた憤慨の咆哮を聞いた。脳を貫通して大気を激震させた槍の一声を受けて、聴覚が麻痺した程度で済んだのが奇跡みたいだ。無事な証拠に黒板を爪で引っ掻いたときみたいな音がすっかり聞こえている。

「遅い遅い遅い遅い！　どれだけ待たせるつもりよこのバカ！」

襟元を引き千切らん勢いで体を揺らさせる。

「弁解があるなら聞いただけ聞いてあげるわよ！　なんとかいいなさい！」

「俺——は、今——授、業が——」

脳がぐわんぐわん揺さ振られて舌が回らない。

朱空の手首を掴んで強引に引き剥がし、目が回るのを額を摘まんで堪えつつ舌鋒を繰り出す。

「……俺は今授業が終わったところだ」

「言い訳なんて最低ね！」

「マジで聞いただけかよ！」

罪の所在が本当に俺なのか誰か教えてくれ。もしもそうなら俺が

どうすればいいのかも補足しろ。

聞けば、朱空は一時間もここで俺を待っていたらしい。教室で立てた仮説の一つが当たっていたわけだ。一年の時間割と二年の時間割を重ねると週に二回ほど授業数にずれがある。都合の悪いことにそれが今日だったのだ。

俺は弁明の中で朱空を贖し、どうにか会話ができる状態にまで安定させた。前にも似たようなことをして似たようなことを考えた記憶があるが、結果だけは違うものになってくれていることを祈る。

「……まあいいわ。待ち惚けは慣れてるから。その代わり貸しだからね」

祈りは天に届いた。

慣れてると思える要素是一片たりとも感じられなかったが。この貸しとやらがいつどんなタイミングで廻り帰ってくるのかは解らないが、この場を鎮めることにはどうにか成功したらしかった。

「じゃあ行くわよ」

「どこに？」

「決まってるでしょ。河原よ」

そりゃあそうだろう。しかしだとしたら何故校門で待っている必要があったのか。どうせならいつもみたいに先客として土手に着座していればよかったのに。

それを口に出すと朱空は、

「別にいいじゃない。どこで待ってもあんたには関係ないでしょ」
厳密には関係している気がするのだが。

朱空が声を荒げる。

「いいから。あんたに拒否権はないのよ。ほらぼさっとしてないで行くわよ」

颯爽と髪を翻す。その小さな背中が群れを先導する肉食獣を俺に思い出させ、黒の一瞥に促されて俺は遅れながらも朱空を追った。いつかのように後ろにつく。すると五歩の間に俺は朱空に並んでしまった。原因は考えるまでもなく俺の隣の女が歩調を緩めたからで、

そうと解っていてまた一步身を引くのも無粋である。

朱空は何も言わなかったので俺も黙っていた。

語ることがあるとすればそれは朱空にあって、そのときは今じゃない。

河原に到着するまでの会話は結局なかった。

落日に赤い世界は今日も変わらず夜へと進行する途中の静寂。長く延びた影が夕陽とともに赤と黒のコントラストを生み出す。

「話があるんだろ。昨日の続き」

そろそろ黙っているのにも飽きたと、口火を切ったのは俺の方だった。本題を急ぐ理由はなかったが、これ以上沈黙の空気に耐えられなくなったのだろう。別に浮わついた展開を期待していたわけではない。朱空の表情は河原に近づくに連れて徐々に、憤怒とは違う暗い感情を燦らせ始めていたのだから。

「そうね」

朱空が振り返る。

「それじゃあ……何から話そうかな。希望を聞いてあげるわ律、何から聞きたい？」

「何からって……」

続きはまた明日と宣言したのはおまえではないか。希望もなにもない。俺は半分朱空の意思でここに脚を運んだ。この後の展開に口を出すつもりはないので、適当な段取りで話を済ませてくれればいい。

「自己主張のない男ねえ。昨日は聞いてもないこと一方的に話してきたくせに」

「昨日は昨日で、今日は今日だ」

明日には明日の風が吹く。俺だって年に一度くらいは頭の調子が狂う日があるのだ。

切欠さえあれば。

人間なんて存在は簡単に壊れてしまう。

「あっそ。そんなじゃ、まず先に謝っておこうかな」

射光の影で、俺はそれを言ったときの朱空がどんな顔をしていたのか見ることができなかった。加えて言うなら、ただでさえ窺い難い状況であつたにも関わらず目標があつさり視界から離脱したことも原因の一つである。

小走りに、少女の体が逃げていく。

手を伸ばしても届かない距離に立ってから一度振り返り、さらに四歩後退する。

苦笑い。朱空が声を出さずに笑う。謝るとか言う割りには茶目っ気などまるでない。似合わない仕草だった。酷く歪で笑っているのに泣いているような、それはおそらく自分を偽ることをしてこなかった少女がはじめて見せた偽物の感情だったからその矛盾がそうさせたのだろう。

朱空が取り出したのは一枚の、見覚えのある紙切れ。それを手早く折り畳んで、完成形が直ぐにその翼を広げた。朱空が作ったのは紙飛行機。長方形の紙から産み出された細い造型のそれを、軽い手首のスナップで飛ばす。

「ごめんね律、それ、あたしなんだ」

風が吹いてなくてよかった。素材が薄っぺらい紙であるこの飛行機は、そよ風にさえ流されてどこかに行ってしまうだろうからな。届いたと言ってもそれは夕風が果たした奇跡に近い現象だったように思える。

この意図が読み取れないほど俺も鈍感ではない。

俺は出来立ての飛行機をばらして中に書かれた文字を拝読した。

「……おまえだったのか」

たすけて。

いつか生徒会室で見たのと同じ文字が紙面に躍る。散々俺を振り回した無責任な四文字が今またこうして眼下に姿を表した。

「あんたが捜してたはぐれ者……ていうか、それはあんたの勘違いなんだけど……それ、あたしなんだ」

「なんで知ってるんだ。俺がこれの投書主を捜してるって。言ってなかったはずだろそんなこと」

「今日の昼休みに生徒会長……渚に聞いたのよ」

「会長様が守秘義務を放棄したってのか」

「昼ご飯いっしょに食べよって誘ったら洗いざらい吐いてくれたわよ。すっごくちよろかった」

リアルに想像できてしまう。俺には隠密行動を指示しておいてご自分は飯の肴に。生徒会長の特権を最大に生かしていやがる。それとも悪戯として片をつけたから、もう秘密にする必要もないと判断したのか。軽薄な行動であることに違いはない。

「どういうつもりだ、こんな悪戯」

「だから謝ってるじゃない」

俺には謝るのではなく居直っているようにしか見えない。胸を張って踏ん反り返りながら手は腰だからな。

朱空に謝罪の意思があるのかないのかは一度問題から外すとして、そうなるの一つ解らないことがある。それは俺が九ノ瀬に案件を押し付けられた昼休みの朱空の言動だった。なぜ生徒会室に朱空が現れたのかは例の投書の為として、それを隠す為に吐いた嘘が解らない。

人を捜している。

朱空の依頼は咄嗟に口を衝いたただの言い訳でしかないというのだろうか。

その後にく、策とやらも。

俺の助力を執拗に拒否したのも元々依頼が嘘っぱちだったならば納得がいく。

「勢いで言っちゃったのは本当だけど、でも全部が嘘ってわけじゃないわよ」

黒髪が揺れる。風の吹いていない河原に座り込む朱空。

その姿がいつかの少女と重なった。

朱空は初めて見たときと同じ寂寥の感で滲む遠い瞳を夕陽に向ける。

「捜してたわけじゃない。でも会いたいと思ってるのは嘘じゃないのよ。だからあたしはこうして——」

泣き出しそうな横顔が、黄昏に浮かべた思い出を見上げるように。

「——ずっと、ここで待ってるのよ。二度と会えないかもしれないけど、それが約束だから」

5／箱庭少女

／2

思えば、朱空末那がそこにいる理由を俺は疑問に思ったことがなかった。

何度脚を運んでも必ず朱空と遭遇すること。同じ場所に座って何をしているのか。毎日そこで何を想うのか。その全て、何一つ、俺は不信感を抱かず顔を合わせ言葉を交わした。本来ならそんなことが真っ先に気に掛かるはずなのに。

夕陽の中で、月の下で。

朱空がなにを想ってそうしているのか、そのことがまず何よりの疑問であって然るべきだったのだ。

「ここからが昨日の話の続きなんだけどね」

それが前置き。

遠くに霞む落日の朱色を眺めながら、そのときだけ俺を見上げる黒い瞳。

「約束なのよ。そう思ってるのはあたしだけかもしれないんだけど……うん。そんなのは建前。これはあたしの自分勝手な贖罪で、自己満足にしかない戒め。屋敷を出てあたしがしたかったことってのは、つまりそんなことなのよ」

自分勝手な贖罪。

自己満足。

自分の中から零れた感情でありながらも、そうして自分が手に入るものは虚しさだけ。似たような部分が俺にもあるから、語る朱空の表情が空っぽなわけが解った気がした。

双色紗季という少女が願ったこと。

俺が好きだった少女が抱いた願い。

幼い頃に正義に憧れた俺が自らの理想を失ったのは、紗季の想いに応えることができなかったからだ。何もかもを救いたいと願っていたわけではない。誰も彼もが幸せであって欲しいなどと思っていたわけではない。俺はただ、自分の手の届く範囲の中で——自分の大切な人が悲しむ姿を見たくなかっただけのに。

それだけの幸福さえ、叶えることができなかったから。

歪んでしまった理想でもそれを持続けることが紗季への答えになると信じ続けていた。

「もう十年も前の約束だって言ったよね」

朱空が自嘲気味に笑う。

今ここにある現実も自分自身も、語る言葉の全てが虚構であるかのように。

それは幻想を思わせる赤い世界の中で。

風の吹かない時間の中で。

言葉は哀しい歌のように、声は儚く黄昏に消える嘆きのように。

「——子供の頃、あたしの知ってる世界は小さくて囲われた空だった」

少女の告白は、泣いてるように濡れていた。

「十年前のある日、自分の知らない世界が気になって家を抜け出したのよ。屋敷はバカみたいに大きくて、いくら人がいっぱいいても見付からないように抜け出すのは簡単だったわ。そもそも誰もあたしのことなんて見てなかったからね。何をしたらって、そこにいることさえ認めてもらえないのと同じだったから。思った通り、あたしは屋敷の外に出られた。そしたら——この世界は思っていたよりもずっと大きくて広かった。街も、人も、毎日見上げていた空さえも見ることがないもののような気がして驚いた」

子供の知っている世界は酷く矮小で、曖昧な認識に過ぎない。

例えばそれは御伽噺の本の中だったり、テレビに映し出される異郷の景色だったり。なんにしる現実を目にしたことがない世界を『

どこかにあるもの』として知っているだけで、だからこそ本物に触れて驚愕するのは、当然といえば当然だろう。

朱空はそうでなくても、それまで屋敷の中で世界から隔離されていたのだから尚更。

車窓を流れる空と、実際に自分で見上げる空は同じものでも違うものに見えるはずだ。

「だけど、驚きの次にあたしが感じたのは恐れだった。自分の知らない世界の中で、まるで自分だけが取り残されているような感覚が怖かった。自分でも理由の解らない震えが、どうしても止められなかった」

自分の知らない世界。

急激に広がった世界。

それが人に与えるのは、自分の世界の拡張による喜びと同時に僅かな疎外感。

「歩き疲れて座り込んだ。それで考えた。どうして自分は震えているんだろう。なにがそんなに怖いんだろう、って。考えるまでもないほど……答えは簡単だった。膝を抱えて震えながら、あたしはそれを認めるしかなくて泣き出したい気持ちになりながら実感したわ」
少しの間が沈黙を作る。

そうして、瞬いた瞳がこちらを見据えて言った。

「――あたしは、一人だった」

暗い影を落とす声。

憂鬱の色が翳りを見せた表情が、不意に記憶に訴えかけてくる。まるで、その表情をどこかで見たような、そんな衝動が意識を襲った。

思い出せと。誰かが叫んでいる。

記憶のアルバムは表紙が鉄で出来ているみたいに重く持ち上がらない。

「目を閉じて、いつそのまま何も見ないままдейようかと思った。次に目を開けたときに、当たり前前に存在している世界が怖かったの」
何か引掛かって駆け巡る。

朱空の話が進むに連れて明確な形に変わっていく嘗ての風景が思ひ出そうとすると離れていく。

「その時だったわ。男の子が声を掛けてきた。どうしたの？ って。夢を見てるのかと思ひながら顔を上げたら、不思議と目を開けるのは怖くなかった。そこに誰かがいるって思えたことが、それだけのことがあたしには嬉しくて。今まで小さかった自分だけの世界が、その時初めて外の大きな世界と繋がった気がして」

思ひ出すのは、遠い夕暮れ。

今日と同じ夕風の、茜色の空。

霞んだ記憶の先にいる一人の少女。白い顔を夕焼けに染めて、涙を零しながら微笑む姿。

消えかける記憶を繋ぎ止めて思ひ出す。

「手を引かれて走った。不思議と、その背中についていくのが嬉しくて、握り返してくれる手が暖かくて泣きたくなった。それでも涙は出てこなくて、これが、幸福なんだって思えたの。――その子に引張られて、あたしはそのとき本当の意味で箱庭を抜け出せた。……嗚呼、これが世界なんだって。もしかしたら、世界はあたしが思っているよりずっと綺麗なんじゃないかって、そう思った」

ぎこちない笑顔を少女が浮かべる。

遠い過去。夕焼けを背中にして同じ景色を見ていた気がする。それがいつだったか。思ひ出そうとすれば遠退いて行く朱色の世界を手繰り寄せ、そしてようやくそれが形を成して記憶に顕現した。

夕焼けの記憶。濡れた笑顔。大きな瞳。一度だけ吹いた、夜の始まりの蒼い風。

忘れていたのではなく、思ひ出せなかった。

重ねた時の中で他の記憶が邪魔をし、そこに辿り着くのを妨げていたずっと昔の想ひ出。色褪せた心の奥の風景。埃を被って色の薄

れた、始まりのページを彩る夕焼けを瞼の裏に焼き付けて、

「そうか。……やっと思い出した」

口に出してみると、それはすんなりと受け入れることができた。

二人の始まりの空。埋もれていた欠片を繋ぎ合わせて思い出す。

——また明日。

無邪気な声が聞こえてくる。泥だらけの少年の姿が夕焼けを背にしてそこにあった。

思えばそうだった。全てはあの日、十年前。時の流れの陰に隠れていた遠い夕暮れの景色。

「『また明日』ってね、言ってくれたのよ。お互いに名前も知らないのに、明日もまた同じ場所で会おうって約束をしてくれたの。叶わない願いだってことは解ってた。あたしはこれからまた屋敷に——そうね、あんたの言葉で言うなら箱庭に帰らなくちゃいけない。そしたら、もう次はいつ外に出られるか解らなかった。いくらなんでも半日も屋敷にいなかったんだもん。誰かが気付いてるに決まってるでしょ。案の定迎の車が直ぐに来たわ。いつもの車からいつもと同じ人が出てきて、何もなかったみたいで顔してドアを開けてくれるの。車が動き出してから、窓の外を見て考えてた。あの男の子は明日もここに来るのかなって。そう思ったら、屋敷に帰るのが急に嫌になったわ。あの箱庭に戻れば、あたしはその日手に入れた大事なものを失う気がして怖かった。それになにより約束があったから。……彼がどんな風に思ってるかは解らなかったし、今から考えればそんなに大したことじゃなかったと思う。だけどどうしても、彼に会ってお礼を言いたかったの」

朱空はやはり俺を見ていない。想い出を語る口調はいつからか、想い出に語る口調に変わっていた。

「あたしが知ってた世界は、箱庭から見上げる空だけだった。小さくて囲われた、一人ぼっちの箱庭^{セカイ}。だけどその日、あたしは彼と出会って——もっと大きな世界を手に入れた」

少しだけ覇気を取り戻した強い語気。

「彼や、彼の友達といっしょに遊んで笑って——それだけの繋がりがあたしには何より大切な宝物になった。その記憶が元風景。箱庭から出ることを決めた瞬間の想い出なの」

朱空は後ろに手を突いて姿勢を崩す。表情も氷解していて、笑っていないくても無表情でもなくて不機嫌な様子もない。まだ回想を続けているのか、目は焦点が合わずに空に向けられていた。

風が吹いていた。

夜の訪れを告げる微風が夕風に幕を引く。

「だから、約束が守れなかった自分が許せない。もう一度会うことは出来ないかもしれないけど……きつとそんなのは叶わない願いだけれど、これはあたしに出来るせめてもの償いなの。この場所で、彼がくれたものを忘れないように」

——十年前の面影を探して、二度と現れない誰かを待ち続ける、そんな永遠に果たされない約束が彼女をその場所に拘束する。

話が終わっても朱空はまだ落日を眺めていた。まだ続きがある雰囲気ではない。後はただ残された余韻だけが場を満たすのみ。どれだけ月日が経とうとも変わらない、その夕暮れの空に想いを馳せる少女の姿を、俺はこのとき尊いと思ってしまった。

再会を諦めていても捨てきれない想いを抱いて、いつかその約束が果たされる日をひたすらに待つのみ。

朱空は少年に感謝していると言った。自分に箱庭の外を与えてくれた誰かに礼を言いたいと願っている。

確かに、少年は一時的にでも少女に世界を実感させることができたかもしれない。箱庭の外にある世界を見せることができたかもしれない。だがそんなのは偶然だ。箱庭から抜け出したのはあくまで少女の意思であり、少年の関与は二次的なものに過ぎず——その行為さえ本質は偽善だったのだから。

あの日。

仲のいい、まるで家族も同然の五人で河原を駆け回っていた少年は不意に今にも泣き出しそうな顔で空を見上げる少女を見つけた。

少年は少女のことなんて知らなかったけれど、彼は涙が堰を切りそうな彼女の瞳を無視することはできなくて——自分の前で誰かが泣いていることが我慢できなかったから、少女に声をかけた。それは少女を救いたいという願いなどではなく——自らを守るために他人の救済を装った偽物の正義感。

結果はどうだ。

あれから十年の過ぎた現在。箱庭から脱け出した朱空は、それでもまだ世界に縛られているじゃないか。

少年のしたことは、少女に世界を与えるなんてものじゃない。

こんなこと——箱庭の外の、別の箱庭に少女を幽閉しただけだ。

「叶わないなんてことはねえよ」

俺は、朱空に倣って彼方の空を見据えながら言った。赤い太陽は半分以上地平線に沈み、背後に迫る夜が少しだけ視界に入る。

「もう会えないなんてことはない。俺が、おまえが待ってる奴をここに連れてくる。約束だ朱空。明日絶対に、その約束を果たさせてやる」

「……なに言ってるのよバカ」

出来るわけがない。俺を見上げる黒い眼光が敵意さえ感じさせる鋭さで憤る。

十年も前の約束だ。相手を見つけ出すなんてのは普通なら不可能だろう。朱空にしてみれば俺が言っていることは自分への嘲笑に聞こえているかもしれない。いつもの朱空ならすぐに立ち上がって殴りかかってくるだろう。俺が言ってるのはそんなことだ。

他人の記憶だけを頼りに想い出を再現する夢物語。そんな魔法。

ああ構わないさ。

簡単なことじゃないか。

正義の味方。

少年の壊れた夢。

空想の中の願い。

俺には誰かを幸せにすることなどできないけれど、それで十分だ。

偽善で構わない。俺が行うのは朱空の望みを叶えることではなくて——俺自身が置き去りにしてきた契りを果たすこと。

また明日。彼女を縛るその約束から少女を解放するために——俺がいつか無責任に交わしてしまった約束を果たすために。

「……解った。あんたのこと、信じて上げる」

迷いなく言い放った俺を睨みながら朱空。

「どうせ、明日もここにはくるわけだし。あんたの戯言も……まあ、覚えといて上げるわ。精々笑えるオチを用意しておいてよね」

その心配はない。笑えるオチならもう十年も前から用意されているのだから。

誰が書いたシナリオなのかは知らないが、最高に滑稽で劣悪で杜撰であって御都合主義な戯曲だ。

ちつとも笑えやしない悲劇のような喜劇。巡り巡った因果の行き着く夕風に奏でる最終楽章。

幕を引くのは幕を開けた人間の務め。

十年前に開演を告げた少年。長い長い物語を終演に導く義務を負うのは——他の誰でもなくて、紘井律という俺自身だ。

今なら思い出せる。俺にしてみれば普段と変わらず遊び回った一日だったから印象に薄かったけれど、確かに朱空に声をかけたのは俺で間違いない。風に吹かれて壊れてしまいそうに脆い瞳から涙が流れるのが嫌で、どうしても放っておけなかった。おそらく俺と同じで九ノ瀬達だって覚えていないだろう。それくらいに何でもない一日だと思っていた。

まさか何気なく口にした別れの言葉が十年の歳月を越えて少年を戒める呪いになっていたなんて、夢にも思わず。俺は朱空をずっと待たせていたのだ。

俺が数日前のあの夕暮れに、面識などないと思っていた朱空に声をかけるなんて愚の骨頂をしでかしたのはどこかその風景に見覚えがあったからというなら頷ける。

いくら覚えていなくても、想い出は記憶と世界に残されているの

だから。この五人の想い出が染み付いた河原に、そのページは確かに刻まれていた。

「……今日はもう帰る。なんだか疲れちゃったわ」

言うが早い。朱空が立ち上がって歩き出す。

その、少女の去って行く背中を見ながら俺は思う。

終わらせよう。

朱空を箱庭から解放する責務が俺にはある。箱庭少女を、いつかの夕風の世界に閉じ込めてしまった罪を償わなければならない。俺があの日少年だということを告げ、そして今度こそ本当に、朱空に箱庭の外を見せてやろう。

しかしその前に一つ。俺が清算すべきはもう一つ残っている。

「朱空」

呼びかけに応じて朱空末那が歩みを止める。振り向いた仏頂面は最後の夕陽に半面を照らさせていた。

明日の優先事項。わだかまりの中に沈殿するそれを先に片付ける。為の猶予を俺は取り付ける。

「また明日な」

さしあたっては。

双色遊季に答えを持っていかなければならない。昨日俺が言葉に出来ず、逃げ続けてきたことに決着をつけよう。

夜の足音を聞きながら俺は、夕焼けの名残に消える箱庭少女の一瞥を返事として受け取った。

5／昼休みの一閃

／3

生徒会室の扉を開いた俺は、そのままの状態で硬直していた。

自己の認識できる範囲外の現象を目の当たりにしてしまった故に、脳が現状を理解しきれずパンクしてしまったのか。まばたきさえも忘れて俺は眼前の光景を目視する。穏やかな昼の日差しが差し込む生徒会室の白い床や壁と――何故か蒼に片手を取られ、完全に関節を決められた状態で膝を折る九ノ瀬の姿が白昼夢のようにそこにあった。

蒼の剣幕はまさに殺人鬼のそれ。右足で九ノ瀬の背を踏みつけながら押さえ付け、首筋に竹刀を突きつけている。一触即発にして鎧袖一触の図。全国の猛者達を病院送りにしてきた蒼爽架の突きが今か今かと獲物の肉を貫く瞬間を待っていた。

「り……律……」

搾り出された九ノ瀬の声。

涙目がマジのヤバさを俺に訴える。

「助け……てくれ」

ごきり。嫌な声で九ノ瀬の関節が鳴いた。

「ぎゃあああああああああああああ！」

耳を劈く悲鳴。

聞いている俺も鳥肌が立つほどに危ない音がしていたからな。蒼の奴、本当に外したかもしれない。呼吸も同然に殺気を吐き出すスプラッター蒼の前に、人の命など玩具も同然。関節の一つや二つ、外すどころか砕くことさえ厭わないだろう。

「渚、私の質問に対する答え以外で言葉を発して良いと誰が許可し

た？ それから」

鬼の形相が、俺に矛先を変更した。

「律、おまえは今私に対して失礼な独白を語っていたのではないか？」

「い、いやだなあ、蒼さん。そんなことないじゃないですか……」
沈黙。

恐怖の前では露骨に虚言が浮き彫りになる。俺は棒読み口調と引き攀った笑顔を返答にして、遅まきながらその行動が自殺行為であることに気付く。蒼の正義感が常軌を逸しているならば、嘘を憎む心もまた異常。防衛本能が咄嗟に働いたことが、自分の首を絞める結果になってしまった。

「私の目を見ろ」

低い声音。言われた通りに蒼の黒目に焦点を合わせる。

「心眼というものを知っているか律？ ——私の目は虚実を見抜く」

蒼の目。

その奥。

弛まぬ剣の修練により頂点を得た少女が手にした叡智の極致。その瞳は人の内側に巢食う全てを見透かす。故に彼女は百戦錬磨。対峙する者の心意を読み取ることで敵の繰り出す剣を先読みする蒼にとっては、心の歪たる嘘を見抜くことなど容易い。幾多の死線を越えてきた常勝の瞳がその圧力で俺を拘束して動きを制限し――

「歯を食い縛れ」

――気がついたら蒼が目の前にいて、竹刀を上段に構えていた。

「メエエエエエエン――！！」

疾風を纏う竹刀が閃く。

振り下ろされる一閃はこのままの軌道ならば俺の脳天を直撃し、間違いなく頭蓋を砕くだろう。

面有り一本だ。

いや待て。

一本……じゃねえ！

反射神経を全て注ぎ込み全力で回避に臨む。体を捻りながら床を蹴る。飛び退いた後なら倒れても構わない。今この一撃を躲すことが出来ればそれでいい。数秒先の運命ではなく、目前に迫る死を回避しろ。

それは一瞬だった。

旋風を残して落ちた竹刀が俺の頭の横を過ぎていく。風を裂く音が絶対的な死の予感と明確な敗北の未来を幻視させた。そしてそれは、俺が一秒でも判断を遅らせば幻ではなく現実となっていた光景。紙一重で命を繋いだのは僥倖。右半身で床に倒れ込んだ俺は火急に体勢を立て直す。

が、それも既に遅い。

聞こえてきた音は一つだけ。それさえも彼女の前では遅過ぎた。

床を踏み切る小気味のいい綺麗な音の後。

蒼の体がモーションの一切を殺して俺の前へ移動する。

否、俺が蒼を視認したときには全てが完了していた。ただの一步で間合いを詰める、瞬間移動を思わせる流れるような脚運び。身動きが取れないなんてものじゃない。気付いたら蒼がそこにいた。まるで初めからそこに存在していたように。世界が停止したと錯覚を覚えるほどに。

膝を立てる。背後は扉。逃げ道は正面しかない。だがその正面には蒼がいて既に構えを取っている。中段。竹刀の柄を握った右腕を肘から引き付け、竹刀の先をこちらに向けている。

一秒未満。

物理法則を無視したみたいに、流星染みた刺突が放たれる。

風を起こし、巻き上げ、引き裂き、斬り開いて空間を穿つ。稲妻のような一刀が振るわれた後には何も残らず、必勝を誓う剣先は狂いなく俺へと向かっていた。唸りを上げる魔の槍。蒼の狙いは正中線。喰らえば即死は確実。

しかし甘い。

確かに蒼は剣道というスポーツでは他の追隨を許さぬ飛び抜けた

最強さだ。だがそれはあくまでルールの上に剣を振るう道場の中だけ。ここは生徒会室。武士道も騎士道も反則もなにもない。

蒼が持つ最強の刺突はけれど、弱点とはいえないが衝け込む隙くらしいはある。突きは点である故に力を持つ。一点に力を収束して放たれるからこそ強力なのだ。裏を返せば、それ自体の攻撃範囲は極めて低いということ。さらに何よりも軌道が直線。手練れであればあるほどに、強力ならそれだけ始点と終点の鋒にブレがないのだ。蒼の突きは強過ぎるが為に俺には届かない。

「嘗めんなよ……蒼！」

右腕から放たれる突きを避ける。難しくはなかった。これが剣道の試合だったなら防具を付けていたりで動きが制限され、こうはいかなかったはずだろう。実際蒼はこの突きで全国の強敵を何人も地に伏させてきた。俺が躲せたのは単に反則を犯した故。

必殺の突きを躲して、勝機が訪れる。攻撃の後で蒼の腕は確実に伸び切っている。竹刀は武器として機能しない。――ならば、これは最大の勝機だ。

いくら強くても蒼は同い年の少女。身長も俺の方が高く、単純な腕力でも俺が上回っている。竹刀を持つ右手を抑え、得物を奪い取る――！

「残念だったな律」

蒼の声が頭上から落ちてくる。それだけで俺は自らの失態を悟った。

誤算はない。

ただ誤解が存在した。

自分でもそれを理解していたはずなのに、先入観が背中を押して最後。蒼の張った罠に飛び込むことになったのだ。

そう、ここは道場ではない。

竹刀を持った蒼の、右腕を掴んでからようやく気付く。

突きを放つ瞬間の蒼は――竹刀を右手一本で扱っていた。剣道ではなくて、純粋な剣術。片手で竹刀を突き出し、空いた左手が攻撃

後の隙を突いて懷に飛び込んだ俺の胸ぐらに伸びる。あっさりと捕獲。

「私の勝ちだな」

勝ち誇るのではなく、それは最後通告。これ以上の抵抗には暴力の制裁を与えるという警告だ。

だが状況は五分。いや、というよりも右手が自由な俺の方が有利ですらある。胸元を掴んでいても蒼が竹刀を振るえないことに変わりない。互いが互いの攻撃圏内にいながら身動きを取れず、一方は片腕を自由に動かせる。

どう考えても俺の勝ちだ。

「……そうか。どうやら状況が飲み込めないらしいな。律、剣道三倍段を知っているか？」

「なんだよそれ……」

「私もよく知らない」

「何が言いてえんだよおまえは！」

「細かいことはいいだろ……簡潔に纏めるなら——」

ぐらりと、体の重心が揺らいだ。重力に逆らい、体が浮き上がる感覚。

……ていうか、これは。

「——ようするに、剣を持った私は、剣を使わなくてもそれだけで普段の三倍強い。みたいに思っておけ」

踵が床を離れる。

気付いたときには遅い。俺は蒼の片腕によって完全に吊られていた。さらに蒼は掴まれている右腕を引き手にして俺の体を引き寄せ。反転したその背で俺を担ぎ上げ——

「背負い投げかよ……！」

強引に、投げた。

ここにきて柔道って。剣道関係ねえよ。

為す術なく盛大に全ての衝撃を背中受ける。肺が爆発したんじゃないかと思った。手加減など微塵もありゃしない。剣の道も柔の

道も蒼にとっては殺人に繋がっているのか。

「さてと律。聞きたいことがある。答えて貰おうか」

ゆらりと上がった竹刀の切っ先が俺を指す。

「それともまだ抗うか？ これ以上は私も手加減できないぞ」

「……よくいうな」

今の背負いに手心が加えられていたなんて到底思えない。だが蒼が本気になっていたなら俺もこれぐらいじゃ済んでいないだろうとも思う。

俺はゆっくりと両手を上げた。

「降参。俺の敗けだ」

「よし。だったら答えて貰おうか。渚はどうしても話そうとしないのでな。律、おまえは私に拷問を行わせるようなことはしないでくれ」

そこでやつと蒼の表情が緩む。

吐息してブレザーのポケットに手を入れ、取り出した用紙を俺に晒して言った。

緩和した表情がそれを尋ねる一瞬で再び強張る。

「これはなんだ、どういうことだ？」

……凡そ予想は付いていたのだが、やはりそういうことだったか。たすけて、と。朱空末那のメッセージが並ぶ無機質な文面が暖簾みたいに俺の顔の前に垂れ下がっていた。

これで大体の状況は把握できた。どういう経緯かは知らないが、例の投書が蒼に露見してしまったというのが簡潔な説明になるだろう。蒼がこの手の投書を見逃すはずなどなく、ましてや学内に助けを求める生徒がいるとなれば余計に。だが九ノ瀬や俺はそのことを蒼に話さなかった。蒼の怒りを買ったのはそのことが原因と考えてまず間違いない。

俺はバレないように魂が抜けたみたいに突っ伏す生徒会長（放心状態の九ノ瀬を律儀にも蒼は椅子に座らせていた）を盗み見る。アイコンタクトを図れる様子ではない。

九ノ瀬に期待するのは止めて、俺は状況整理を独自に開始した。解らないことと、必要な情報。それは蒼がどこまで知っているか、だ。言い換えれば九ノ瀬がどこまで喋ったかである。生徒会ではこの投書を悪戯として処理をした。投書主が朱空だということを知っているのはおそらく俺のみ。しかし確証はなくて、朱空が俺の請け負った案件について情報を得た際、九ノ瀬もまた朱空から告白を受けているかもしれない。

どうする。

全て話してしまうべきなのか？

「それは」

逡巡も一声の間。

「ただの悪戯だよ」

もしも蒼がことの詳細を既知にしていたらどうしよう。その恐れが今になって背筋を這い上がる。

蒼は眉をひそめて俺の目を覗き込んだ。なんのつもりだ。心眼とかなう奴か？

「悪戯……か。本当に悪戯なのか、律。これはほんとのほんとに悪戯でしかないのだな？」

その表現はよく解らないけど頷いておく。

じい、と顔を近づけ蒼が目を合わせてくる。息がかかるほどの至近距離。幼馴染みといっても高校二年の男女だぞ、気にならない……んだろいうな蒼は。ちなみに俺も気にならない。

「解った。それじゃ律を信じることにしよう。この案件は悪戯で解決、っと」

心眼とやらはどうしたのか。蒼は俺の説明に納得した。まあ、俺も別に嘘を吐いたわけではないので、ならば見抜かれる虚言も元よらない。

軽快なバックステップで蒼が距離を取る。侍ポニーテールがひよこりひよこり揺れた。

「蒼、これ、どういうことか解るか？」

少し気になって訊いてみる。本人に直接尋ねても答えてくれやしないだろうからな。

竹刀袋に得物を仕舞う手を止めた蒼。しかし動作を中断しても会話に集中するつもりはないらしく、目は合わせてこない。竹刀袋の中にカンペでも入っているような格好で蒼が言う。

「これが悪戯だと言うなら解らないな。律の意見を立てはしたけれど、本当のところ私にはこれが悪戯なんかには思えないんだ」
そう言って。

真摯な瞳が久方振りを思わせる区間で俺に向けられた。

5／双色遊季

／4

雨はいつ降り出すのだろうと俺が窓の外を気に掛け始めたのは、蒼の暴走があった昼休みの終わり頃からである。天気予報は見えないので降水確率がどれほどのものか解らないが、降り出してしまったら傘がないので非常に困る。

放課後になっていよいよ厚くなった灰色が泣き出す寸前。

事が済むまで持ち堪えてくれることを切実に願う。

本日の俺には果たさなければならぬ課題が二つほどあるのだ。

その一つは朱空に俺が十年前の少年だということを明かすこと。

今も尚少女をあの場合に縛り付ける約束を果たさねばならない。これ以上はやはり、いつまでも放っておくわけにはいかないだろう。箱庭少女が真の意味で世界を得るためには、その義務は怠ってはならない。

そしてもう一つ。

遊季にはつきりと俺の意思を伝えることが必要だ。それをしなければ、それを引き摺ったままでは朱空に真実を打ち明けることなどできない。置き去りにしてきた柵を解くことでしか、俺も遊季も前には進めないから。

紗季の面影から遊季を切り離さないと、俺も遊季もいつか必ず潰れる。それだけは確かな事実。何もかもを中途半端にしてきた逃避の代償を、全ての取り返しがつかなくなってしまう前に払わなければ――機会は今しかない。

決意して俺は遊季の教室に向かう。待ち合わせの約束はなし。遊季がいる確証はなかったが、それでも俺はそこに行き先を定めて脚

を運んだ。事前に連絡を入れるなりすればよかったのかもしれない。後になって思いながらも、なら何故そうしなかったのかと問われれば即答できる。

そう。

この期に及んで俺はまだ迷っていた。

待ち合わせをして、遊季と話す未来を固定するのが怖かったから、あえてこんな不確かな方法を選んだ。

だというのに。

運命の悪戯とでもいうべきか。

目的地の到達を前に俺は、階段の踊り場にて遊季と対面を果たしてしまった。

「……………」

沈黙が声になって言葉にならない漣が両者の間に流れる。昇降口と踊り場。二人の位置関係から、俺は遊季を見上げる形で会話に挑むこととなった。普段とは逆の高低に戸惑いはないが、こちらを見下ろす遊季の目には背中寒いものを感じる。

見詰め合いながら睨み合うように。その張り詰めた空気の中に一輪笑顔が咲き――先に口を開いたのは遊季だった。

「どうしたの律？　もしかしてわたしに会いに来てくれた？」

遊季の言葉が、紗季の言葉を紡ぐ。

「ああ。話がある、おまえにだ――遊季」

紗季の笑顔の中で。遊季の表情が微かに揺らいだ。

「……へえ。今日はお姉ちゃんと思ってくれないんだ。意外と冷たいんだね。それとも……もしかして怒ってるのかな？　そっかー。

僕は律に嫌われちゃったんだね」

琥珀色の瞳が、その奥で得体の知れない感情を滲ませ始める。紗季と同じ色の目。今もここに残る失われた彼女のイロ。その目にだけは泣いて欲しくないと、傷付けたくないと、そう思う心は本当なのか、俺には解らない。けれど一つだけ持ってきた答えはある。遊季に対してではなく紗季に対して、紗季からではなく遊季から問わ

れたそれに、俺は言う。

「俺は紗季が好きだった」

いつか、記憶の中で彼女との思い出が風化してやがては遠く朧な残像になろうとも、その想いだけは忘れず、これから先何年の時が過ぎようとも誇って口にできるようにと誓う。紘井律が双色紗季を好きでいたこと。それだけは見失わないと心に決めて、永遠に背負っていく。

本当に大切だから。手が届かなくても見据え続ける。前に進めばそれだけ遠ざかるいつかの想い日を振り返ったとき、そこに笑顔の少女を見付けるためにも。決して嘘にしておいてはいけない想いをずっと抱いていよう。

誰かの為ではなく。

俺自身の為に。

「でも、それはもう過去のことなんだ。進もう遊季。振り返ってばかりいてもしかたないだろ。俺も絶対に忘れない。双色紗季って子が好きだったことを俺はこの先ずっと忘れないでいる。だからもう次に進むんだ」

振り返れば。

思い返せば。

その向こう側で紗季は笑っているかもしれない。けれどそれではいけないんだ。いつまでも過去にしがみついて生きていくことなんてできない。俺達が振り返るばかりで目を背ける未来は、過去から進むことのできなくなった紗季が見たかった夢の先なのだから。

起きたことを変えることはできない。どれだけ願っても嘆こうとも泣き叫ぼうとも。紗季が、どこを捜しても今は思い出にしかないのなら、かつてのその笑顔を知る者がそれを背負って生きて行くことでしか彼女の報われる道はない。後悔だけでは救えないから――俺はこの想いも記憶も背負うと決めた。

たとえ耐え切れない重さや痛みや悲しみであったとしても。

ここには悲しみに共感して泣き、喜びを分かち合って笑い合える

仲間がいるから。

立ち止まらないことが、紗季に対してできる償いだと俺は信じている。

片足を階段に踏み出したとき、遊季の声が呟くように零した。

「……律に取って、お姉ちゃんは——双色紗季はもう過去なんだね」
言って。

少女の瞳が。

琥珀色の、紗季と同じイロの目が。

有りっ丈の絶望と憎悪と怨嗟を宿した眼光が、俺に落とされた。

「解ったよ。律はそうやって、お姉ちゃんを置いてけぼりにするんだ。好きだったことも、大切に思ってたことも何もかも想い出の中に残して先に進むんだね」

仄めかすのではなく明確な敵意と嫌悪を乗せた遊季の声。侮蔑さえ含んだ眼差しで俺を見下ろす姿。その目は今にも泣き出してしまふなのに、それでいて揺るがない一つの信念のもと激情を静かに押し殺している。まるで期を待つように。

「好きだった……過去形だね。てことはさ、今はもう好きじゃないの？ 律の中の双色紗季はその程度の存在なんだ」

「違う。俺は——」

「違うよ」

冷淡な声が俺の言葉を遮る。人気のない薄暗い廊下に反響した声
が不気味に低く残響を残して耳鳴りに変わった。

「なにが違うって言うの？ 結局、律の中でお姉ちゃんは終わった存在なんですよ。もう二度と会えないし話せないし感じられないし求められないし笑えないし泣けないし怒れないし悲しめないし喜べない——そんな、ただ忘れていくだけの存在なんですよ」

違う。

違うんだ。

俺は——、しかし繰り返すのはそこまで。その続きが見当たらない。自分が何を否定しているのか、否定したくているのか。いいや、

そうじゃなかった。俺は否定したいのではなくて否定されたくないだけだ。紗季を好きでいた、その気持ちが間違いないでなかったと思いたいだけなんだ。

「ねえ律。何度も訊いたよね。律は本当に双^{わたし}色紗季のことが好きなの？ 本当に、嘘でも建前でもなくて本心から。唯一の存在として認めてくれてるの？」

「俺は……」
解らない。

何で。どうしてだろう。こうならない為に答えは見付けてきた筈なのに、何故俺はまた大前提から新しい疑問を見つけ出してしまうのだろう。紗季を好きかどうかなんて、そんな簡単な質問に対しての回答が、そこだけ綺麗に消ゴムで消されたみたいに見当たらない。

「……答えてよ」
静謐に震える声。涙声に似た音が遂に感情を決壊させた。

「答えてよ律！」
大人しかった語調が跳ね上がって、ヒステリックを起こしたような叫びはこのとき確かに濡れていた。

「どうしてもつきり言ってくれないの？ どうして、曖昧にしか答えてくれないの？ たった一度嘘でもいいから、正面から言ってみよう……！ 律は、お姉ちゃんが好きなんでしょ！？ だったらそれを律の言葉で……お姉ちゃんに伝えて欲しいのに――！」

掠れていく声は壊れてしまいそうな自分を守るため。これ以上を口にすればきつと、涙の放流を堪えきれない。そんなこと俺にだって解る。

「……違うんだよ、遊季」
そうだ、違う。

俺は、俺が想いを伝えなければならないのは遊季じゃなくて紗季だから。この心を形にすることは決してない。紗季自身に言えなかった言葉。それをここで遊季に告げたとしても、所詮は紛い物。本物のキモチは過去に置いたままで、今この瞬間の俺の中には存在し

ないんだ。紗季の前で、二度と口にできなかったその言葉を俺はどうしても自分の心だと認識できずにいた。だから俺に言えるのはそれだけだった。紗季のことを好きでいたという、信じていたい過去の想いしか俺には――

「おまえじゃないんだ。おまえは、紗季じゃないだろ」

「……………」

「もう紗季の真似は止めろ。そんなことをしたって何にもならないし、悲しみを先延ばしにするだけじゃなにも変わらない。紗季がもういないことを受け止めて、俺達は進まなくちゃいけないんだ、遊季」

遊季は黙って俯いていた。垂れた前髪に隠れて顔は見えない。

今度こそ俺は、階段を登り始める。目指すのは遊季の隣。かつて紗季がそうしてくれたように、次は俺が彼女の弟を導く番だ。

「行こう遊季」

呼び掛ける。

紗季の影を持つ少年。延びた髪はまだ姉には及ばない。今はそれだけが表面上にある二人の違いで、彼女が彼女であり彼が彼である証。

俺は、双色紗季が好きだった。その想いを反芻する。

そして、この結末に一抹の不信を抱くと同時にそれが、その声が聞こえた。

「行くなって、どこに……………」

遊季の顔が上がる。俺は咄嗟に足を止めて階段の半分手前で立ち止まった。

驚いたわけではない。

俺が感じたものを言葉にするならば、それは純粹な恐怖だった。凍てつくような冷たい瞳が、これまで奥に滲ませつつも隠していた感情を自重なく湛えている。暗く深く重く冷たく苦しい。十年もいっしょにいて、こんな目をした遊季を俺は見たことがなかった。同じ目を持つ紗季でさえも、これに似た色だって浮かべたことがな

い。

「また、朱空末那のところ？」

醒めた口調が淡々と繰り出す言葉から俺はある予想を感じ取る。そして嫌な予想はやはり外れてくれなどせず、コンマの間を置かず、脳裏に浮かんだ仮説を否定する暇をくれないまま現実が変わった。

遊季は無表情に、けれどこの上なく残酷で冷酷な瞳を鈍く輝かせ、
「『朱空末那に近づくな』——僕の投書、届いてなかったのかな？」
至極あっさりと、そんなことを、言った。

「遊季……おまえ」

「あ、その反応だとちゃんと届いてたんだ。よかった。安心したよ。もっとも、メッセージだけ届いても僕の本意は伝わってなかったみたいけど。生徒の要望を叶えるための目安箱なのに、まさか無視されるなんてな。でも、ま……律は生徒会役員じゃないし。あんまり効果的な手じゃなかったかな」

「……なんのつもりだ？」

「あれれ？ 驚いてるみたいだね律。だけど本当は予想もできてたんじゃないかな。あれを見たなら、律や渚はきつと疑問に思うはずだよ。内密に執行される生徒会の業務がなぜ一般生徒に知られているのか、て。投書の内容と状況から消去法にかけると、投書主候補はいなくなる。——でも律は違ったはずだよ。だって、律は僕に話しちゃってるんだからさ」

生徒会室で初めにあの投書を見せられたとき、俺が遊季の言う通りそれをしたのが遊季だという仮説に至ったのは事実だ。だが認めたくなかった。それをしたのが双色遊季だと認めたくないから、すぐに思考から排除したのだ。それが今になって、本人の自白をもって否定しようのない事実に変わり、これではもう認めざるを得ない。「疑わしきは罰せず、って奴かな。そういう甘いところは変わらないね。まあこれは僕のミスだから何も言わないよ。あれが僕の仕業だと律に解ってもらおうと思ったら、名前でも書いておかなきゃいけないかったよね。律は優しいから、友達を疑ったりしないもん」

疑われないのではなくて、俺には友人を疑えるほどの強さがないだけだ。

「どうしてかって？ そんなの決まってるでしょ。全部律が悪いんだよ。律が、お姉ちゃんとの約束を守らないから。朱空末那にばかり構ってるから、いけないんだよ。——好きだって言ったよね。ならお姉ちゃんだけを見てなきゃいけないよ。お姉ちゃんだけを好きでないといけないし、お姉ちゃんだけを想ってないといけない。律にはその義務があるの」

遊季は。

一度だけ断末魔に絶望を覗かせる瞳で笑い、俺を見下ろした。そのどこまでも呪詛に濁った琥珀色から目を逸らすことができず、俺は遊季の表情全てから直接それを聞く。静かに煮えた怨嗟が、身を焼くような錯覚と共に降りかかる。

「答えて上げるよ。どうして僕がここまでするのか。……そうだねえ、その為にはまず一つ確認しておかないとダメなことがあるかな。答えてね、律。昨日の続きみたいなものだから簡単だよ。で、最終問題——いい？ 訊くよ」

有無を言うより先立って、その問いは遊季の口から言葉となる。もしも俺が待ったをかけることに成功したなら、耳を塞いで一目散に逃げ出したい。遊季の笑顔を怖いと思ったのは、これが初めてだった。同時に、この瞬間目の前にいる相手が遊季なのか紗季なのか以前に、そのどちらにも感じられなかったことなんて。

「じゃあ訊くよ。覚えてる？ 僕が、双色遊季が——」

聞かなければよかった。みつともなく大声を出して走り去れば、あるいはそれも叶えられたかもしれない。

遊季は言った。

謳うように嘆くように苛むように呪うように。絶望の底から沸き上がる声が、

「——僕が、お姉ちゃんを好きだったこと。覚えてる……律？」

心の奥を抉るように、そんなことを極当たり前のことみたいに言葉と成した。

「……困ったことにね、僕は家族として紗季お姉ちゃんが好きだったわけじゃないんだよ。だけどそんなのおかしいでしょ。姉弟なのに、そんなのはおかしいよ。だから僕はきつとお姉ちゃんに憧れるだけだと思った。お姉ちゃんみたいになりたいと、そう願ってるんだらうって思うことにした。でもね、いつまでも嘘は吐けないでしょ。ましてや自分になんて」

だから。

だから双色遊季は。

「認めることにしたんだよ。僕は、お姉ちゃんが好きなんだって」それが禁忌だとしても、間違っではないと信じたから。

「……だけど遅かったんだよ。その頃にはもう遅かった。お姉ちゃんは僕だけのお姉ちゃんじゃなくなった。律がいて、渚がいて、爽架がいて、僕がいる。みんながいる世界がもう出来上がっていた。そしてお姉ちゃんはその世界の中で、律を好きになった」

五人の世界。

五人の箱庭。

少女は少年に恋をして、それを、少年は眺めていた。

「もちろん少しはショックだったけど、それでも嬉しいって思えた。お姉ちゃんが律のことを好きになっちゃっても、僕の想いが余計に届かなくなっちゃっても、嬉しかったんだ。本当だよ。律だったから、良かったって思えたんだよ。律にならお姉ちゃんを盗られてもいいって、思ってた」

なのに――

「律は、最後までお姉ちゃんの想いに答えなかった。最後の最後まで双色紗季のキモチに気付かないで――お姉ちゃんが無理して笑っていることにも気づかずに。ただの一回だって、好きだって一言を言わなかった。僕が言いたくても言えないことを言わなくて、僕が欲

しくても決して手に入れられないものを見送った」

それが。

そのことが決して――

「許せなかった。律、本当のことを言うとな、僕はずっと律を恨んでいたんだよ。この十年間、僕は律を憎み続けた。涙を殺して想いを殺して」

かつん、と音がした。遊季が階段を降りてくる。一步ごとに足音を響かせて。琥珀色の目は寸分のずれもなく絃井律を映して。

俺と同じ段に降りてきた遊季はそこで脚を止めた。呆然と立ち尽くしてさっきまで遊季のいた場所を見上げる俺の耳に顔を寄せて、息の吹きかかる距離に近付いた唇が囁きを洩らす。その声には、およそ感情と呼べる温度が一切欠如していた。

「これはね、復讐なんだよ。ささやかで小さな、僕の復讐」

遊季の顔が離れていく。その言葉で俺は水をかけられたように我を取り戻し、直ぐ隣に立つ遊季に体を向けた。

双色紗季の瞳。双色遊季の瞳。同じイロの輝きが混濁する。

「僕から永遠にお姉ちゃんを奪った律への、復讐。自己満足でしかないのは解ってるけど、だけどそれをしないわけにはいかない。叶わなかったお姉ちゃんへの想いは僕が引き継いで、ずっと生き続ける。律が自分の罪を忘れないように、戒めとして共にあり続けるよ」

俺がなにも言えないのを見て、遊季は満足そうに微笑む。だが、いつもと変わらぬ笑顔の消えた後にあったのはいつもとまるで異なる、寂しさを湛えた悲しい陰り。その裏にあるものを汲み取ろうとする間に、遊季は残りの階段を降り始めた。

「だって仕方ないよ。お姉ちゃんが好きになったのは律なんだから。僕は、その想いを背負うことでお姉ちゃんといっしょにいたいことを願った。たとえば双色紗季はいなくなっても、この想いだけはお姉ちゃんが残した想いだから」

踊り場に立つ。遊季はそこで立ち止まって、こちらを見上げた。

その、泣き出してしまいそうな無表情に、

「おまえは……そんなことでいいのかよ」

答えなんて解っていたのに、それを訊いてしまった。

「そうして紗季の代わりになるなんて、できるはずがないだろ。どんなに懂れても、どれだけ大切に思っているもおまえは遊季なんだ。代われるわけがない。誰かの代用なんて、誰にもできない！」

おまえが俺を恨んでいるならそれで構わない。でもそれじゃあおまえは……双色遊季はこれから先どうなったって救われないだろ！」

「……うるさいよ律」

感情の脈動が声を震わせて、奥歯を噛み締めながら、遊季は言葉をそこで区切る。華奢な双肩が震えていた。拳は固く握られ、歯を食い縛りながら俯く様子はまるで痛みに耐えているようにも見えた。もしもそれが比喻ではないとしたら。遊季を襲う痛みは、俺が与えた物に相違ない。俺がなにもしなかったから。なにも知らなかったから。遊季も紗季も傷付けた。

「解ってるよ！ 解ってるんだよ……！ 僕は何をしたってお姉ちゃんには慣れないし、どんなことがあってもお姉ちゃんはどういもない。そんなの解ってる。でもそれじゃあどうすればいいの……僕は、どうすればいいの……？」

叫び声は、

「僕が好きなのはお姉ちゃんなのに……！ そのお姉ちゃんを奪った律が許せないはずなのに……！ ……なのに、何で。何で僕は、律が——」

「……遊、季」

叫び声は既に泣き声に変わって頬を濡らしていた。

遊季の瞳から透明の雫が溢れ出し、頬を伝う。抑えていた感情がここにきて止めどなく堰を切る。それでもその目は俺を見て、糾弾の眼差しが破綻した偽善を咎めた。

俺は、なにがしたかったんだろう。いつか大切な人の流した涙に触れて、それを悲しいと感じたから守りたいと思った。自分の前だけでは、自分の知る誰にも涙して欲しくないと願ったのに。——そ

の想いを、夢を、願いを結局、自分自身の手で壊してしまった。

何故、遊季は泣いている。

何故、俺はそれを未然に防ぐことができなかった。

なによりも嫌だったはずだ。その瞳から涙が落ちるのだけは見たくないと、そう思っていた。それが自分を守ることではないとしても。どんなことになっても絶対に見失わないと誓った、願いだっただけじゃないのか。

俺はまた。

同じことを繰り返して——同じものを失おうとしている。紗季の心が解らなかったように、遊季の心も解らず、自分を救うことさえできない。

「……解ってるよ。こんなことに意味がないことくらい。誰も救われないって、気付いてるよ。……でもこうしてないと、僕の中のお姉ちゃんがいなくなっちゃうから。だって、律が好きだって気持ち——」

涙を流しながら優しく、いつかの紗季がよく浮かべていたような笑顔を見せて、

「……ずっと、あの頃が続けばよかったのにね。そしたら誰も悲しまなかったのに。僕も、お姉ちゃんと律が好きのまままでいられたのに」

叶わぬ望みを遥か彼方の遠い日の記憶に眺望して、最後、一筋の雫が流れ落ちた。双色遊季のぎこちない、姉によく似た微笑みが告げた。

「……こんなことなら、こんなに悲しいなら——初めから誰も好きにならなきゃよかった」

5／双色紗季（前書き）

今更なんですが、プロローグは必ず書き直すことを宣誓します。

5／双色紗季

／5

同じ顔の姉弟。

双色紗季と双色遊季。

二人には共通点が多過ぎた。

同じ顔立ち。同じ背丈。同じ艶の肌。同じ声。同じ立ち姿。そして同じ色の瞳。性格など内面的な部分を除いてならば、紗季にあって遊季にないものを探すことは難しく、また遊季にあって紗季にないものを探すことも同じく困難だった。しかし内面は差異が目立ち、まるでその在り方は互いが互いを補っているようでもあったと思う。

だから紗季にとって遊季は彼女の反面。

だから遊季にとって紗季は彼の反面。

二人は鏡合わせの半面。

全てが同じ。似ているのではなくて、同じ。

二人が持って生まれた病もまた、同じ。違ったことは二つ。それが発症したタイミングとその先にあった結末。

幼い頃から病に苦しんでいた遊季とは違い、紗季にその症状が現れたのは小学校を卒業してからのことだった。期を待たっていたように。遊季と入れ代わりで紗季が倒れたのが四年前。双色紗季が中学に登校した回数を数えると、その数字は学年との反比例を示す。三年次には遂にそれは月単位なら手の指で足りるものとなり、ある日を境に増えることが決してなくなった。

俺が紗季の最期に立ち会えたのは幸運であって、そして紗季の意思に依るものである。

まともな会話ができる時間など一日の内で数時間もないというの

に。それが最期になると本人は知らなかったのだろう。

“ごめんね、律”

命を繋ぎ止める力のない息と共に紗季の吐き出す声。短い発言の後に咳き込む姿が目には痛い。俺はそれでも紗季から目を逸らしてはいけない気がして、その手を握ることもできないのに、ただベッドの横に立って話を聞いていた。

“わたし、こんなで。みんなに迷惑かけて”

そんなことはないと否定すると、紗季は荒い呼吸もままならないというのに笑顔を浮かべる。

“……まだ少しだけ、心残りだな。遊季のことも、それから、律のこと”

そっと差し出される白い指先。薄いシートでさえも今の紗季には重たいらしく、彼女の手は渾身の力をして震えながらどうにか這い出した。

細く流麗な指が俺の目の下から頬をなぞる。指先は、もう既に冷たかった。というよりもそこには、生きているものの温もりが感じられなかったという方が正しい。

“泣いちゃダメ。せつかく、強くなったのに。律は、弱いんだから、泣いたら、壊れちゃう……よ”

“……紗季”

名前を、呼んだ。

俺にはそうすることしか、できなかった。

“でももう、だいじょうぶ……だよ。律は、きっと……大丈夫だから”

“紗季……ちょっと待て”

手が、ぽとりと落ちる。神経が遮断されたみたいにあっさりと、紐の切れた人形を思わせる呆気なさで落下する手首を俺は急いで掴む。脈動を感じられない。

“ありがとう、律。わたしは、律や、みんなといって……幸せ、でした”

紗季の伝えたかった言葉が何だったのか、俺は上手く聞き取れなかった。あるいは聞こえていたのに認識できなかったかもしれない。今は何よりも優先させる想いだけが頭にあった。

“よく聞け紗季！ 俺はおまえが——”

けれど俺は結局それを口にできなかった。寸前で紗季の笑顔が言葉を遮る。

“—————忘れないで”

そして最期。

誰よりも強く笑っていた少女はそれだけを願って、閉じた目をその後二度と開くことはなかった。——俺が双色紗季という少女に想いを告げることは永遠にない。

：

ワンコールの後に通話ボタンを押す。応答の定型句はどちらも口にできなかった。

『……なによ』

朱空の声は低く憤りを通り越して、もはや呆れの域に達していた。

『……あんたさ、あたしのことバカにしてるわけ？ 何が『また明日』よ』

そう言われるのも無理はない。約束を取り付けておいて、俺はそれを果たすことができなかったのだから。あの河原に向おうという気が全く起きず、今はただ何もかもを投げ捨てて不貞寝してしまいたい気分だった。

雨の下で思う。

今度ばかりはどうにもならない気がする。

遊季は俺にとっての戒め。それは俺自身も解っていたことなのに。いざそれを遊季に言われてしまうと、この様だ。何を言っても所詮口から出る言葉は強がりな虚勢で、そんなもの、弱いだけの心が壊れてしまわないようにと自らを庇う行為でしかなかった。俺は、紗季のように強くはない。

いつか荒んでいた心を救ってくれた少女。

その強さに憧れた。

誰かを助けられる優しさが綺麗だったから、俺はその少女に魅せられた。

けれど今はもう。

彼女はいない。

「悪い……朱空。約束、守れそうにない」

春の終わりに、雨下の呼吸は白い濁りに変わる。

雨が前髪を滴って睫毛に落ちた。目に入る雫を痛いと感じる。感情は沈み切って機能停止寸前だというのに、痛覚はきっちり活動しているようだ。雨に濡れる冷たさも寒さも。辛いと感じることはなくとも、全て痛みになって体を苛んだ。

「ごめんな。本当に……ごめん」

『……バカ』

「俺は約束なんてしちゃいけない人間だったんだよ。他人を優先することなんて、俺にはできない」

——泣いちゃダメ。律は弱いから。

紗季の消えかける笑顔を思い出す。本来なら、それさえ許されないというのに。

『バカ……。バカ、バカバカバカバカバカバカバカバカ——バカア！』

罵声を受け取る感情も今は、何の動揺も発しない。

『なによそれ……！ 勝手なこと言ってんじゃないわよ！ あんたが言ったことでしょ、責任取りなさいよバカ！』

「悪い。……本当に、ごめん」

謝罪。

俺はそれをするしかできない。

言葉で罪が消えるなら、世界は救済に満ちている。もし仮にここがそんな世界だったとしても、俺が背負った罪悪は決して消えることがないけれど。紗季はもういない。贖罪することも謝罪することも叶わないから。今はまだ声の届く朱空には、謝っておきたかった。

『……………待ってたのに』

悲痛に凍える声が、

『ずっと……………待ってたのに……………!』

泣いてるみたいに震えていた。

雨天。ぴしゃりと足元から音がする。立ち止まった俺は信じられない心地で——この瞬間に人間としての機能が蘇ったように——有り得ない現状を想定した。

「朱空……………おまえもしかして」

有り得ないと叫ぶ心は、やはり自分を庇う為なのだろう。

「まだ、そこにいるのか……………?」

『……………』

答える声が、なかった。

ばしゃり。

ズボンの裾が濡れる。

水溜りを踏んで跳ねた雨水が浸食する不快感も無視して通話を切り走り出した。

冗談だろ。雨脚は決して緩やかではない。気の早い夕立を思わせる激しい降雨の下で、今もまだ、そこにいるとしたら。有り得ないことだと、笑い飛ばすことができない。否定しようとすれば逆に鮮明に浮かぶ、雨に濡れた朱空の姿。俺が何年も待たせ続ける少女。雨の霧に隠れて儚く消えかける彼女が、箱庭少女の姿が瞼に浮かぶ。想像を断ち切りたくて走った。

現実の景色にそれを否定して欲しくて。

程なくして河原に辿りつく。

上がった呼吸を整える暇も与えられぬまま、想像が現実に変わる瞬間がそこに待っていた。

朱空末那は傘を差さずに土手に座り、絶えず波紋を生み出す水面に視線を落とす。黒髪が張り付いて横顔は窺うことができない。その小さな姿に歩み寄り、声を掛けたのは俺だった。

「……なんでだよ」

「傘、忘れたのよ。こんなだったら置き傘でもしてればよかったわ」「そんなこと聞いてねえよ」

雨の音だけが沈黙に流れる。

互いに吐き出す息が白い。凍える声に朱空が俺よりも長時間雨の下に晒されていたということを実感して、何を言っているのか解らない。俺がもし傘を持っていたなら、その影に朱空を入れてやることができたのだろうか。そんなことなど罪滅ぼしにもならなければ今更手遅れもいいところだ。なによりも仮定でしかない。現実には差し伸べる傘もなく、同じ様に雨に打たれていることしか俺にはできないのだ。

ややあつて。

「解った気がするのよ。こんなことには意味なんてないんだって。本当は解ってた。十年も前にした約束なんだから、今更ここに来たって会えるはずがないってことぐらい」

そんなことはないと言いたい。だが俺にはそれを否定する権利などなかった。

「でも信じていたいじゃない。待ち続ければ、信じ続ければ願いは叶うんだって。祈り続ければ夢は形になるんだって……！……でも、そうね。だとしてもあたしは間違ってたのかもしれない。もう一度会いたって気持ちを言い訳にして、箱庭から逃げ出す理由にしたあたしの行為は、逃避でしかないから。そんなの、間違ってるよね」

ふらりと立ち上がった朱空の頬を伝っていたのは雨なのかそれ以

外なのか。俺に解るのは今こいつが無理に笑っていることだけだった。

「だけど……二度と会えないと思うから」

雨が少女の体を打つ。

朱空は言葉を区切って笑顔を作り直し、

「いつかと同じ想いを忘れないように、ずっと大切にし続けることが償いだって信じてる」

儚く笑って、瞳を濁す。

雨と見間違えることなど有り得ない。今度こそはつきりと解る――朱空末那は確かに泣いていた。

償いと少女は言った。

ただの一度だけその場所に行けなかったことが罪であると。

雨の中で涙を堪えながら、十年前の面影を待ち続けることが罪滅ぼしだと。

背負う必要のない冤罪を自らに科して。

まただ。

俺が、答えを出さなかったから。

すぐにでも全て話せば解決していたかもしれない。俺があの日少年だと明かせばそれで済んでいたことなのに。何もかもを救おうとして、挙げ句の果てに最優先にしたのが自分だった。そうして誰が救えたのだろう。誰が悲しまずに済んだのだろう。

誰も救えていやしない。

傷が増えただけ。涙が流れただけ。絶望が深まっただけ。思い出が遠くへ離れただけ。

身に余る望みだった。

誰も悲しまない世界なんてない。この狭い箱庭の中にさえ絶望は溢れ返っていて、その全てを俺一人が背負うことなどできるはずがなかったのだ。誰かに悲しんで欲しくない。誰が傷付くを見ると、自分が傷付くから。

――泣いちゃ、ダメ。

……そう言った紗季に、謝らなきゃな。

「……………律？」

ごめん。

俺はそんなに強くない。

紗季みたいに強く笑うことなんて、俺にはできるはずがなかったんだ。

「……………悪い朱空」

互いに雨に濡れた体。

肩を掴んで朱空を強引に引き寄せる。思ったよりも小さい。それでいて暖かい。その温もりがいつかの少女を彷彿させて、最後。

「ちよつとだけ、泣かせてくれ」

辛いのはきつと朱空の方だって解っていたけれど。泣かずにはいられなかった。

救われた誰かがいて、救われなかった誰かがいた。かつて紗季が俺にくれたものはなんだったのだろう。それが解ればきつと、誰も悲しませずに済んでいたのに。せめて手の届く範囲。声の泳ぎきる距離の中でなら誰も涙する必要など、なかった。

俺にはできないことだから憧れただけ。手の届かない美しさが愛しいから、真似をしてみたいと思っただけ。偽善は何も為しえず、痛みになって元の場所に還る。思い上がった報復が、これだというのなら。

本当に、この箱庭に救いはない。

涙は自然と溢れ出す。解ったことが一つ。雨は冷たいのに、涙は熱い。

「……………帰ろう、律」

腕の中で朱空がそう言った。

いつまでもこうしてはいられない。雨も降っているし、このままだと風邪を引いてしまう。朱空が提案したのは、勿論そんな理由からではないだろうが。確かに帰るべきだ。泣くのなら家の中がいい。俺が初めて悲しさを知って泣いたのは、あの家だから。

家まで送ると進言すると、朱空は首を横に振って拒否した。どう
いうわけか左右に一度ずつ振れた首が元の位置に戻ることはなく、
俺は朱空の顔の右側面と向き合う形になった。横目がちらりところ
ちを見、

「いい。あたしは、家に帰っても誰もいないから」

帰ろうと言ったのはおまえじゃないか。そう反論しようとして、

「律の家がいい」

朱空は、そんなとんでもないことを言いやがった。

「俺の家にだって誰もいねえよ」

「……………がいる、もん」

俯きながら小さく首を振って。

雨に飲まれて消えそうな声が。

「……………律が、いるもん」

6／蒼い朝

／1

赤の河原に響く幼い声。

落日を振り返ることもせず、その五人は河原を走る。何が楽しかったのかなんて、今は覚えていない。ただ想い出に残留しているのは、この一瞬がいつまでも続けばいい、そして明日が早くこればいい、そんな想いだった。とにかく毎日が楽しくて、不安など微塵もない日々の面影。

聞こえてくるのは少年少女の笑い声。

それに混じって一つだけ、泣いている声が聞こえた。

気付いたのはその少年一人だけ。

四人が先に行くのも気に留めず、少年は立ち止まって声の発信源を探す。首を左右前後に振り回していると、ほどなくしてそれは見付かった。声は河原の土手。その上から聞こえていた。

少年が見つけたのは、おそらく少女。

膝を抱えて、自分の腕の中に顔を埋めているせいではっきりとは解らなかったが、少年が綺麗だと感じたその姿はきつと、少女で間違いないだろう。艶やかな黒髪も。今は朱色の日差しを浴びる白い肌も。純粹にキレイだと、美しいと感じることができたから。

本当は彼女が泣いていたからだとか、そんなことが理由ではなかったのかもしれない。

俺はただ、その輝きに触れてみたいと願っただけだったと今は思う。

いつだってそうだ。

他人を優先することなんてできた例がない。

俺が大切にしてきたのはどんなときも自分。誰かに泣かれるのが嫌だったのも、悲しんで欲しくなかったのも全て自分の為。他人の泣き声は辛い。誰かの悲しみは苦しい。大切な人の不幸は痛い。――その心を、どうして偽ったりしたのだろう。

ある少女の正義に憧れた。

自分も同じモノを志したいと願った。

だから俺は――

“どうしたの？”

――少しでもその輝きに近付きたくて、正義を装い彼女に声を掛けた。

その表情を覚えている。

泣き疲れて赤くなり始めた目も、涙に濡れた頬も。この瞬間全ては茜色に染められて。

少女は、何故かとても安堵したような表情をしていた。欣喜を抱いて、まるで誰かに救われたように幸せそうに。世界を見詰める瞳に取り込まれそうになりながら、その瞬間を忘れない為に一度瞼を閉じた。

手を差し出して、少女の体を引き上げる。

夢の終わり。

少年は先を行った友達の待つ場所に駆けて行く。一秒でも早く。逸早くそこに辿り着きたかった。少女の手を引いて走り出す。慌しくも穏やかで賑やかで儂い、それは交錯する想いが紡いだ一律の物語。

――――思い出す世界の色は、いつも夕焼けだった。

＊

「朝だぞ律。いい加減に起きろ」

今朝の俺が起き抜けに耳にしたのは、そんな風に不機嫌そうな字面でありながらも酷く淡々とした口調のモーニングコールだった。念のために説明しておくが、俺が自ら設定を行ったわけではない。どうかそれ以前に、聞こえたのは間違いなく肉声だ。

「……蒼か」

「無論、蒼爽架だ」

本人の太鼓判まで付いているのだから間違いないだろう。俺の前にいるこの女は蒼爽架で他言はなし。

「なんでおまえがここにいる。俺の家だぞ」

見渡すという熟語が適応されるとは思えない程度の面積を確認する。こちら間違いないしに我が家。だとしたらどうだ。俺の目がかしくなったのでないならば、現状は朝の自宅に蒼がいるということになる。

状況を把握できないのは俺がまだ寝惚けているからではないと思う。むしろ寝惚けているからこそ頭が上手く機能せず冷静に対処できている感じだ。これで起動したての脳でも理解できる程度の単純明快な蒼の所在理由を説明してもらえたら言うことなしなんだが。

そのことを要望してみると、蒼は至極当然のごとく胸を張って（タンクトップなんて着ていやがるから……その、なんというか非常に目のやり場に困る）澄まし顔をして答えた。

「今日は剣道部の朝練が休みなんだ。とはいえ体には習慣が染み付いてしまっていてな。早く目が覚めたんでランニングをしていたんだ。そしたらこのアパートが目に残ったから、そうだ、今日は律といっしょに登校しよう、と思いついた次第だ」

すらすら述べる。

「まるで幼馴染みたいじゃねえか」

「まさに幼馴染みじゃないのか、私達は」

それもそうだけどさ。

「あ、そうだ律。二十分ほど前に一度起こしたのだがなかなか起きなかったので、その間にシャワーを借りたぞ」

「水道代を請求する」

「ケチ臭いことを言うな。ほんの十分ほどだ。それくらい体で払ってやる」

「いらん」

適当な会話は意識の覚醒に有効であるらしい。蒼との会話で俺は徐々に今が飲み込め始めていた。色々と言いたいことや尋ねたいことはあるのだが今はまずなによりも先に要求したい。

「蒼」

「なんだ？」

「近い離れろ。あっちの壁までだ」

「……どうして」

「どうしてもだ」

幼馴染みといっても、朝は女子に近付かれたくない理由が男には存在するのだ。さらにまだもう一つほど頼みたいことがある。

とりあえずは。

「なにか羽織ってくれ」

タンクトップ

その格好は刺激が強過ぎる。

俺は昔からひよっとしたら蒼には露出狂の素質があるのではないかと思っていた。それも本人が無自覚の飛び切り質の悪い奴だ。聞けばランニングとやらもこの格好でしていたと言うではないか。真夏ならまだしも今の時季は少々寒くはないだろ。

閑話休題。

つまり何が言いたいのかと言えばそれは、服を着てくれとの俺の注文を蒼が素直に受け入れて制服姿にコスチュームチェンジを果たしてくれたことに、俺が心底驚いたということだった。

蒼が着替えている間に解ったこと。現在時刻は午前六時前。蒼の話から遡ると、初めにこいつが俺を起こそうとしたのが五時三十分。物凄い早起きだ。だというのにこの女はブラウスに袖を通しながら

こんなことを言うのである。

「さっきので起きなければ、竹刀で一撃入れようと思ってた」

「……それ、逆効果」

目覚めるどころか、永眠してしまうだろうなそれはきっと。蒼はもう少し自分の剣の腕を自覚するべきだと思う。いや、実は自覚しているのか。全国覇者ともなると峰打ちみたいな技も使えるのかもしれない。

実際に訊いてみると、

「なにを言ってるんだ？ そんなのできるはずがないだろ。いいか律、剣術とは相手を殺すことを前提に扱う戦術だ。勿論そこには大義名分や誇り、名誉に尊厳といった自らの威信が付与するのだけだな。一刀を振るうことは即ち死の覚悟を決めるということ。殺し殺される環境に身を置くことを互いが了承して初めてそれは果たし合いになり、勝利敗北の概念が生まれるんだ。そして、敵に勝利するとは相手の剣に乗った覚悟を殺すこと。そこには無論のこと命も含まれている。峰打ちなんて冒涇じゃないか。それが許されるのは殺戮だけだ。他方が他方を無意義に殺すときの躊躇こそがそれに該当するが私は」

中略。

「ちなみに私独自の必殺技もあるんだ。試してみないか律？ ……ふふふ。今回の自信作なんだ。並大抵の相手なら二度と剣を取ろうとは思わなくなるだろうなっ」

「遠慮しときます」

なんで楽しそうなの、こいつ。

「そうか……仕方ない。うん。今度渚にでも練習に付き合っ貰おう。あいつなら大丈夫だろう」

「生徒会長はそんな業務まで引き受けていたのか。……………今度からもう少し敬意を持って接しよう」

ご愁傷様、九ノ瀬。おまえの墓前に缶ジュースくらいなら供えてやらんこともないぞ。俺は目を開けたまま黙祷を捧げた。

さてと。

蒼が胸のリボンを結び終えたタイミングを見て、俺は話を本題へと移行することを決めた。端的にまずは聞いておかねければならない。場合によっては通報も必要になるかもしれない質問を俺が尋ねる。

「おまえがここに至る経緯は解った。それでだ、蒼爽架。……おまえどうやって家に入ってきたんだ？」

どうしてこんな質問を幼馴染み二人にしなければならんのだ。このアパートのセキュリティは随分とぞんざいであるらしい。いつか自分で防犯は整えるべきかと本気で考えた。

「窓から入ってきたのか？」

ならば鉄格子を填めよう。

「誰が。そんなこそ泥みたいなのはしないよ。失礼だなあ、もう。……堂々と正面から入らせて貰ったよ」

「おまえ、鍵を壊したのか!？」

「……………」長い沈黙を経て、「怒るぞ、律」

梅雨前の湿気染みたじととした目が拗ねたように俺を睨む。おいおい。どこで頬を膨らせるなんて女の子な技を覚えたんだ蒼爽架。「自分が開けっ放しにしていたんじゃないか。……いくら私でも、緊急時でない限り人の家の鍵を壊したりはしないよ」

「あ、いや、ごめんなさい。俺が不用心でしかも無愛想でした。申し訳ないです」

普段の蒼はどこへやら。

こうも急に汐らしくなられたら俺も態度を改めざるを得ないではない。竹刀で軽く叩かれた方がましだ。そっちの方が蒼らしいし俺だって素直なリアクションで応対できる。などとすっきりしない心境で膨れる蒼を宥めると、

「うん。解ったならそれでいい。以後気を付けるように」

音速でそこにいつも通りの蒼爽架が帰還した。盗人猛々しい。

「なるほど、律には今みたいなのが効くのか。心得た。次回から大

いに活用させて貰おう」

二度と騙されてたまるか。勝手なメモを取るな。

こくりこくり頷いている蒼に、なんだかバカにされているみたいな気分で気に入らない。どうも俺の調子が若干狂ってきているようだ。寝起きというには既に意識は十分に覚醒を終えている。リズムが乱されるのは、あまり心地のいいもんじゃない。平静に努めて、できる限り普段の朝を再現しよう。

毎朝のことを思い出して、自分のすべきことを発見する。腹が減っていた。朝食を作ろう。

「あー、いいって座ってろ律。朝ごはんなら私が作ってやる。ついでにお弁当も用意するから座ってろ」

「……」

切羽詰まったみたいな勢いで制止がかかった。何事だ、これは。新手の詐欺かなにかなのか。いつから蒼は奉仕の精神なんて上等なものを獲得していたんだ。

「疲れているんだろ。見れば解る」

呆れてそう言った蒼が、今朝で一番俺の知っている蒼爽架らしい顔をしていた。

「昨日、なにかあったのか？」

6／ごめんね。バイバイ

／2

何もなかった日常生活をだらだら語り描写するのも気力の無駄遣いにしかないだろうから、心の不毛を回避するためにも今日一日のことは慎んで割愛しようと思う。午前の授業では幾度となく睡魔の誘惑に屈しかけた俺も放課後になれば流石に安定した状態の意識を保つことができていた。

教室を出ようとして脚を止める。が、やはり外に出て廊下の壁に凭れた。

携帯をポケットから取り出してコール。不本意にも顔を見るのが憚られたその人物の名前はアドレス帳の一番頭に記されていた。選択。数回の呼び出し音を聴いてからももう少ししてから掛け直すべきかと考え始めたとき、

『もしもし?』

ご丁寧なことに、朱空はお決まりの文句で通話に応じてくれた。

『何の用なのよ。話があるなら直接すればいいじゃない』

そうなんだが。なんとも如何とし難い感情がとぐろを巻いて中枢神経に居座り、俺にこの行動を強要してきたのだ。勘弁してくれ。

『……ん、まあ、いいけどさ。で、なんの用? 冒頭によっては即通話を切ることもあるから出だしには気を付けなさいよ』

「か——」

『切っていい?』

「せめて一文節くらいは聞けよ!」

機械音声に変換された笑い声がけられらと携帯電話越しに聞こえてくる。年上を馬鹿にするのはよくない。昨今の高一女子には先輩

を敬う意思が付属されていないのだろうか。こいつ、俺にタメ口だし呼び捨てしてるし。

『あっはは。律をからかうのって楽しいよね』

「……覚えてろよ、朱空」

朱空の趣味が、俺に不利益をもたらすもの定まっていなければいいと願う。俺は罵倒を快く受けとるタフなメンタルなど持っていないし、聞き流し続ける寛大な心も培われてやしない。

『解った。覚えとく』

そんな素直に切り返されると困る。自分の発言に羞恥が芽生える瞬間だった。

一つ下の相手に電話でいいようにあしらわれている俺がいた。

『で、話って?』

いきなり仕切り直すから驚きだ。朱空にとっては戯れは戯れで、本題は本題。その区別が一線で完全につけられているのだ。主導権を握られているのにはどうも調子が狂うが、指摘するのもまた時間を無駄にするだけなので流れに従う。端的な用件を必要最低限に満たないほどの短文で告げた。

「鍵閉めないで出てっただろ、おまえ」

『うん』

不法侵入を許容させられる理由を作った張本人はたった二つの音で自分を済ませ、釈明を始める。

『だってしょうがないでしょ。あんたの部屋の鍵って一つしかないでしょ。持って帰るわけにはいかないじゃない。だから許してよ』
郵便受けに入れておくとか、手はいくらでもあったんじゃないのか。

『うっさいわねえ！ 鍵閉めるなんて、そこまで頭回らないわよ、疲れてたんだから！ このバカ!』

「逆ギレかよ!」

しかもついさっき自分が言ったことが言い訳だって認めてるようなもんだろ、その発言は。

朱空の咆哮が続く。

『いいじゃない鍵ぐらい気にしなくても！ 男ならケチケチしないの。ていうか盗られて困るものなんてないでしょ、あんたには』

今朝方命を奪われかけたのだが。生命の危機とはこんな風に一人の油断や妥協が招くのだ。それも気紛れに他人に降りかかってくるのだから飛び切り性質が悪い。

ふと前を歩いていった二人組を目で追って、俺は自分の現在地が学校の校舎内で、時間帯が放課後であることを思い出す。帰る気配もなく通話する同級生に訝しみの視線を送って歩き去って行く女子二人の姿が角を折って消えたのを見送ると、急激にこの場から離れたい衝動に駆られた。

つい声を大にして話をしてしまった気がする。公共の場で……穴があつたら入りたいとはきつと今みたいな心境なのだろう。顔で茶を沸かすという諺があるが、俺は現在それに似た状態だ。かなり恥ずかしい。

周囲を密かに確認する。俺に向けられる衆目はこのとき幸いにもほとんどなかった。少し意識過剰になっていたかもしれない。しかし一度気になってしまつてしまつてなかなか気分を転換できないのが人間の性だ。俺も例外ではないので、この場合は辞すことを選ばせてもらうとする。

ではさて、どこに行くべきか。人が寄り付かないところがいい。それでいて静かな場所。条件から検索をかけてヒットする学内のスポットは一ヶ所だけだ。言うまでもない。そこは生徒だけでなく教師も滅多に現れない名所。

生徒会室に行こう。九ノ瀬ならいても気にならないだろうしな。目的地を定めて意識を携帯に回帰させる。長らく放っておいた通話は朱空の怒声から再開された。

『ねえ、さっきから聞いているの？』

比較的大人し目。

『その程度のことδειいちいち電話掛けてこないでよね。まあでも、

今日は特別に許してあげるわ。あたしもあんたに言いたいことがあったし。直接会う手間が省けたわ』

緩やかに低温化したその声が告げる。

『言ってなかったけどね、あたし学校止めることにしたんだ』

呼吸も同然に自然と、今日の天気を訪ねられたから答えたような軽い口調がそれを言って、俺はあわゆく聞き流してしまうところだった。

『なんていうかね、嫌になったのよ全部。……何をするにしても今のあたしにとってそれは自分から逃げてることにはしかないから、何をやってダメ。あたしは自分の世界から逃げ続けてるだけだから、そんなんじゃないかなんにも成し得ないって解った。だからね、帰ろうと思うんだ。自分のいるべき世界に。あたしの居場所は、あの箱にはなのよ』

壁に周囲を封鎖されて世界から断絶された空間。中身は空っぽで空虚な造り物みたいな世界、箱庭。

俺にはまだこのとき、朱空の言っていることの意味が解らないでいた。

『前にした話だけどね、少し訂正があるって気付いた。あたしの世界は囲われていて、外と繋がっているのは空だけだと思ってたけど——本当はそれも虚構だって解ったわ。あたしがいたのは閉じられた箱だったのよ。それまで空だと思ってたものは、実は天井で、あたしは何一つ外の世界を知らなかった。……逃げられるはずなんてなかったのよ。いくら屋敷から出てきたって、あたしが辿ってきた空は箱庭の天井の延長なんだから。この世界で、律とあたしが見るものは違うもののなの。初めから同じ場所にいなかった。……いられるはずがなかった』

何一つとして自分は世界を知っていなかったと、少女は語る。同じ空。どれだけの距離を隔てようとも、それが有る限り同じ世界にいられると信じて毎日見上げていた空。その空が偽物であると言った彼女。

箱庭少女は、その世界に一人だけ。

箱の中の閉じた世界で一人だけ。

脱け出したとしても心がまだ残留しているから逃げ切ず、どこに行ったって自身の世界からは逃れられない。それは心に描く風景がいつも個人の原点として存在するから。

けれど、だからといって簡単に認めていいのか。

短い間でしかなかったとしても、俺が朱空と過ごした時間は全て虚構でしかなかったと認められるのか。同じものを見て、同じものを聞いて、同じものに触れて、同じものを感じた。その全てが異なっていたなんて、あるはずがない。

君は確かにここにいたのだから。――俺が、その証明になれるなら。

「今どこだ？」

歩く速度が知らず上がる。返事のないわずかな空白にさえもどこかしさを感じて、

「どこにいるんだよ朱空……！」

今度は焦燥した声で同じ質問を繰り返す。

『……生徒会室』

俺の口調に鬼気迫る勢いがあつたのか、ぼそりとした朱空の声が質問の答えを呟いた。都合のいいことに目標地点の変更は必要がない。元より生徒会室へ向けていた歩み。急げばすぐに到着できる。

『ねえ……律。律はさ、昔見た夢をいつまでも覚えていられる？』

「……何の話だよ」

こんなときにまで。歩調が競歩のそれに変わる。

『あたしが初めて見た夢は、とても幸福な夢だったわ。十年くらい前に見た、夕焼けの夢。目が覚めてから今日まで、一日だって忘れたことなんてない。今のあたしはその夢から始まった』

競歩から遂に疾走へ。旧校舎への渡り廊下を駆け抜ける。ここからなら既に生徒会室までは三分とかからない。一度だけ大きく呼吸して、腕を振って走り出した。

『これが二度目。二度目の夢。あたしの世界は止まってる。こうしてあたしが夢を見ている間、箱庭はずっと明けない夜を続けてる。……これは、あたしの夢なのよ。箱庭の中で眠ってるあたしが夢想した世界。箱庭の外に憧れて明けない夜を過ごし続ける箱庭少女の見る――遠く叶うはずのない幸福な夢。この夢の中ではね、あたしは』

一息で階段を駆け上がる。踊り場で躓き転びかけた。傾ぐ姿勢を、壁に手を突くことでどうにか持ち直す。なんだって、よりにもよって最上階になんてあるんだよ生徒会室は……！

『この夢の中だとあたしは一人じゃないって思えた』

朱空の声などもう聞こえていなかった。耳を貸している暇があれば足を動かしていた。今ここで朱空を失えば、また俺は大切なものをなくすことを繰り返してしまう。それだけは嫌だった。ただ速く少しでも大きな歩幅で。一刻も早くそこに辿り着きたい一心で走る。最上階に辿り着く。ここから生徒会室までは廊下一本。全力で走れば十秒もかからない。

迷うことなど何もなかった。疲労を訴える足を叱咤して最後のスパートに全力を注ぎ込む。

『ありがとう律。あんたのお陰で、今度の夢もそこそこ楽しかったよ』

走ってきた勢いをそのまま利用して扉を開ける。

大音声が静まり返る廊下を突き抜けていき、残響を残して消えた。果たして。

生徒会室には誰も、いなかった。

「あの……馬鹿野郎……！」

瞬時に状況を理解する。こんなときにつまらない嘘なんて吐きやがって。どうして最後まで俺をからかうようなことをしやがるんだよ。こんなときくらい、素直に演出してくれてもいいんじゃないかよ。

呼吸が一瞬途切れた。柔軟もしないで無茶苦茶な走り方をしてき

た代償にわずかな気の緩みで膝が震える。たたらを踏んで三步前進し、机に手をついた。その風圧で舞い上がる一枚の用紙。ひらりと舞って足元に落ちたそれを不意に目で追い、そこに書かれているメッセージを発見した。

——『ごめんね。バイバイ』。

そんな、言葉。

絶対に言わない癖に。

机の上に他の用紙はない。置かれていたのはその一枚だけであつたらしい。わざわざこんなものを書き残して、朱空は出て行った。俺に自分が生徒会室にいることを教えれば必ず、俺がここにやってくる予測はできただろう。故意に擦れ違いになるように。これだけを残して朱空はそうそうに立ち去っていたのか。

けれど、まだそんなに遠くまでは行けていないはずだ。

このメッセージが書かれたのはおそらく放課後のついさっき。朱空は実際にここにいた。すぐに追いかければ間に合う。思考と実行のラグはほとんどなかった。部屋を飛び出す。行く先は定かではないが今はただ走り出すことだけが頭にあった。急がなければ、永遠にまたそれは失われてしまうと心が叫んでいて一心不乱に。

しかし。

「つと——なにしてんだよ律。危ねえな、そんなに急いでどうしたんだ？」

扉を開いたそこで、不在していた生徒会長九ノ瀬渚に鉢合わせした。

6／強い女の子

／3

「どうしたよ、そんな急いで。息上がってるぞ」

廊下を走行する生徒を咎める教師のような目をして、呆れた風に九ノ瀬がそんなことを言った。切羽詰る俺とは違って落ち着き払った生徒会長が出口を塞ぐ。

「どいてくれ九ノ瀬。ちょっと急ぎの用がある」

言うが早い俺は九ノ瀬の脇を通り抜ける。

通り抜ける、つもりだったのだが。

「まー待ってって。俺もおまえに話があるんだよ、丁度よかったな」
否応に力で部屋の中に体を押し込む。九ノ瀬が涼しい顔をしてそれをしているのにも関わらず、俺がその力に逆らえなかったのは脚の疲労のせいだろうか。……そうであつたら助かるし、そうであつて欲しい。

「急いでるんだよ。また今度にしてくれ」

逆らえないなら受け流す。肩を押す九ノ瀬の手を掴んで払い退けた。

一歩で加速をつけようと右足の踏み込みに体重を傾けた次の瞬間。今度は言葉ではなく行動が俺の動きを制した。九ノ瀬のそれはとてもない実力行使。九ノ瀬は俺が二歩目を踏み出す一瞬前に扉を閉め、生徒会室唯一の出入り口を封鎖する。通す通さないの意思は明らかに後者で、それが意図するところは明白。

「いいから、聞けって言ってんだよ。てめえに拒否権はねえよ律」

今度は掌が鳩尾に喰い込んだ。苦悶の呻きが漏れるのを抑え切れず、それどころか吐き気さえ催してしまう。そこでようやく悟った。

九ノ瀬は本気で、俺に対して憤っている。面にこそ出していないが間違いない。

「……解ったよ。手短に頼む」

言っても聞かないのは目に見えていたので話だけなら聞いてやらないこともない。九ノ瀬が何に対して憤怒の情を抱いているのかは知らないが、俺が黙って聞いているだけならさほど時間は取らないはずだ。一秒も惜しいところだが、今は譲歩するのが最善の選択だろう。

間近で向き合っているのも気が引けるので俺が机の位置にまで下がった。九ノ瀬は依然として扉に背中を預けており、その距離は数字にして二メートルほどになる。

「なに、別に大したことじゃないんだけどな」

まばたきもしないで、平静を装う目が、

「今日さ、遊季が休んでんだよ。おまえ、理由解らないか？」

否定を許さない圧力を伴ってその問いを発した。

遊季が欠席しているという事実については初耳だ。しかし残念ながら俺は九ノ瀬の質問に答えられないわけでは、ない。遊季が学校に來ない理由足り得るに十分な事象になら、心当たりがあり過ぎるくらいにある。昨日のことを一日もしないで忘れてしまえるほど、俺の頭は便利な構造をしていない。

思い出さないように意識していたのに。どうしても忘却に至れなかった。

九ノ瀬がゆっくりと動き出す。俺が取った距離を一步一步着実に埋めながら歩く。

「答えろよ律。知ってんのか、知らねえのか」

今から殴り合いでも始めようとしているように、一触即発の空気を纏って九ノ瀬が凄む。

その形相に、物言わず怒髪する瞳に正直少しだけ慄いた。九ノ瀬が本気になることなど滅多にない。俺でさえもそう何度も見た記憶がない真剣な表情をした九ノ瀬が返事を待っている。俺は、十年来

の幼馴染みの剣幕を前にして、

「悪いな。知らねえよ何も」

口にした途端。

衝撃が左の頬を貫いた。

背中を強く打ちつける。耐え切れず吹き飛ばされた体は窓の下
の壁に衝突することで止まった。受身を取ることでもできないでま
とみに半身を打った痛みがじりじりと痺れに変わり、すぐに立ち上
がれない。俺はせめてもの抵抗に、拳を振り下ろしたままの体勢で
こちらを見下ろす九ノ瀬を睨み上げる。

「……どういふつもりだよ、てめえ」

苦い、鉄の味。舌の上に血が滲んでいるようだ。

「鉄拳制裁なんて、生徒会長のしていることじゃねえだろ」

膝を立てて、それを杖代わりに体を起こす。窓に凭れることでど
うにか立ち上がった。

目線を同じ位置に保ち、

「どういふつもりかって訊いてんだよ」

軽蔑の眼差し。九ノ瀬は、自分とは違うものを見下す目で俺を睨
みつけていた。

その目が気に入らず、拳を固める。殴られたままで収まりがつか
ないということもあったが何よりも、九ノ瀬の目が気に入らない。
罪人を責めるようなその目が――今の俺に向けられるに相応しいと、
認めてしまった自分が何よりも気に喰わなかったから。

「なんとか、いいやがれ……!」

渾身の力で拳を放つ。が、俺の満身を嘲笑うようにそれはあっさ
りと、封じられた。

「……どういふつもりかって?」

二の腕を下から押さえつけられていた。九ノ瀬の腕が俺の腕を押
し上げている。射程範囲そのものを狭められ、これでは腕が触れな
い。背中直ぐ後ろには壁。間隔を取ることは出来ないで必然、
懐に入ってきた九ノ瀬を攻撃する有効な動作は脚を使ったものだけ

に限定される。

ならばと膝を突き上げる。俺の膝蹴りは見事に九ノ瀬の腹部に食い込んだがしかし、体勢の不利と近過ぎる距離の二重苦が威力のほとんどを殺していて何のダメージにもなっていない。それどころか片足立ちで不安定になった体は絶好の的。九ノ瀬がそれを見逃すわけがなかった。

足払い。脛に激痛。払うだけで十分だというのに、九ノ瀬は爪先で脛の側面を思い切り叩く。円を描くように綺麗に旋回して再び落ちる視界。今度は顔面から床に落下させられた。

「どういうつもりかなんて……そんなことおまえが一番よく解ってるんじゃないのかよ！」

いつ爆発してもおかしくなかった九ノ瀬の激情が音を立てて破裂した。今まで押さえていたのだろうが遠慮なしに。叫ぶ。怒髪が天を衝くように。

頬の痛みに耐えながら奥歯を噛み締める。苦味が増していた。歯を喰い縛ればそれだけ沸くように滲み出る血。飲み下すことも吐き出すこともできずに口の中に溜まっていく。九ノ瀬の手が胸ぐらを掴んで俺の体を持ち上げた。

「おまえは俺が……俺達がなにも知らないと思ってるのかよ。おまえのことも遊季のことも、何一つ気付いてないって思ってるのかよ！」

襟を両手で締め上げられる。上半身が吊られて呼吸が辛い。

九ノ瀬の叫びは続く。言葉は鉛のように重くて、一つ一つが停滞しては体の中に沈み込んでいくみたいだ。俺にはそのいづれも否定することが叶わないから。

「知らないわけないだろ！ 気付かないはずがねえだろ！ 遊季が無理に笑ってることも、おまえが紗季に責任を感じて苦しんでることも全部！ でもおまえ達は強いようとしてたから、俺達は黙ってみてるしかなかったんだ。おまえの痛みが解るから、なにもいえなかった！」

「……解る、かよ」

血が喉を降りていく。その不快感に吐き気を覚えながら、

「おまえに俺の気持ち解るかよ……！」

月並みの台詞だが、それしか言えなかった。幸せになって欲しいと願う想いが、逆に救いたい誰かを傷付ける苦しみなど。どんな謝罪も永遠に届かず残留する痛みなど。知っているはずがない。

三度目の衝撃。九ノ瀬が拳を振るう。襟首を片手で掴まれているから、痛みはそのまま伝わった。脳が揺さぶられる。視界が激震する中で俺は、自分の頬を打ち抜いた弾丸が次の一撃に備えてゆらりと掲げられる様子を他人事みたいに見ていた。

「てめえはなんでそうなんだよ……。なんでいつも塞ぎ込んでるんだよ。おまえが辛いときのために、俺達がいるんじゃないのかよ！」

言葉と共に炸裂する拳。頬骨を砕くつもりなのだろうか。まるで容赦がない。九ノ瀬の左手が俺を解放する気配も全く感じられなかった。

「おまえの痛みが解らないなんて、そんなわけないだろ。俺達だって同じものを失ったんだよ。俺達だって紗季には二度と会えないんだよ！」

殴られる痛みにも、衝撃が頭の中をぐちゃぐちゃにする感じにも慣れ始めた。もちろん痛いし気持ち悪い。だけどそんなことより今はもっと、九ノ瀬の言葉の方がずっと傷を深くしていくようだった。「……ああ、解らないかもしれない。ひよっとしたら俺達を感じてるものは全然別なのかもしれない……。けど、だったら尚更一人で引き摺ってるなよ……！」

一人で、引き摺って。そうかもしれない。……きっと、その通りだ。

だって俺は、全ての悲しみを背負うことを望んだから。誰よりも深い絶望の泥を担うことを選んだのだから。——それこそが、俺の目指した偽善。悲しみを背負うことで、痛みを肩代わりすることで

他人を救おうという勝手な押し付け。

嗚呼そうか。根本から間違っていたんだ。

俺は紗季に憧れただけで、目指していたものは別のところにあった。……誰も救えなくて当然。俺は誰一人救おうとしてなどいなかったのだから。

「おまえがそんなだから――」

一段と大きく腕を引いて、

「――遊季だっていつまで経ってもまだ、紗季を捜し続けてんだろうが！」

今までで一番の威力を持った拳。叫びが鼓膜を破らんばかりに張り上げられる。

「あいつはまだ紗季を割り切れてないんだよ。子供みたいに泣きながら、一生見つからない背中を探してる。あいつは弱いから、簡単に受け入れられなかった。それでも紗季が願ったのは、あいつを含む俺達全員の笑顔だったから。遊季は取り繕って笑ってるんだよ。いつかその偽物が、紗季のそれになると信じて、ずっと……」

遊季の笑顔の訳。紗季に憧れて、同じものになりたいと願った代償。

「遊季は、紗季の代わりになろうとしてる。自分と、おまえのために。代われるわけなんてないのに。あいつも自分で解ってるはずなのに――！」

思い出す。姉に憧れていたと話した遊季の顔。決して叶わないと解っているながらその絶望に立ち向かって傷付き続けるその姿。

「……おまえしかいないんだよ。おまえにしか、遊季を救ってやれる奴はいないんだよ！」

両手で襟を持ち上げて、ずいと、引き寄せられた。九ノ瀬の目の奥に涙が溜まっているように見えたのは、多分気のせいだろう。泣きたいのは俺の方だ。散々殴られてそろそろ痛覚がおかしくなる寸前だったのに。

「……ふざけんな」

気に入らないのは、まだ認めようとしないうちに自分自身だというのに。これまでのお返しとばかりに、隙だらけの九ノ瀬の顔面に拳をぶつける。

「何で俺なんだよ……！　俺は紗季みたいに強くねえよ！　紗季みたいに、誰かを救うことなんてできないんだよ！　だから俺は――」
もう全部捨てて、逃げ出そうとしていた。遊季と向き合うことは、そのまま紗季と向き合うことだったからこそ投げ出して。目を背ければ楽になれると思った。その思考を、断ち切るように走る衝撃。九ノ瀬が直ぐ様殴り返してきた。

「理由なんかねえよ！　ただおまえじゃなきゃ駄目だって言っただよ！」

「俺だったからこんなことになったんだろ！　俺がいなけりゃこんなことにならなかったはずだ！」

遊季は言った。紗季を永遠に奪ったのが俺であると。

互いに言葉と拳で傷付け合いながら、それでも語調を緩めることはやはり互いにしなかった。

「俺は紗季みたいになれない！　憧れだけじゃ同じものを背負うことができない！　俺には遊季を救ってやることなんてできないんだよ！」

「決め付けてんじゃねえよ！　おまえは紗季とは違うから、だから今の遊季を救えるんだろ！　迷子みたいに紗季の影を追いかけるあいつの手を引いてやれるのは、前に進ませてやれるのは紗季とは違う誰かなんだよ！」

「だったら俺じゃなくていいだろ！　九ノ瀬、おまえでも蒼でもいいはずだ！　結局おまえ達はそうやって俺に押し付けてるだけじゃねえのかよ！」

「おまえ、だったから……！」

最後。

力の限り振り絞った拳が交錯する。
届いたのは、九ノ瀬の叫びだった。

「――紗季が好きになったのはおまえだったから！ おまえじゃないと、いけないんだよ……！」

それが、幕を下ろす。肩を項垂れさせ、九ノ瀬はようやく俺を解放した。

「……頼むよ律。おまえしかいねえんだ。俺達じゃ駄目なんだよ……」

ずるずると背中を這わせて座り込んだ俺が見たのは、両方の目から涙を溢している幼馴染みの、そのどうしようもない悲愴を湛えた表情だった。

「おまえしか、遊季を助けてやれないんだ、律」

＊

「ずいぶんと派手にやらかしたみたいだな」

蒼爽架が生徒会室に現れたのは九ノ瀬が出て行った後に一呼吸を置いてからだだった。蒼は開けた扉に凭れかかっている。俺はといえば体の節々に残る痛みが引くのを待って、未だに九ノ瀬と殴りあった窓際に座り込んだまま。蒼を見上げるようにして会話に応じる。

「悪い、しばらくは立てそうにない。つうか座ってるのも辛いくらいだ。このままでもいいか？」

「構わない。私が一方的に話すから律はその間に休んでいろ」

ポニーテールがぴよこりと跳ねた。蒼は俺の正面の椅子を引き腰を下ろす。脚を組むな、際どい。

「しかし酷い顔をしているな。渚も本気だったわけだ」

殴るといえば顔の喧嘩だったからな。あちこち腫れたり痣になっているのだろうか。どうせやりあうなら腹を狙ってくればよかったのに。……まあ、俺も他人のことは言えないのだが。俺よりも前に立つことの多い生徒会長の方が損害は大きいだろうから、俺は文句を言える立場ではない。

すっ、と上体を屈めて顔を寄せる。いつぞやの心眼の件と同じくして蒼が顔を覗き込んできた。

「本当に酷い顔だな。——今にも泣きそうな顔をしている」

蒼はそんなことを言って、頬に手を這わせてくる。痛い。顔を顰めると蒼は悪びれる風もなく顔を離して、窓の外に一番星を探すみたいな顔をして唐突に言った。

「律は気付いていなかったと思うが、渚は紗季のことが好きだったんだ。……気付いてたのは多分私くらいだと思うぞ」

それは、本当に知らなかった。九ノ瀬は一度だってそんな素振りを見せたことがなかったと思うが。

——紗季が好きになったのはおまえだったから。鮮明に、そう叫んだ九ノ瀬の顔を思い出した。——おまえじゃないと、いけないんだよ。……なるほど道理で、九ノ瀬は泣いていたわけだ。そんな言葉、言いたくなかったはずだから。結局俺には、何一つ解っちゃいなかった。

「紗季は律が好きだったみたいだからな。渚は、結局想いを告げることはしなかったよ。黙っておくことを選んだんだ。意外だろう？

あの九ノ瀬渚が、自分の想いよりも自分の居場所を選んだなんて俺の気持ち解ると言った幼馴染み。永遠に伝えられない想いを残した、その傷痕。確かに九ノ瀬は俺と同じ傷を負っていた。同情してなどいない。純粹に、自分が許せないでいた。俺と、同じ様に。

「律、私は小さい頃『強い女の子』に憧れていたんだ」

「もう十分強いじゃねえか」

「違うんだよ。そんなことじゃない。こう見えて私は小さい頃よく

苛められていたんだ。……意外か？ ま、真面目に頷くな！ ったく、こんなか弱い女の子を捕まえて。……それでだ、苛められて泣いていた私のところにはいつも一人の男の子が駆け付けてくれた。もう大丈夫だよ、って言うってくれるだけで安心できたんだ。いつも思った。私もそうなりたいて。私もいつか、泣いている誰かの涙を拭うことができるように――誰かの悲しみを共に背負うことができるようになりたい。だって……強さなんて、そんなものだらう律」

蒼の表情が綻ぶ。それは本当に自然に。

「――だから辛いなら泣けばいいよ。おまえが一人で苦しいなら、私達がいる。泣きたいときは泣いていいんだよ。渚も私も、その為にいるんだから。もう一人で抱え込むな」

日溜まりみたいな暖かさで、優しく笑った彼女の言葉でかつてを思い出す。――律のとなりには、いつも、みんながいるから。

「律が一人で立てないときは支えてやる。一人で歩けないときは背中を押してやる。一人で悲しいときは傍にいてやる。泣きたいなら隣にいて、励ましてやる。だから今は少しだけ、泣いてもいいよ律」

「……何でだよ」

俺は、自分勝手に押し付けるだけなのに。

「だって友達だろ私達は。手の届く範囲にいる誰もが幸せであって欲しい。それはおまえの言葉だ。そしてここからは私の言葉だから心して聞け。――幸せの代償は、私もいっしょに担ってやる」

蒼の手が俺へと伸びる。差し伸べられた光の導のようなそれを掴もうとして、腕が上がらないことに気が付く。体には相当ガタがきているらしい。散々殴りあったのだからグロッキーなのは解るが、それでも休ませてなどやれない。叱咤激励。無理矢理腕を持ち上げた。

それでいい、と満足気に笑って蒼は俺の手首を引っ捕らえる。力任せに引き起こすものだから肩の関節が外れるんじゃないかと思っただくらいだ。しかもいかんせん勢いに余る。引っ張り上げられた俺はそのまま倒れ込むようにして、半ば蒼に抱き抱えられる状態にな

った。

「悪い、まだもうちょっと動けそうにない」

「解った。それじゃ少し休ませてやる。……でも少しだけだぞ。あんまりこうしていると恥ずかしい」

「ああ、ありがとう蒼」

心からの感謝の意思。少しの間でいい。今だけはこうしていたいと思った。少なくとも――涙が止まるまでは、面と向かうことなんてできそうにない。

6／二人の色

／4

陽が傾き始めて久しい夕刻の終わりに、俺はその場所に辿り着いた。まだ夕方と呼べる時間で助かったと思う。流石に夜になってからこんな場所に来たいなんて思わない。そんな悪ふざけは小学生で卒業したつもりだ。

並び立つ墓石が西陽に照らされて赤く光沢を放つ。つまるところ俺は現在墓地なんぞにやってきていた。

平日の夕暮れと言うこともあり、またシーズンの見ても人氣がほとんど皆無なのは当然だろう。虫の声もなければ風の音もない。夜の前の静寂が広がっていた。そして、俺はその後ろ姿に目を止める。この場に居合わせるのは二人だけ。

俺と、双色遊季だった。

「本当はね、僕は寂しかったただけなんだ。律を恨むことなんて意味がないんだってことぐらい解ってた」

声をかけるまでもなく俺が後ろにいることを遊季が察する。姉、双色紗季の墓石を前に屈み込んで、こちらを振り返らない。

「だけど誰かのせいにしないと耐えられなかったんだ……。僕は、お姉ちゃんを失ったことをどうしても認めたくなかったから。せめて律にはずっと覚えていて欲しいと思った。お姉ちゃんが好きになった律にだけは、お姉ちゃんのことを忘れて欲しくなかった」

だから。

「僕は、双色紗季になろうと思った。律がいつまでもお姉ちゃん存在を忘れないように。ささやかな復讐のつもりで、呪いにでもなった気分で。紗季お姉ちゃんになることを、僕は選んだ。お姉ちゃん

んの想いが生き続けられるように——律を好きになるように、律に好きになってももらえるように。それだけがお姉ちゃんの報われる道だと思ったから」

淡々と溢す。

かざりと遊季の髪が揺れた。紗季になろうとした、そのまだ彼女には届かない程度の長髪。

「だけど、ダメなんだよね、それじゃあ。僕はお姉ちゃんじゃないし、お姉ちゃんにはなれない。その気持ちを背負うことで少しは近付けるかと思ってた。でもそれは逆効果で、僕の中の双色紗季は軽薄になっていくだけだった。……だって、おかしいよね。でも仕方ないんだ本当のことだから」

一呼吸の間を置いて、

「お姉ちゃんのキモチだと思ってた。律を好きなのは紗季お姉ちゃんだって。なのに、なのにどうして僕は——」

その続きを、遊季は言わなかった。ゆっくりと立ち上がる。落日を背にして振り返った遊季は笑っていて、その表情がいつかの少女と重なった。琥珀色の瞳。二人に共通した色。鏡写しであって異ならない、姉弟の繋がり。

「……ごめんね。はじめから八つ当たりだったんだよ、こんなのは。本当に忘れようとしたのは僕の方だったんだ。それが怖かった。僕の中でお姉ちゃんがなくなっちゃったら、僕は一人ぼっちだから。同じ想いを持つことでお姉ちゃんになれると思ってたけれど、ダメだった。そのことが余計に僕からお姉ちゃんを遠ざけて、余計に、怖くなった」

誰かが誰かの代わりになんてなることはできない。遊季は遊季であって紗季ではないのだから、紗季に近付けば近付くほどに遠くなるのは当然だった。彼女に憧れて彼女になろうとしてもそれは、憧憬が作り出した偽りの自分。誰かの贋作で、空虚で無価値な偶像でしかない。けれどその在り方を誰が否定できるだろう。自分にはない強さが綺麗だった。美しいと思ったから。手が届かないと解って

いても懂れた。

叶わない夢だとしても、それを追いかける過程は決して価値のないことじゃないはずだから。走り続ければいつか、答えは必ず手に入ると信じ続けていたから。見失いかけていたけれど、歪な理想を持ち続けた。

何度破綻してもまた、始まりの記憶を礎にして立ち上げれるなら。立ち止まっても良かったんだ。

そのことを俺は、教えて貰った。

もう十分に休んだから——そろそろまた、走り出すときだ。

「俺は、紗季が好きだったよ。本当にそれだけは間違いなく。けれど、確かにそれは過去のことなんだ。今の俺がまだあの日と同じ想いを持っているかっていったら、そんなことはない」

どんなものも時間の流れで色褪せ、風化していく。なくならないものなんてない。だからこそ、その一瞬を消してしまわないよう大事にするんだ。俺の後悔は紗季に想いを伝えられなかったこと。俺を好きだと言ってくれた彼女への答えを置き去りにしてきたことが——ただ一つだけの心残り。

今また同じように紗季を好きになることはきつとできない。それが、後悔。間違いだった。

「でも悔やんだってしかたのないことだとも思ってる。俺にできることはいつまでもそれを引き摺って生きていくんじゃないかって、大切だった想い出を背負って前に進むことなんだ。紗季が好きだった記憶も。紗季を失った悲しみも全部。事実だから、目を背けず前に進む。そうすることが紗季に対してできる、せめてもの償いだと俺は信じてる」

いつまでも同じ場所にはいられない。廻り廻ってまた会えるなら、仮にそのことを望むなら、走り続けなくてはそれが訪れることはない。始まりの場所に還るのは、またいつか遠い日。輪廻の果てであろうと邂逅が許されるなら走り続けよう。いつか必ず戻ってくるために。そうして改めて拾っていこう。蔑ろにしてきた想いや傷痕を

一つ一つ大切に。

その道標が今。

確かな足跡を刻んで、歩き出す。

「律は、強いね。僕はそんな風に考えられないよ。すぐ誰かに依存して手を引いてもらうことばかり考えちゃうんだ。……嗚呼、そっか。僕はお姉ちゃんになりたかったんじゃないんだ。お姉ちゃんがまだ僕の中にいるんだって思うことを、抛り所に使っていたかっただけなんだね」

双色遊季にとって双色紗季は自らの反面。

足りないものを補う、鏡写しの自分自身。

遊季は確かに紗季に依存していた部分があっただろう。その遊季が紗季になろうとしたのは、紗季のことを忘れなくなかったからと言った。だけど、そう言った遊季本人が一番よく解っていたはずだ。遊季では紗季の代わりなど勤まるはずがない。他の誰であってもそれは同じだが、遊季では特に。遊季と紗季は反面同士なのだから。紗季が遊季を補い、遊季が紗季を補う。その在り方を、一人で体現することなんてできない。

「……でも」

遊季の声が震えている。琥珀色の瞳が溢れ出しそんな涙を塞き止め、拳を固く握り、遊季は叫ぶ。

「どうすればいいのか解らないよ！ お姉ちゃんがいないと、僕はダメなんだよ……！　なのに……なのに……！　僕の中からお姉ちゃんはどうぞん薄れていっちゃうんだよ……！　嫌なのに。大好きなのに。忘れたくないのに。……だから、僕は律に自分と同じことを強要してた。戒めなんて言って、本当はただ律に縋ってただけだった。……ごめんね、我儘言っつて。でも僕は、そうしないと僕は――」

破綻してしまうから。

そんなこと、謝られるようなことじゃない。

「……怖くて怖くて。震えて泣きたくて。紗季お姉ちゃんの想いと

面影で律を縛ってた。……だけど律も、お姉ちゃんのこと、忘れかけてたから。ねえ律本当はね、あの日、河原には僕もいたんだよ。お姉ちゃんの月命日のあの日の夜にさ」

その告白には、正直驚いた。だがその裏腹で納得のいつている自分もいる。

一週間前。俺が河原で朱空と会った日。

星空の下で騒いでいた姿を、遊季が見ていたとしたら。あの投書の異常性にも理解が利く。朱空末那に近づくな。そんな悪辣なメッセージを寄越してまで俺と朱空を遠ざけようとした理由が、俺が紗季よりも朱空を優先したのだと思ったというものなら納得がいく。

そう、原因は俺だ。

被害者面なんてしてはならない。俺は、誰にとっても加害者なんだ。

遊季から紗季という抛り所を奪ったのも俺であつたなら、朱空から世界を奪ったのも俺。全部、償えることじゃなくて、挙句の果てには逃げ出そうとまでした。実際、蒼や九ノ瀬がいなければ迷わず逃避を選んでいただろう。

だがそれじゃあいけない。

罪を犯したのなら相応の何かで償わないと。それが、自己満足でも構わない。

「俺が、抛り所になる」

遊季の瞳を見据えて、

「紗季の代わりになんてなれないけど、それでも、俺がおまえの支えになるから。だから、もう紗季の背中を追いかけるのは止めろ。認めなくちゃいけないんだ。紗季は、前にはいない。後ろにしかないんだ。ちゃんと前を見て、いっしょに行こう」

「……解らないよ。見えないよ何も。どこに行けばいいのかなんて、解らないよ」

「だったら俺が連れてってやる。どこに辿り着くかなんて解らないけど、そこには必ず俺がいてやる」

それに、蒼と九ノ瀬も。同じ場所でまた、笑っていただけるから。

「僕は、弱いよ。お姉ちゃんみたいに、みんなを笑わせて上げられないよ」

「気にするな。俺達はおまえがそこにいればそれでいいよ」

「直ぐに泣くよ。すぐに逸れちゃうよ。すぐに迷子になって、みんなに迷惑掛けてばっかりだよ」

「だったらもう手を離すな。ずっといっしょにいればいい。——おまえの弱さも、何もかも全部含めて。俺達は双色遊季が好きだから、誰も見捨てたりしない」

「僕は……いいの、律？　僕は、お姉ちゃんじゃないよ。律が悲しいとき、励まして上げられないよ？」

「知ってる。おまえは遊季だ。だから、大切なんだよ」

「……律、僕は。僕は……」

頬を伝う、その雫。

飛び散る光の雫。夕陽が反射して煌く涙。

「傍にいたいよ……！　みんなといっしょにいたいよ！　……ごめん。ごめんね、律。こんな、我儘ばかりの僕なのに。いっばい、苦しませちゃったのに……。それでも、傍にいてくれるなら——」

子供のように泣きじゃくる顔は、憑き物が落ちたようで偽るものも装うものもない。これが双色遊季の弱さ。その弱さも愛しいと思う。仲のいい姉弟。いつか二人が同じ顔で笑えるように。紗季のように、強く笑っていただけるまで。ここにいて、隣で同じときを過ごしたい。

右の瞳から流れていた涙が、左からも溢れ出す。

感情の顕れ。双色遊季が溜め込んでいたものが落ちていく。それは大切な思い出であったり、未練であったり、憧憬だったり、恋情だったりするかもしれない。ただ一つ解ることは、その涙がきつと遊季を強くしてくれるだろうということ。

風に木々がざわめく声を上げ、

「……ありがとう、律」

世界の喧騒の中で、その声はまるで、遊季ではないみたいだった。涙を流しながら微笑むその姿が想い出の景色と重なる。夕焼け。世界はもう直ぐ夜。宵闇に沈む橙色を従え、それはまるで季節が移り変わるように自然と表れた。足取りを確かに、小さな体が歩み寄る。

「ごめんね。ずっと苦しませちゃって」

「……………遊、季？」

確信のない声で名前を呼ぶと、か細い指が唇に触れた。何も言わなくていい、そんな意思表示。涙の滴る片目を閉じて、残る琥珀色が言葉ではなく理屈ではなく、静かに語る。

「安心した。強くなったんだね、律。これでもう一人でだってどこにでも行けるね」

強く優しく微笑んで。その顔が、ある少年が憧れた少女の表情を湛える。

「初めて会ったとき。律は凄く歪だった。触れてしまったら壊れてしまいそうなくらい、脆くて弱いのに。意地っ張りで、強がり。道も解らないのに先走るような男の子だった。一人でどこかに行ってしまうとするばかりで、先を急ぐばかりで」

でも今は、それでいいんだよ。

涙に濡れた笑顔。

「立ち止まらないで。躓くこともあると思うけど、転んでも隣にはみんながいるから。爽架も渚も、遊季もいるよ。迷わなくてもいいから、前に進んで。みんな——真っ直ぐなあなたが好きだから」

夢の中にいるようだと思った。それぐらい、その笑顔は綺麗だったから。語る琥珀色はやはり彼女のイロ。眩しくて憧れた輝きはその瞬間、確かに。

そこにいるのは、彼女と同じものだった。

もう二度と、その貌を見ることはないと思っていた。胸の中にしまつて、未練を断ち切ったつもりでいたというのに。いざそれを前にすることで、どこか自分の中にあつた何かが弾ける。

思い出す、最後の光景。

紗季が最後に伝えようとしてくれた言葉。形にならなかったそれが、どうしても思い出せなかった紗季の意思が不意に脳裏に過ぎる。「優し過ぎるあなたが壊れてしまわないように、辛いときはここにいますから思い出して」

強く微笑む少女の姿が瞼の裏に浮かんだ。

「――――忘れないで」

強く肩を寄せる。俺がもしも今泣いているのなら、そんな顔は見られなくなかった。

「忘れないで。わたしがここにいたこと。わたしが、律を好きだったこと。ずっと覚えていて」

そうすれば必ずまた、会えるから。

想いは廻り廻って同じ場所に還る。二つの季節は循環し、世界を彩る。

風が吹き止み、俺は二つの瞳を見据える。けれど、そこにあるのは瞬間前にあった色とは違っていて、

「……大丈夫だから。僕はもう、大丈夫だよ」

夢から覚めたように――双色遊季が言った。

「僕はもう大丈夫。お姉ちゃんみたいに強くはないけど、きっと。

―――ありがとう。大好きだよ、律」

6／箱庭の夢

／5

例えば大切なものを大切にし続けることと、それを放棄すること。人にとって困難で苦しい選択はどっちなのだろう。ある一つの信念や理念を持ち続けること。或いは信じ続けてきた理想や夢を捨て去ること。それはどちらも必要なことで、同じくらいに難しいことだと思う。

けれど選ばなければならなかったら。

好きだったものを好きでい続けること。大切な物を大切に思い続けること。自分が自分で在り続けることは実はとても難しく、て勇氣のいることだ。だから人は挫折して、妥協して変わっていく。色褪せ、風化し、それでも自分であろうとするから傷つく。

俺はどうだろう。

双色紗季という少女が好きだった少年。自分にはない強さに憧れて、それを綺麗だと感じた心が彼にはまだ微かでも残っているだろうか。それを問われれば胸を張って肯定することはできない。

だから俺は、十年間も一つの約束を信じ続けた彼女を素直に尊いと思う。

今でもまだいつかの夕焼けを原風景に、忘れずに大切に思い続ける少女。

「……………なにしてんのよ」

深淵な闇が漂う深夜。……………というか既に現在時刻は早朝といった方が正しいかもしれない。空はまだ暗いし月も星も出てはいるが、遠くでは既に太陽が昇り始めている。と、いうことは。俺がここに来てから、かれこれ四分の一日ほどの時間が経過しようとしている

わけだ。

だがどうやらその甲斐はあったらしい。

「よ、待ってたぜ朱空」

場所は河原の土手。

朱空末那の指定座席に座って、俺はその少女が現れるのを待っていた。途中で何時間か眠っていたかもしれないが。

「待ってたじゃないわよ！」

声を張り上げて、眉を怒らせ大股で歩いてくる。

「いつまでそんなことしてるのかと思ったら、夜中ずっと座り込んでやって……風邪でも引いたらどうするつもりよこのバカ！」

なんだ、ばれてたのか。

「信じられない……。なんでそうまでするの。あたしが、ここにくる保証なんてないのに。なんで『待ってた』なんて言えるのよ」

「おまえだって同じじゃねえかよ。おまえもずっと待ってるんだろ、ここで」

それに比べれば一晩程度など待ったということすらおこがましい。

「……あたしとあんたは違うでしょ」

「そうだな、俺達は違う。おまえは待たされたんだろうけど、俺は自分で勝手に待ってたんだからな」

「あたしは、そういうことを言ってるんじゃないのよ」

「そうかい。まあ、何でもいいだろ。おまえは実際にここに来た。待ってた俺は報われたんだからそれでいいよ。ありがとう、朱空。まだ、ここにいてくれて。いなくならないでいてくれて」

心からの感謝を告げる。よかった。手遅れじゃない。

朱空はここにいろし、俺は素直にそのことを嬉しいと思える。救えないなんて、諦めるのは早かった。紗季の言うとおり、俺はまだ大丈夫。だから動けるなら、走り続けるなら精々貫いてみせよう。こんな俺の隣にいてくれる人の為に。

「なにを言い出すのよあんたは……！」

朱空は、街灯の下で赤くなっていた。

「べ、別にあんたに会うために来たわけじゃないわよ！ 習慣だったから、散歩気分です立ち寄っただけよ！」

何だって構わない。

「朱空、おまえ言ってたよな。昔の夢を覚えていられるかって。はつきり言って、俺は覚えてられない。多分、目が覚めてから三十分もしない内に忘れちゃう。だから、おまえは凄いよ」

大切なものをずっと大切にしていられるってことは、とても強いことだから。始まりの想いを持ち続けることは苦しい。汚れない理想は自分を傷付ける。その痛みに耐えてきた少女が、朱空末那だった。

朱空は自分が変わらないと言った。

自分の世界は囲われた箱庭。閉じた箱の中で永遠に夜を繰り返す世界。終わりのない夢。明けない夜。平凡に憧れた少女の求めた幸福な日常。

かつてこの場所で泣いていた少女がいた。

儚くて眩しい、消えてしまいうような少女の姿を見て、俺は咄嗟に手を伸ばした。別に特別な感情があったわけではない。その姿が、夕風に映える少女があまりに綺麗だったから触れてみたいと思っただけ。そこには打算も目的もなく、これを一目惚れと呼ぶのならそれも間違いではない。

——たすけて。

声が聞こえた気がした。本当に少女がそれと言ったのかは解らない。

——誰か、たすけてよ。

だけど確かに泣き声は聞こえていた。顔を上げずに肩を震わせる少女が同じ言葉を繰り返す。少年は……俺はその姿に戸惑ってすぐには声を掛けられなかった。まるですぐそこにいるのに、二人の間には壁があるように思えて。境界線が世界を隔てているような錯覚が臆病にした。けれど、泣いている少女は確かに救済を望んでいると、何度も反復される言葉で解ったから。

——どうしたの？

意を決してそう尋ねた。だから先に声を掛けたのは本当の意味で少女の方だったのかもしれない。俺は自分とは違う世界に少女がいるみたいに感じて声が出せなかった。

——怖い。

顔を上げずに少女は言った。

——一人ぼっちが怖い。あたしは、どこにいていいのか解らないのが怖い。

怖い怖いと震える小さな姿。

——あたしはここににいるのに、誰も見てくれない。話も聞いてもらえないし、遊んでももらえない。一人は怖いよ。せっかく、外に出てきたのに……どこにも、あたしの居場所が見つからないよ……。

俺にはそのとき、少女が何を言っているのかよく解らなかった。

自分の居場所が解らない。それが怖い。そればかり何度も泣きながら口にする少女に何と声を掛けたいだろう。どうすれば顔を上げてくれるのか、それを考えて。

——大丈夫だよ。

思い出した。自分が泣くのを止めた日のことを。自分を救ってくれたその言葉を真似る。

——ここににいるから。君は一人じゃないから。

言ってから恥ずかしくなる。自分の言葉ではないそれを口にすることには若干の抵抗と羞恥が含まれていた。

——なんていうか……よく解らないけど、一人ぼっちなんてことはねえよ。

言いたいことはあるのに上手く言葉にして伝えられない。歯痒い気持ちで俺は言った。

——いっしょに行こうぜ。一人なんだったら俺達がいやるから、だからさ、もう泣くなよ。

果たして、少女はゆっくりと顔を上げた。一体どれくらいの間そうしていたのか、大きな瞳は赤く充血しかかっている。だというの

に、俺は涙で濡れて赤くなった目の少女がどうしようもなく綺麗に見えた。夕焼けに赤く染められる肌も、涙で濁ることもない黒い瞳も。この瞬間を忘れたくなかった。いつまでも続けばいいと願った。

——本当に？

小さく鼻を吸る。

——本当に、いっしょにいてくれるの？

その表情を覚えている。

泣き疲れて赤くなり始めた目も、涙に濡れた頬も。この瞬間全ては茜色に染められて。

少女は、何故かとても安堵したような表情をしていた。欣喜を抱いて、まるで誰かに救われたように幸せそう。世界を見詰める瞳に取り込まれそうになりながら、その瞬間を忘れない為に一度瞼を閉じた。

手を差し出して、少女の体を引き上げる。行こう、みんなが待つ場所に。

手を繋いで走った。少年は少女の手を握り、夕暮れに染まった河原の土手を駆けていく。確かに通じ合う体温は、こうして二人が同じ場所にいることの証明だった。

今、この世界は二人だけのもの。

黄昏を吹き抜ける風も、流れていく薄い雲も、赤い空を突き抜ける白い飛行機雲も追いついて。一番星よりも明るく、夕焼けよりも綺麗で淡い、それは一瞬の輝き。全てが相まって、今を尊いと感じてしまったから。

走る早さで涙は、乾くと思っていた。そうすれば彼女が笑ってくれると信じた。手を握る力を強くすると、応えるように少女もさらに強い力で握り返してくれる。

もしも願いが叶うなら、

どうか——この一瞬が永遠でありますように。

この願いが、二人同じであることを夕風に望んだ。

「朱空おまえ、俺達は違う世界にいるんだって言ってたよな。そう

かもしれない。結局人間なんてみんな自分の世界に閉じ籠って生きているんだ。壁で囲って蓋をして。平和な箱庭の完成だ」

世はなべてこともなし。平和で平穏な自分一人の世界。専用の箱庭。

「でもさ、そんなんじゃないだろ。閉鎖するだけで誰とも関わらないなんて孤独は、悲しいだけだ。そんなものは平和でも平穏でもなくてただの虚無じゃねえか」

「……なにが、言いたいのよ」

「出てこいよ、朱空。おまえも箱庭から」

「それができるなら苦労しないのよ。あたしはあんたとは違う。あたしは自分の箱庭から出るのが怖いよ！ 外の世界を知らないから、大き過ぎる世界に置き去りにされるのが怖い……！」

憤っているのか、怯えているのか。朱空は、まるであの日を再生するように怖いと連呼する。違うことはその表情が泣き顔ではないこと。強がって憤慨する少女の表情。朱空は腕で宙を薙ぎ、叫ぶように怒声を響かせる。

「あたしは、何にもできないのよ……！ 箱庭から逃げ出すこともできないのに、その癖、また外に出たいなんて思ってた。本当は約束なんて気にしてなかった。それがあるから世界でも孤独じゃないってしがみついていただけ。また会いたいって思いながら諦めてた。……十年前の日があたしの夢の始まり。それが全てなの。二度目の夢は、これでお仕舞い。お願い、律。今ならまだ、あたしはこの夢を大切に思えるから……目覚めた後も想い出して好きなままでいられるから。だからもう、これ以上は止めてよ。ずっとここにいたいなんて、思わせないでよ……！」

朱空は、強がりの仮面を外そうとしなかった。泣きたいのを我慢しているのが容易に見て取れる。肩は小刻みに振動を続け、けれどその顔を俯くことなくこちらを見据えている。

その真っ直ぐな瞳に決意した。

「断る。おまえの夢でも、もうそこには色んなものを巻き込んでる

んだよ。勝手に終わらせるな」

そう言って俺は、有無を言わず朱空の手を取った。突然の出来事に動揺しているのは明らか。面喰らったように口をぽかんと開く朱空を引っ張って、土手を駆け降りる。さながらその姿は、あの夕凧にいたいつかの少年と少女のよう。

「離しなさいよ！　もういいから！　全部諦めるから……！　あたしは箱庭の中で一人だけでいい！　あんたなんかにいっしょにいて欲しくないのよ……！」

廻る夢。

この今は朱空にとって夢だという。叶うはずもない、求め焦がれて憧れる幸福な平穏の世界。箱庭少女は眠っている。寂しい箱庭の中で一人、夜が明けるのを待って。

「お願いだから……！　これ以上止めてよ！　……嫌だよ。これ以上はもう嫌だよ……！　こんな、こんな……なくなっちゃうのに。夢の続きは見れないから、完結させないとダメなのに……！　まだ、終わって欲しくないって。もっと夢^{ユメ}にいたいって。思っちゃうから……！」

必死に振りほどこうと腕を暴れさせる朱空。それを離さないように強く握り締める。スピードを落とさず全力で走った。

「——律と、いっしょにいたいって、思っちゃうから……！」

夢の終わりが悲しいなら、終わらせなければいい。俺はただ、彼女が見るこの夢がせめて人並みに幸福であって欲しいと願うから、こんな形で終わらせるわけにはいかなかった。

そうだ、終わらせたくない。また明日と言った俺を待ち続けてくれた少女の十年間が、その長い夢が報われず、目覚めた後に消える泡沫に変わってしまう前に言っておかないと。彼女の箱庭が——孤独な夢で汚されないように。せめて目が覚めるまでは。

「思えばいいじゃねえか。これが夢だって言うなら、目が覚めたと

きそこにいてやる。おまえを一人にしないから。絶対だ。箱庭の中から、おまえを連れ出しに行く」

「……無理だよ、そんなの」

「無理じゃねえよ」

「無理だよ……！ あたしは、律とは違うのよ！ あたしにはこの箱庭しかないの！」

頑なに否定する癖に、朱空はもうその手を離そうとはしていないかった。その繋がりが、イマ二人が同じ場所にいる証。通じ合う温もりは本物だから、これが夢であるはずなんてない。箱庭少女の見る夢が、その願いが確かにここにあったから、

「——ごめんな、ずっと待たせてて」

俺は、ようやくその言葉を口にした。

「え……？」

手を引いて走っている以上、前に行くのは俺である。だから朱空がどのような顔をしてそれを受け止めたのかは解らない。声色から察するに啞然としているだろう。それでいいし、その方がいい。直ぐに意味を気取られてはこの先が気恥ずかしくなる。

急停止して平地で立ち止まる。少々ハードな運動に上がる呼吸、加速する鼓動。吐き出す息の白さに驚いた。

水面が黄金に似た朝焼けに輝く。黎明の空の下で振り返る。俺は呼吸を整えて、向き合った朱空に言う。もう迷いなどなかった。

「一人きりだなんてことはないんだよ。おまえはもう、ここにいるんだ。それが夢だというなら、俺が覚まさせてやる。——夢の終わったその先で、同じ現実で迎えてやる」

だからもう、

「泣かなくていいんだよ、朱空。おまえは一人じゃないから」

朝日に落ちる大粒の雫。それを拾ってやることができるのは、今この場では俺以外にはいない。なら俺がそれをしないと。ずっと夢を見ていた箱庭少女が——幻想の夜に彷徨わないように、明ける朝を笑って迎えられるように——。

「……いいの？ 信じても。もう、あたしは待てないよ」

「もう十分に待っただろ。終わりだよ。永遠の夢なんてない」

空はとくに晴れていた。黄金が地平線から世界を染め上げる。

その光に後押しされているように歩き出した。

小さな歩幅はやがて大きくなっていき、黒髪が靡くほどにその体が加速する。

「……ないんだから」

たん、と踏み切った。

翻るから体。俺は瞬間的に何が起こったのか理解が遅れるまま、こめかみに衝撃を覚える。横殴りの暴風雨みたいな回し蹴りが直撃していた。なんのつもりだこの野郎。ここはそんな場面じゃねえだろ。そう思いながら踏み止まり、流星群みたいに閃く苦情を投げつけようとして、

「——絶対……ありがとうだなんて言って上げないんだから……！」

その、暁よりもずっと綺麗な箱庭少女の笑顔に、何も言えず閉口して苦笑する俺がいた。

／えびろーぐ

／after

一つ、この歳になって学ぶことがあった。それは人によっては一生知らないまま人生を終える者もいれば、円の面積を覚えるよりも早く学習する者だっているだろう。俺にとってその瞬間が訪れたのは十六の春だったということだ。

結論。徹夜とかはしない方がいい。これ重要。

頭がくらくらする。河原の一件の後で家に帰った頃には既に新聞配達も済まされ、ニュース番組なんかは出勤通学する誰かを見送る星座占いなんかを流していやがった。上ずった声のアナウンサーが最下位の星座を告げる頃、俺の意識は現実から乖離される寸前にあったのだが。

「おはよー！ 律ー！」

二日酔いみたいな頭に響く高らかな声と共に、施錠を忘れていた部屋の扉が勢いよく開かれる。

双色遊季は、眩しい眩しい健康的なのに俺には毒にしかならない朝の日差しを引き連れてそこにいた。なにをしている。早く閉める溶ける。吸血鬼が日光を嫌う気持ちに少しだけ解った気がした。

「うっわぁ、すっごく眠そうだね。大丈夫？」

「……大丈夫に見えるのか？」

「うん。見えるよ、だって律だもん」

訳解らねえよ。

彼方に旅立とうとする意識をどうにか繋ぎ止め、時刻を確認。登校するにはまだ大分早い。運動部の朝練が始まろうとする時間帯だ。この分だと後一時間くらいの仮眠は取れるのだが、早朝の来訪者は

それを許してくれそうにない。

「朝ごはんまだだよな？ それじゃあ僕が作ってあげるよ。僕もまだ食べてないから、いっしょに食べよう」

「頼む。じつとしてくれ。そして黙っててくれ。……………朝飯、俺が作るから」

決定。

本日の授業、半分は睡眠。

そんな訳で簡易な朝食を作った俺は、乱雑に皿に盛り付けたそれを味わうこともなく胃袋に流し込み、ものの数分で食事を終えた。やばい、喰ったら余計に眠い。しかも体の関節という関節が痛む。このコンディションを満身創痍と言わずしてなんと言う。休んでもいいんじゃないのか、これ。

「ダメだよ」

「何故だ……」

「だって律は僕といっしょに学校に行くんだからっ」
「……………」

不思議と一蹴してやる気にはなれなかったから、仕方ない、今朝も元気に登校するでしょう。

……ふざけんな。

弁当まで作っている体力は流石に残されていなかったのも、朝食に使用した食器類もそのまま放置。気が付けばデッドラインが迫っていた。休む暇もなく靴を履いて外に出る。久しぶりに朝日。目を開けてるのが非常に辛い。欠伸も止まらない。……俺、歩きながら寝ちまうんじゃないかな。

「ねえ、律」

頭上を旋回する睡魔の笑い声に混じって楽しそうな遊季の声。

「手、繋いで行こっか」

それを言ったときの遊季の笑った顔の方が、睡魔なんかよりずっと小悪魔染みていた。

踊るように舞うように、くるくる回って前に出る。

「ね？ ほら」

「……遠慮しとくよ」

昨日の今日で早速誰かの手を借りるのもどうだろう。こんな状態だって通学路くらい一人で歩ける。居眠り歩行で事故を起こさない自信はないのだが。……それでも安心した。遊季も、誰かの手を引くことができるようになったのだな、と。

そんな、自分の保護者みたいな感想に苦笑する俺だった。

……意地でも辿り着いてやる。と、決意から数分後のこと。高校に到達した俺は椅子に座るなり電池が切れたようにぼたりと机に突っ伏した。驚くほど簡単に意識が落ちていく。闇に溶ける感覚。放課後までに起きられたら上出来だ。

「そんなわけで、午前の授業のノートを貸してくれ」

朝のショートホームルームから四時限まですっ飛ばして、目覚めは昼休みに入ってからのことになる。ここまで熟睡したのは初めてのことだ。授業を担当する教師が誰一人俺を起こさなかったのには感謝するばかりである。

死者の蘇生を目撃したかのような表情で駆け寄ってきた蒼に、俺はそれを依頼した。

「断る」

が、何故かあっさりと拒絶される始末。

「なんでだよ」

「私が授業中頑張って映していたノートを、どうして居眠りなんてしていた奴に貸さなくてはいけないんだ。それではまるで、私の努力がとても軽いもののようにじゃないか。そんなのは嫌だ」

もったもなことを仰る。

「頼む、この通りだ。ノートを貸してください。お願いします」

「急に畏まられても困るんだけどな。……まあいいよ、貸してやら

んこともない」

そつと差し出されるノート四冊。貸さないと言っていた割りに、初めからそれらを持っていた蒼はやっぱり俺の知っている蒼だ。これだからこいつといえるのは止められない。

札を言つてありがたくノートを受け取ろうとすると、しかし蒼の手からそれを抜き取ることができなかった。いくら引いても抜けない。どういうつもりだ。

「実は今度の日曜、偶然にも私のスケジュールはぼっかりと開いているんだ」

「それが？」

「……だから、その」

ぐい、とノートを引く。蒼は顔を背けるようにして、

「どこかに、遊びにいかないか？」

こいつにしては珍しく聞き取りづらい声で、

「お弁当、私がつっていくから」

その言葉で、俺の日曜の予定は決定されるのであった。だって仕方ないだろう。こう見えてもこの侍少女は料理が滅茶苦茶上手いのだ。それはもう、高級料亭並みに。強い女の子は、剣の腕だけでなく料理の腕も立つ。無敵じゃねえか。

蒼に借りたノートを写す作業は生徒会室で行うことにした。

当然そこには九ノ瀬もいて、頬に絆創膏なんかを貼っている。昨日この場所で殴り合ってから今まで、まだ口を利いていない。子供染みた喧嘩の雰囲気にも悪くないが、それはやはり俺達らしくはないだろうと思う。同じことを考えたのか、話題を先に持ち出したのは九ノ瀬だった。

「おまえ、いい加減生徒会に入ったらどうなんだよ」

いい加減というなら、こいつこそだ。

何度頼まれたって俺は生徒会なんぞに名を連ねるつもりはない。

「そういうなよ。いいじゃねえか、お互いに固い友情を確かめ合ったことだし。ここらで一線を超えてみないか律？」

「おまえ、自分の言ってること紙に書いてみる。多分体中から変な汗が染み出てくるぜ」

そんな冗談に笑い合う午後。平和過ぎる生徒会室。

厳密にいうと平和なのは俺だけで、九ノ瀬は滞納し続けた雑用（書類整理とか、そんなの）に追われている。闘争中で逃走中だ。しかしそれも自業自得。俺は親友の苦しむ姿を温かい目で見守るとしよう。どんな困難も己で乗り越えてこそ価値があるのだ。

「なあ九ノ瀬、おまえなんで生徒会長なんてやろうと思ったんだ？」
暇なので訊いてみる。ちなみに暇を潰す為に話をするのが目的ではなく、この場合は話することで九ノ瀬の作業を妨害することこそが暇潰しだ。そんな俺の目論みを知ってか知らずか、寛大な生徒会長殿は律儀にも顔を上げて対応してくれた。

「簡単なことじゃねえか、この学校の女子全員を俺の支配下に置く為だ。俺という存在を校内に知らしめることで餌場……健全な男女付き合いの輪を広げようと思ったわけだよ」

本気なのかそうでないのか。

どっちでもいいことだが、真相は予想がつく。何にせよ、俺はこの馬鹿な男と十年間幼馴染みとやらをやっているのだから。ちなみに九ノ瀬の目的が先の通りならば、それは結構成功を収めている。一年のとある時期にはハ又の噂すら流れたことがあったくらいだ。大蛇か。

「なあ、律。本っ当に入る気はないのかよ。おまえほどの奴を野に放っておくのは惜しい」

「意味違うからな。……何回でも言うが、俺はおまえの下で働く気なんてない。雑用が面倒ならおまえこそ会長なんて辞めちまえ。楽になれる」

「自分から引き受けた仕事を、中途半端で放り出せるかよ」
責任感が強いのか、そうでないのか。

九ノ瀬はシャーペンの芯をかちゃかちゃ言わせながら不敵に口元を吊り上げ、

「まあ、そう言ってもらえるのも今の内だと思えよ」
意味深なことを、予言みたいに述べた。

俺が九ノ瀬の言葉の真意を知ることになったのは放課後のことである。

生徒会室は多分まだ雑務書類の山に埋もれているだろうから、さっさと帰宅してしまおうと校舎を出た俺は、校門のところで思わぬ人物と遭遇した。誰だろう、朱空末那だ。いつかのように門に凭れ掛かって靴底でタップを刻んでいた。

「遅い！ このバカ！」

「……いや、遅いと言われても」

「つか俺を待っている理由が解らない。」

「ったく、人を待たせることに關しては超一流よね、あんたって」

「お褒めに与り光栄だよ。……って、なにしやがる!？」

がっちりと腕をホルド。

「任意同行よ」

「誰の任意を得たつもりだ」

「うっさい！ 黙ってついてくる！」

最終的にこうなるのか。半ば諦めて引き摺られていく俺。そこ、笑うな。憐憫の視線が四方八方から突き刺さる串刺し状態だ。これは中々に辛い。

「あたし、生徒会入ることにしたのよ」

そういえば段々足取りが旧館に向っているような気はしていたが。「好きにすればいいだろ」

「あんたも入るの」

どうにも、冗談では収まりきらない事態が起きているらしい。九ノ瀬の言っていたのはつまりこういうことだったのか。この拉致まがいが生徒会のすることかよ。あんな男に何故信任投票が集まるの

か、公正取引委員会か選挙管理委員会に贈賄でもしたんじゃないだろうな。

「嫌なの、律？」

「……………」

そんな顔をして訊かないで欲しい。

生徒会室のある休館がすぐ近くに見える。朱空は立ち止まって、荷物よろしく片手で引いていた俺を振り返り不安気な顔を見せた。
……卑怯者め。

「解ったよ」

不本意ではあるが止むを得ない。朱空に夢の続きを約束したのは俺だから。……本当に、発言には気を付けないと。

ともあれ、世界は今日も廻る。立ち止まることなく季節は流れて時は過ぎていく。残酷なまでに、無情なほどに、果たしなく、忙しなく、止めどなく。さあ、今日もこの世界を満喫しよう。囲われていて閉じたこの箱庭の中で、大切な思い出と大切な人達。今はまだなくしてしまうのが怖いから、同じ場所に留まっていたいと思う。世界を吹き渡る風が夕風に休むように。時には足を止めてもいいと、教えてくれた笑顔に追い付くために。今は遠くても、いつか、その輝きに辿り着けると信じて。

「――よろしくな、マナ」

精一杯胸を張って、今日に強く笑っていよう。

(f i n)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0092j/>

箱庭の少女、夕風の世界

2010年10月8日12時42分発行